

スター寺院内にある英の詩人エドマンド、スペンサーの墓を發くとである。是は素より、寺僧その他關係の人々の承諾なくしては行ひ難いことではあるが、詩人の棺臺を擔いだカムデンの言によれば、埋葬の際、詩人の棺と共に埋めたものに時の諸大家が、詩人の死を悼んで書いた弔詩や、悲の歌の類と、之を書くに用ゐた筆とがあるといふのである。此詩人埋葬の地の土は掘れば粉末となる程乾燥してゐるのであるから、前記の書き物は、まだ保存されてゐると思はるのである。もし果してさうであるとするれば、その中に、シエクスピアの書いたものもあるに違ひないといふのは、此の有名な詩人も、亦スペンサーの棺臺を擔いだ一人であつたからである。そして、今やシエクスピアの自筆なるものは、極めて罕であるから若しその眞の自筆が、新に發見されるに於ては、久しい前から世にやかましい、シエクスピアの自筆と稱するものが、皆眞にさうであるや否やの疑問を、解決するにも頗る妙ではあるまいとの説である。

□ グラミス 城中の 秘密室

英國には、ストラスモール卿の所有に係る一城がある。グラミス城と稱して

其の中には常に秘密の雲に覆はれた一室があつて、其の用位置並に入口は三名の人を措いては、他に之を知る者はないといふのである。してその三名とは主人公、その相續人、勿論一人前の人となつてから、並に室の管理者である。傳ふる所によれば、室の壁は厚さ五米（十六尺半）もあつて、戸は常に鍵を掛けて、密閉されてゐるさうであるが、人が怪んで、室の事を、前の三人に問へば、三人は必ず啞者か聾でもあるが如くに、皆口を緘して一言も吐かぬとの事である。そして、幾代經つて、所有主と管理人とは代つても、秘密は常に秘密で誰一人之れを發き得たものはないとの事である。

斯かる次第であるから、秘密に對する主人公の用意も、極めて周到である。例へば此に左官職人があつて、城内の壁の修繕に入り込み、少しも秘密室に就いて發見する所があれば、主人公は、之に多額の金を與へて、その家族と共に直ぐその翌日濠洲に立移住させてしまふとの事である。

□ 藍色の 薔薇の花

最後に、こゝに一の變つた秘密を解決せんとして四十五年間苦心したのみな

らず十五萬圓の大金を費して、到頭失敗して、明治三十五年に八十歳の高齢で死んだ變人がある。その苦心とは外でもない。藍色の花の薔薇を培養することであつたのである。

佛の大植物學者ドカンドールの説に據れば、植物界には元色とでもいふべきものが二ある。一は黄て一は藍である。此の二色は絶対相反對のもので、黄を藍に變ずるとも出來なければ、又藍を黄に變ずるとも出來ない。しかし培養の方法によつては、黄を赤にしたり、藍を赤にしたりするとは出来る。然るに、薔薇には黄花を開くものがあるから、是れて藍花の薔薇を育てることの出來ないことが判ると。老人は、此のドカンドールの説に、信を置かなかつたものと見ゆる。

物の形と大きさとの關係

物には天然物なると人造物なるとを問はず、其の形と大きさとの間に、一定の關係があるものである。此事は、近來に至り、漸く學者の注意を惹くやうになつて來たが、初めて之に氣附いた人は、中古天文學者として、名を轟かした、伊太利のガリレオガリレイ氏である。氏は下の如き意味のことを言つたことがある。此

處に大小二個の器械があるとして、どちらも同じ材料で出來、又各部間の比例も同じ様に拵へてあるとする。此の二器械は、見た所では、大小の差あるのみで、他に少しも違つた處はないのであるが、其の強弱の點に至つては、差があるのである。即ち其差は、大小兩者の質量の多少によるもので、同形、同材料、同比例のものでも、質量が大なれば、大なる器械の丈夫の度は、少くなる者である。即ち弱くなるものである、これは實際數學的に證據立つるとの出來るとである。此の規則は、獨り器械にのみ當てられるのではなく、天然人工、孰れのものにても、當てられるのである。此故に、物は同じ材料で同じ比例に拵へられても、其の大きさには一定の限りがあるもので、此の限りを超れば、物は次第に弱くなるのである。此理に由りて、馬鹿に大きな船を造ることも出來ねば、又馬鹿に大きな家屋を建つることも出來ない云々。

ガリレイ氏の言つたことは、如何にも尤も千萬のとてである。非常に大きな物を拵へるには、獨り各部間の比例を、一齊に大きくするばかりでは、不十分で、其上、更に一層強堅の材料を用ひなければならぬのである。又釘の如きも、鐵より一層強堅の金屬を擇ばなければならぬ。否各部の比例を大きくして、材料釘其

他のものには、尙一層頑強なものを擇ばねばならぬのみならず、同時に、或る場合には、各部の重さを軽減せねばならぬのである。

水中に在るものは、水の爲に其の重さの一部を軽減せらるゝのであるから、陸上に於けるよりも、一層其の形を大きくすると出来る。近來、非常に大きな軍艦が造られて、其の上に重い大砲が幾門も乗せてあるが、それでも、船が破壊しないのは、全く水のお蔭である。若し此重い大砲を乗せて居る大軍艦が、其の儘陸上に引き揚げられたならば、其の時こそ、船は自家の重さで、破壊し了るのである。

ガリレイ氏は、同じ大きさの竿でも、中空のものは、中が實なものより丈夫である。抵抗力が強いものである、と云ふとも、知つて居たのである。乃ち氏は天然物でも人工物でも、中空の物の、丈夫なることを利用して、重さを増さずに、丈夫な物を拵めることが行はれて居ると言つたことがある。昔し歐洲にて用ひた鎗などは、中空の柄を以て、丈夫に、而も軽く出来て居たと云ふのである。現在に於ては、軍艦の橋が、中空になつて居るのは、一は丈夫に、一は重さを減ずると云ふのが目的であるとの事である。

形の相似た物の質量は、其の表面の廣さと、一定の關係を示すものである。其

の結果小なるものゝ表面は、大なるものゝ表面に比すれば、甚だ廣いものとなるのである。物の形を小さくする場合には、其面積は、其の立積の減少する割合に、減少しないものである。随つて物は、小さければ小さい程、其の面積は、立積の割合に大なるものである。立積は、幅員を三乗して表はし、面積は、之を二乗して、表はすものである。尙ほ之を解し易からしめんが爲に、こゝに一個の立方體、骰子の形があるとする。其の立積は、 $6 \times 6 \times 6 = 216$ である(これは稜の長さとして)。此の立方體の稜の長さが、例へば八分であるとする。すると

立積は $8^3 = 512$ 面積は $6 \times 8^2 = 384$

となる。即ち立積と面積との比例は、五二と三八四となる。稜の長さが、六分のときは

立積 $6^3 = 216$ 面積 $6 \times 6^2 = 216$

となる。即ち立積と面積との比例は、二一六と二一六となる。今度は、稜の長さが四分であるとする。すると

立積 $4^3 = 64$ 面積 $6 \times 4^2 = 96$

となる。即ち立積と面積との比例は、六四と九六となる。今度は、更に一層小數

を取りて、稜の長さを二分とするすると

立積 $2 \times 2 \times 2 = 8$ 面積 $6 \times 2 = 12$

となり、立積と面積との比例は、八と二四となる。

以上四例に依りて見る時は、第一例即ち稜の長さが八分の時には、立積の方が面積より大であり、第二例即ち稜の長さが六分の時には、立積と面積とが同数であり、第三例の稜の長さが四分の時には、立積は面積より小數でありて、其三分の二に當り、第四例の稜が二分の時には、立積は面積の三分の一に減じて居る。夫て物の形が小さくなればなる程、面積は、立積の割合に、急に増大するものであるとは、上の例に依りて明々白々である。此の立積と面積との間の關係は、決して立方體ばかりに限るものではなく、何れの形の物にても當て然るのである。夫て空中から墜つる物が途中空氣の爲めに受くる所の抵抗は、物の形が小なれば、小なる程それ丈大となるのである。其の譯は、前に證明した通りに、面積は立積に比し急増するからである。小兒のおもちやの紙製蝶々が少し煽り立て、も、容易に空中に飛び廻るのも、全く厚さの甚だ小なるに比して、面積が非常に大で、空氣の抵抗が、それ丈大となるからである。雲や霧を形する水の小球子が、容易に地上

に落下しないのも、前と同じ理由に依る。又火山から噴き出す灰の小粒や蜘蛛が織り出す細糸が、永く空中に浮遊して居るのも、亦同じ理由に依るのである。河水から、土砂の沈澱する時にも、同じとが目撃せらるゝのである。即ち大きなものは、速に沈澱するも、極々小さなものは、容易に沈澱しないのである。

物の面積は、幅員の二乗數を以て、相比べらるゝものであるから、天然に於ても表面の作用に關する事柄は、皆其の幅員の二乗數の大小に依りて決するのである。例へば、物體が熱を發散するときにも、亦水分を蒸發するときにも、小さなものは大なるものよりも、立積の割合に、一層速に之を遂げ了るのである。又固體を液中に溶解せんとするときにも、之を小さくして溶せば、其の極めて早く溶くるのも、如上の理由による。

瓦斯や藥液が、小生物に働くにも、其の遲速は、其の働く小生物の大小によるのである。有害な微菌が消毒薬に遇ふて、速に其の活動力を失ふのも、以上の理由によるのである。結核菌の如きは、其の形棒状なるものであるが、其の徑は、僅々一ミリメートルの二百五分の一乃至五分の一で、ミクロツクスの如きは、其の徑一ミリメートルの二千分一である。因て適薬なれば、此等を殺すのは、少

時の間にあるのである。高等の植物にも、上述の關係がある。即ち小なる者は、大なるものより頑丈である。樹木でも、大なるものは小なるものゝ割には、枝梢が發育して居ないのである。是は小なる者が同じ割合に發育すれば、木は自家の重みで挫折するからである。植物も非凡に大なるものは、水中にのみある。水は前に述べた通り、體重を軽減する作用があるから、水中には、マクロシスチスの如き、其の長さ二百米にも達する藻がある。斯く長いものが、根は海底にあつて、葉の末端は水上に浮んで居る。又冬季になると、落葉樹は、其の葉を落としてしまふのである。是は、一は木全體の面積を小にして、多量の蒸發を防ぐ爲でもあるが、一は葉の上に積もる雪霜氷等の重みを避くる爲である。針葉樹の多く、落葉しないのは、枝の構造が一種特別で、重みを掛けられても、之が爲大損害を受けないやうにしてあり又葉も、細くして、蒸發面が割合に少ないからである。潤葉樹で、落葉しないのもあるが、是等は枝ぶりが丈夫で、且蒸發が多くても、差支のないやうに、葉が多肉多汁的に出來て居るのである。

針葉樹の枝の、一種特別なる構造を有すると云ふことは、木質の、白身と赤身と

の配布の工合を見れば、分るのである。赤身は白身より耐壓力が強くて、丈夫である。夫て白身は枝の前方に在りて、赤身は枝の後方に在るやうになつて居る。此の仕組は、枝ばかりでなく、幹にも見るのである。即ち風の多く吹き來る方側には、赤身が多く發育して、又斜に生へて居る幹では、赤身は下に向いて居る方側に在る。是等は皆天然の配劑である。

中空のものが、中實のものより、一層丈夫であることは、嚮に述べた通りである。が、植物でも、重い部分を支ふる爲に、莖が中空に出來て居る場合が、いくらかある。禾本の莖で、重い穂を、其の先きにつけて居る者は、中空である。穂がついて居れば、莖が折れたり、曲つたりする虞が多いのである。夫て自然に、さうなつて居るのである。莖が、中實であれば、中空のものに比し、大に弱いのである。竹が中空であるのも、其の莖が細い割に、丈高く、枝葉も割合に茂つて、全體が甚だ重いからである。竹が強風に遇ふても、嬌々として、容易に折れないのも、其の中空なのに、よるのである。肥前長崎では、竹の中空性を利用して、氏神の祭禮に、竹の藝と稱するものを演ずるのである。それは、人が直立した竹竿の先きに登つて、種々の藝をした後に、其の上に直立して、自ら體を前後に振ること、恰も小供のぶらんこ

の如くするのである。それでも竹は彎曲するのみで中々折れないのである。若し竹が中實であつたならば以上の如きことは決して出来るものではないのである。

植物の種子で、遠方に吹き飛ばさるゝものは、皆其の立積の割合に面積が大きく出来て居て成るべく空氣の抵抗力が多くなる様になつて居る。故に母體から落ちて、容易に地上に落ちないで、稍暫く空中に飛んで居る。其の内風でも吹いて来れば、之を幸に遠方に飛んで行くのである。又植物の面積が廣過ぎ、蒸發や熱の發散に、不利を來たす場合には、一時其の面積を小にする方便を有つて居る植物がある。即ち酸漿草の如して、此の草が其の葉を折り疊むのは全く面積を小にする爲である。

動物にても、體の表面は、其の質量に相應して出来て居るものであるから、體の成長には、一定の限りがある。此限りを越えて、大きくなれば、其動物の身體は、それ丈弱くなるのである。或る學者は、蛇の大きくなり得る限界を算出したと迄ある。動物も、限界を越えて馬鹿に大きくなれば、四圍の空氣の壓力、即ち自家の重さで潰れてしまふのである。此の壓力は、體面の大小によりて、増減するもの

て面積が大なれば、大なる程、それ丈大となるのである。ガリレイ氏は此の事を承知して居て、大動物の小動物より潰れ易いと言つて居る。則ち馬は七八尺の高所から墜ちても、随分其の足を折る患がある。犬は是くらゐの高さから落ちても、殆ど怪我をすることはない。猫は三間の高さから飛んでも、平氣なもので、蟋蟀は塔の上から落ちて、差支なく、蟻に至つては、よし月から落ちて來ても、怪我する恐れはないものであると言つて居る。此の點に於ては、小動物は大動物よりも、餘程頑丈である。此等の事實からして、人間でも、馬でも、其の身體の各部分の比例を變更せざる以上は、現在の十倍の大きさになることは出来ぬ。十倍の大きさになるには、各部分の比例を變更せねばならぬのみならず、骨が現在より餘程丈夫になるか、又は其の材料が變更せられねばならぬ。現在の比例の儘で大きくなる日には、人間も夫だけ弱くなるので、非凡に大きくなれば、自家の重さで倒潰するのである。

骨組は、動物が小なれば、小なる丈、きやしやて差支ないのである。他の部分と、同比例でなくて済むのである。骨組で節約した物質は、他の方面に利用するところが出来る。例へば角とか爪とか齒とか云ふ様なものを、一層鋭くするのも其

の利用の一である。

大きな動物が自在に運動し得るやうには、天然にも一の方便が考へてある。例へば魚の如く水中に棲むものにては、其の骨や肉がなるべく軽くしてあるのみならず、又水と云ふ媒質の中で殆ど重さなるものがないやうに仕組んである。即ち魚體の重さは平均すれば水の重さと殆ど同一になつて居る。それで魚の骨は陸上動物の骨の如く、自體の重みを負擔する役目を有つて居ないのである。水中に鯨の如き、其の形魚に似た大動物の發生し得るのも、水が身體を浮かすものであるからである。鯨は陸上に引き上げられるれば、見るも憐な有様になつて、骨の節々の結合弛み、體は自重で潰れてしまふのである。

動物の體にも、亦中空を利用せらるゝ所があるが、其の最も多く利用せられてあるのは、鳥の骨である。固より鳥の骨でも、全部筒や管の形ではなく、中に數多の横柱があるが、兎に角管の形に似て居るもので、其の軽い割合に、屈折壓力に能く耐ふるのは、全く中空の爲である。

魚は陸上動物と違ひ、其の大きさに制限がない様に見ゆる。これは、或は大きくなれば、其の游泳速度力が鈍くなる迄、他に變化を要しないからによるものか

も知れぬ。魚の身體を浮かすものは、水である。然し、水に浮くやうにするには、浮き得るやうな形にする必要がある。魚の形は、浮くに頗る適當の形である。蓋し魚が類の如何に拘らず、略相似た形なのは、浮く形に、略々一定の制限があるからであらう。但し魚も、肉食のものは、其の體が他より細長く、輕快に出來て居る。

鳥の胸は、其の形や構造に於て、魚よりも餘程複雑である。複雑であるが、其の兩翼には、二様の役目が附いて居る。一は、身體を空中に浮ばしむると、一は之を前進せしむるとである。此際鳥の身體が受ける空氣の抵抗は、飛翔筋の横斷面と、體の長さの二乗數とにより増減するもので、飛翔筋の横斷面と體長とは、鳥により種々に異なるものであるから、飛び方や其の速力にも、種々の違ひがある。又身體を空中に浮かすことの難易は、身體の立積の大小によるもので、立積は、身體が大きくなればなる程、面積に比し、激増するものであるから、胸の形や構造は、之に應じて變化しなければならぬ。随つて其の魚に比して複雑であるのも無理のないことである。

動物の筋力に就ての研究によれば、其の飛跳力は、筋の大きさのみには關係せ

ずして筋と身體の質量との間の比例に關係するものであるとの事である。又小動物は大動物に比し割合に重い荷を負担する力があると云ふのである。夫て又小さな飛翔動物が飛翔の爲に用ふる筋力は其の全筋力の僅に一部分にか過ぎないと云ふことである。

物の立積と面積との關係は前に述べた通りであるから陸上及び空中に棲む動物に於ては、其の體内に生ずる熱量と體外に發散する熱量との比例は體の大きさが變化する場合には、自然違つて來るのである。即ち體が小さくなればなる程發散する熱は割合に多くなるのである。此の理で、小動物は割合に多量の食物を要し、又割合に忙しく呼吸し、又寝に就くときも、身體を丸めたり、收縮したりして熱の多量に發散するのを防遏しなければならぬ。ミンサーイの如き小鳥が夜中寝むるときか、又冬籠りの時などに、數多相群集するの、上述の理に由るもので、蚯蚓、蜜蜂、蠶、蛇(或る種)等の多數集つて冬籠りするの、同じ理に由ると云ふことである。

若し體面が大又は小に過ぎて、目的を達すること能はざる場合には、天然は、又一種の便方を使用するのである。例へば、或る樞要の機官で、其表面を一定の場

所の中で、出來得るだけ大きくしななければならぬ時には、屈曲や溝で之を大きくするのである。例へば人類や高等哺乳類の腦面の如しである。又反芻類や肉食類の鼻殼が一種特別の形を呈するの、上の理由によるのである。以上述べた所によつて、物の形と大きさとは、一定の制限あるとが明かである。ウキツチングと云ふ人は左の如く言つたことがある。

一定の形の天然體中各部の勢力が常に其の平均を保つ必要ありて、又各部の大きさも、一定の比例を要すとせば、其の天然體は、或る一定の大きさ以外には成長すること能はざるなり。

播 摩 國 の 大 壺 孔 探 檢

明治三十九年七月中の事であつた。余は播摩國安栗郡富栖村の山間に岩面に鹿ヶ坪と稱する大小の圓孔があると云ふ談を聞いたので、是は定めし地文學に上る云ふ壺孔の類ならんと思ひ、翌八月に至つて、之が探檢に出掛けたのである。が、往いて見れば、豫想に違はず、圓孔は即ち一種の壺孔であつた。

初め、此事を余に告げたのは、當時臨時教員養成所博物科の生徒であつた梅田

廣治氏で、又余を實地に案内したのも同氏であつた。然るに是より先氏の大きに
苦慮せられたとは、村民の他郷人を壺孔所在地に入る、ことを非常に忌むこと
であつた。氏自身もつひ近村の安志村に住みながら、公然其の地を踏むことが
出来ず、小學校の兒童を購して竊に其の地に臨んだと云ふ位である。何故村民
が之を忌むかと云ふに、是は全く古來の迷信に基くので、つまり孔ある地は、一種
の靈場であるから、猥りに人が這入れれば、忽ち風雨の災がある、と云ふのである。
それで村民に孔のある所を尋ねても、之を教へて呉れざるは勿論、竊に之に入ら
んとすれば、投石などして、百方之が妨害に力むると云ふのである。斯かる仕宜
であるから、初め梅田氏も、余を案内すべしと約せられたもの、案内して如何な
る珍事の出来せんとも限らねば、氏は豫め之を郡長と村長とに諮られた爲に、
萬事都合よく行いて、探檢の當日には、村長同道、余を嚮導されたのであるから、余
は何等の故障もなく、實地を探り得たのである。此の事は、兩氏に向つてこゝに
深く謝せねばならぬ。

さて播州姫路の北々西凡七里の所に、安志と云ふ一小市街がある。此處から
安志川と稱する、楫保川の支流に沿ふて、北行すること凡一里にして、富栖村の本

村がある。是から更に川を遡ること凡二里にして、關と云ふ一小部落がある。
此部落は、富栖村の管轄内で、四圍は可なり高い山に取り巻かれて、川筋の行き止
りの處になつて居る。それで他に行くには、少くも一里は、是非後戻りをしなけ
ればならぬ。部落の位置は、川の右岸西側で、鹿ヶ坪に行くには、部落の前を通り
抜けて、直に川を左岸に渡りて、横谷に這入るのである。すると川から凡五六町
の處に、勾配急峻の溪流がある。此の邊は、一面樹木繁茂して、眞に幽邃の仙境で
ある。溪流の在る谷は、鹿ヶ谷と稱して、こゝが即ち鹿ヶ坪の所在地である。
溪底をなす岩石は、此の地方諸處に露出して居る石英粗面岩と稱する火山岩
で、此の火山岩面を、溪水は、場所によりては七八十度の急勾配を以て流下して居
るのである。且岩面は一齊に傾いて居るのではなく、諸處に段階状をなして居
るから、水は急勾配の處では、湍又は瀧の形をなし、段階の處にては、一時停滞して
瀧壺の形をなして居る。して此の瀧壺が取りも直さず丸く綺麗に刻れて、壺孔
になつて居るのである。

此の壺孔の大小深淺は、下流から上流に向つて列記すれば左の通りである。

第一孔

徑凡十尺

深さ凡六尺五寸

- 第二孔 同凡四尺
- 第三孔 同凡六尺五寸
- 第四孔 同凡十六尺五寸
- 第五孔(椭圆形) 長徑凡十尺 短徑凡四尺三寸
- 第六孔 同凡五尺
- 第七孔 同凡十七尺
- 第八孔 同凡二尺
- 第九孔 同凡一尺
- 第十孔 同凡三尺
- 同凡五尺
- 同凡三尺五寸
- 同凡八尺
- 同凡十六尺五寸
- 極めて淺し
- 深さ凡五尺
- 甚だ淺し
- 深さ凡一尺五寸
- 同凡二尺

第一孔の下方にも、一個の瀧壺があつて、可なり大きく且深くもある様であつたが、壺孔の形にはなつて居なかつた。
 以上十孔は皆多少水に充されて、深いものは、無論其の底を見ることが出来なかつたが、然し皆其の中に多少の石が這入つて居たことは確である。第六孔や第七孔では、中の石が立派に見えたのである。
 第四孔は、稍横孔の性質を帯び、傾斜した岩面に、水平の方向に穿たれてあつた。
 第五孔は、十孔中最も深いので、水満々として氣味の悪い様であつた。土地の人は之を底なしと稱へるさうであるが、測深の結果、前に掲げた通り、凡十六尺半であつた。

あつた。

直徑の最大なのは、第七孔であつたが、深さは割合に小であつた。又此の第七孔と、次ぎの第八孔とは、緩勾配の川底に上下に併んで居るが、其の併んで居る形が鹿の角に似て居るとの事で、鹿ヶ谷鹿ヶ坪などの名稱は、出たのであると云ふことである。然し余は其の形を認むることが出来なかつた。

第九孔は、最小のもので、水流より少し横に離れて居た爲に、一行の人が、中の水や砂礫を掃除して見た。すると、孔の形は殆ど水瓶のやうであつた。

第十孔は、十孔中の最も不規則形を呈して居るものであつた。

第十孔以上の川底は、緩勾配になつて、壺孔の出来る状態が備はつて居なかつた。それでも之を見ることが出来なかつた。

壺孔は、川底に出来るもので、其出来る條件は、石の回轉である。川底に凹凸があつて、水が素直に流れずに、多少渦巻いて流るれば、此處に在る石は、之が爲に回轉し、其の摩擦によりて、川底に孔を穿つのである。此の孔は、一塊の石で穿たれることもあれば、亦數塊時に多數の石で穿たれることもある。一たび淺い孔が出来れば、石は最早此の孔を去ることが出来ないのであるから、渦流に連れて、絶え

間なく回轉するのである。回轉すれば石其れ自身も磨り減らされると同時に孔も亦次第に大きく且深くなる。石の中には全く磨滅してしまふ者もあらうが、降雨増水の際には、上流から轉けて來る石が又孔の中に陥つて、新に摩擦の利器となるのである。

川底で、水の最も渦巻く所は瀧壺である。それで瀧壺は往々壺孔となつて居るのである。壺孔の特性は、多くは圓く綺麗に、而も内面は滑に出来て居るのである。地文學者は、此の壺孔の存在によつて、今は川底でない所でも、昔しそこに水の流れて居たとを認むるのである。現に武藏國秩父郡皆野村の荒川の沿岸には、今の水平より、數丈の上にある岩石面に、數個の大壺孔がある。夫て、昔しは河底が、今より餘程高い所にあつたとを知るのである。序に述べて置くが、初め此の壺孔は土砂に填められて、其の上には雜草が生へて居た爲に、吾々は度々其上を踏破しながら、久しく之を知らなかつたのであるが、偶此の處に架橋が始まつて、岩面に橋の支柱を建つるとになり、其の面を掃除したので、遂に壺孔が現はれたのである。然るに、惜哉支柱が煉瓦石で大きく出来た爲に、徑一間餘の大孔と其の他の小孔は皆セメントにて填充せられて、支柱の下になり、今は僅に徑二

尺ばかりのもの一個を除すのみである。

壺孔の出來る遲速は、渦流の緩急及び川底をなす岩石の硬軟によることは言ふまでもない。

富栖村から程遠からぬ鹿谷と云ふ地にも、大きな壺孔があると云ふ話で、これは其の土地で、龜ヶ坪と稱して、村民の之を人に見らるゝことを忌むこと、關より一層甚しいと云ふとである。余は初め此の龜ヶ坪をも、一見する考であつたが、鹿ヶ坪を見て其の豫想通りであつた所から、龜ヶ坪を見るの必要を感じて、其の探査を中止したのである。

兎に角、鹿ヶ坪は地文學上の一奇觀に相違ないから、斯學特志の人は、續々行いて見るが可い。見物人が多ければ多い程、それだけ見物と天候と關係のないとが、村民にも分るであらう。現に余が往いた時には、朝は荒模様であつたが、場所に着いた頃には、晴天となり、其の後數日間、天氣續きであつたから、天公も、此の時だけは、除外例として、土地に災を下さなかつたと見ゆる。村長の話に、迷信も多くは、老人株に在るので、村の寄り合などの節は、間がな隙がな其の謂れなきことを論しつゝあるとのことであつた。

富栖村と云ふのは、此の地方の模範村で、學齡兒童は、悉く學校に通學するとのとである。關の兒童凡三十名は二里もある本村の學校まで日々通學して殆ど欠席者なく、又其の父兄の熱心なる冬期日短の節は早朝夕景共に炬を照して、兒童の送迎をなすと云ふ實に感心な村である。因て當分は兎も角兒童が成人する頃には、今の迷信も消滅して、ほんの昔話と化し去るであらうと思はれる。

西 遊 瑣 談

先年米國を経て歐羅巴に旅行した時予が見聞したり實驗したりしたことは、その數少からぬのであるが、中で殊に著しいと思つたのを爰に列記して同胞諸君の一笑に供し度いと思ふ。

□ 不思議な論法

横濱から米國のシャットル港に渡る時船客中に東洋の基督教の傳道事業を視察して、歸國の途に在つた英國の一老紳士が居た。此の紳士は熱心な宗教家であつたと見えて、或る時予に宗教談を持掛けて、一體君の宗教は何だと言つた

から佛教であると答へたら、君は耶穌基督が昔此の世に存在したことを信ずるか、と言つたから、無論之を信じてゐる。併し、僕は彼を孔孟釋尊等と同じく、聖人視するのみで、神とか神の子とかいふ様な人類以外の者とは思はないと答へると、紳士は躍起となつて、其は又何故にと反問したから、予は下の如く言つた。僕は理學中、殊に、博物學を研究する者だ、それで、人間以外の精力を有するもの、存在は無證據では之を認むることが出来ない。すると紳士は、基督が死後蘇生昇天したのは、その神である立派な證據ではないか、と言つたから、予はその蘇生昇天こそ一層立證すべきものではないかと思ふと、返答したら、紳士は不興氣な顔して、それは立派に聖書に載つて居る、尙ほ之を疑ふなら、それは恰も英國史に載つて居る、ウキリヤム、ゼ、コンケロールが昔、英國に上陸したことを疑ふと同様である、と途方途徹もない論法を持ち出したから、予は、其れは話が違ふ、一方は普通の出來事、他方は他に例のない出來事、此の二者を混同しては、議論にも何にもならないと言つたら、紳士は佛然として、脇目もふらずに立ち去つた。

□ ナイヤガラ瀑布の水煙

ナイヤガラの瀑布の、その幅甚だ廣く、之を落下する水量の大なることは豫て書物で讀んで居たから、別に驚きもしなかつたが、水の落下する勢で瀧壺から舞ひ揚る水煙の盛で、その空中高く昇騰する状の宛がら淺間山の噴火口から出る、噴煙のやうに見えた時には、頗る意外に思つた。是は書見の際には、水煙の事には少しも思ひ及ばなかつたからである。

□ 世界最大の洞窟

合衆國の地理書を讀んだ者は、ケンタツキ州に、マンモス洞といふものゝあるのを記憶するであらう。予も亦既に幼少の折、地理書に就て、その世界の奇勝であることを承知して居たから、紐育府に着くと直に、之が見物に出掛けた。洞窟の地は寂しい林中で、紐育から約一千哩の南西である。洞窟の附近には、見物客の宿泊すべき一軒の旅館があつて、其處で見物料を拂らつて、案内をして貰ふのであるが、予は朝九時に這入つて、晩の七時に出て來た。その間十時間、洞内

は丸て銀座の大通りの様に、廣い所もあれば、又辛うじて身體を通すやうな狭い所もある。何さま予が歩いた道程は、約七里もあつたらうかと思はれる。洞内、天井、側壁等の、水の作用で奇々妙々に彫刻されて居る状は、丸て日光廟の彫刻を見るやうで、驚く驚かないのつて、殆ど膽を潰してしまつた。洞内には、舟渡し、の箇所があり、瀧があり、井戸の様な底なしの穴があり、又辨當を遣ふ場所もある。聞く所では予が廻つた部分は、洞内の一小部で、全體を見やうと思へば、我が二十里から歩かねばならぬと云ふ事であつた。以て、此の洞窟の極めて大なることが分る、米國のケンタツキ州地方に遊ぶものは、一度見物して話の種を造るのもよからう。

□ 銀杏の並木

近年東京市では、市内の並木の改良を思ひ立つて、先づ市役所前に、我邦と支那とのみ産する銀杏の木を試植したから、洵に結構な思ひ付きと考へ乍ら、米國ワシントン市の公園に行つて見ると、此の銀杏木が數十本、ちやんと路の兩側に植ゑてあつて、而かも枝葉繁茂して、銀杏並木のトンネルが出来てゐた。それか

ら歸朝して、一日帝國大學内を歩いて居ると、大學の總長が自分の命令で、同學構内に植ゑさせた銀杏の並木を眺めて、切りにその風致を愛でて居たから、予は總長に向ひ閣下の思ひ付きは至極賛成ですが、銀杏の並木は既に外人に先んじられて居るとを御承知ですか、と言ふと、何處にそんなものがあると言はれたから、私は先年ワシントンて之を見ましたと答へると、總長も洵に驚いたやうな顔して居たが、予も亦米人の素早いには一驚を喫した。

□ 文明國人中にも蠻人

瑞士國ゼネバ市に居た時、一日或る園遊會に招かれたから、時刻を違へず行つて見ると、學者紳士貴女等の寄合で、下品な人間は一人も居ないやうで有つたから、予も成る可く上品振つて降らぬ事などしやべつて、人の氣を損ねないやうに要心して居ると、突然予に獨逸語で、日本の大學には幾名のハイデンがあるか、と言つた男があつた。ハイデンとは、英語のヒューゼンで、邪徒といふ意味の字であるから、予は知らぬ振りして、ハイデンとは何を言ふのかと問ひ返したが、矢張只だハイデン、ハイデンと言ふから、日本には佛教徒に神教徒、それから約十萬の耶

蘇教徒があるのみで、ハイデンといふ様な者は一名も居ないと答へたら、怪訝な顔をして行つてしまつた。蓋し此の男の意は、耶穌以外の教徒を指したのであらうが、場所柄をも顧みず斯かる無禮な語を用ひて、場所不似合の質問をすることは、實に驚き入つた人間だと思つて、後日之をゼネバ大學の一教授に話したら、非常に氣の毒がつて、文明人と自稱する者の中にも、そんな野蠻人がゐるから困ると言つた。

□ 美麗な北光

予は歐羅巴巡回中、鳥渡アイスランドの島に渡つて見た。すると、殆ど毎夜のやうに北光を見た。その以前には、北光といふものは繪で見た許で、實物はどんなものであるか、一向見當が附かなかつた。予が見たのは多くは天一面に擴がつて、北方にのみ見えるものではなかつた。それから、その形は天に幔幕をぶら下げたやうなものもあり、又多少弓狀に彎曲したものもあつたが、併し最も多かつたのは、冠形と稱して、頭上から四方に向つて、探海燈を照らしたやうな天一面に現はれたものであつた。光の色も、探海燈のそれに似て、多くは白かつたが、

罕には少し赤みがしたのや、青みがしたのなどもあった。そして、予の最も意外に思つたのは、光が時々刻々、其の形を變ずることであつた。即ち現はれたかと思へば、次第に薄くなつて消え、消ゆるかと思へば、又俄かに現はるゝといふ、随分奇態なものであつた。出現の時刻は、日が西山に没して眞暗になつた頃であつて、それから十二時過ぎまでも續いて出て居た。人の話に十二時後になると、光力が大抵弱くなるといふことであつた。月夜には光が判然しなかつた。

□アイスランドの風光と氣候

アイスランドといふ島は、歐羅巴漫遊者の殆ど全く行かない所であるが、我が北海道より大きな土地でありながら、到る處火山質の岩石累々として、植物は少しばかりの雜草あるのみで、洵に僻な所であつた。然し山は澤山あるから、樹木さへあれば、我邦の様な美國になるであらうと思はれた。氣候は夏でも我が櫻子の時節ぐらゐであるが、冬は我が東北地方から、北海道ぐらゐなもので、夏の涼しい割合には、寒くない所である。予が此の島に居たのは九月中であつたが、其

の陽氣は東京の十一月末から十二月に掛けての様であつた。此の島では、日本人を見たことのないものが多かつたので、到る處人が予を見物に來たので、予は丸で見せ物に行つたやうなもので有つた。

□啞と語る

諾威の都クリスチヤニヤから夜汽車に乗つて瑞典の都ストックホルムに行く途中、或る驛で乗り換へがあつたから、乗つて居た列車を去つて、他の列車の客室内に這入つて見ると、薄暗い所に二名の客が向ひ合つて寝てゐた。それ予は隅の方に小さくなつてゐると、天も次第に明るくなつて來て、顔も能く見えるやうになつた。すると、一名の客が目覺して、予に何か話しかけるやうな風をするから、予は瑞典語は話せない、然し筆談ならば少しは試みてもよいと、不完全な瑞典語で言ふと、先方も何かもじ／＼して居て、如何にも變だ。それに他の一客は、微笑しながら吾々二人を見詰めて居るから、尙更變だと思つて、暫らく様子を見てゐると、予が面前の客は啞であることが分つた。それから新聞の片端を以て筆談をして見ると、啞先生は、自分の故郷である瑞典のウプサーラ町に歸る

所であつたが、予の日本人であることを知らなかつた模様であつたから、其の旨を紙に書くと、先生俄に脱帽最敬禮をして、日露の役に我が同胞の勇猛であつたことを賞し、且つ手眞似て日本人の小さくて敏捷なこと、露人の肥大で遅鈍なことを示したが、その舉動が如何にも滑稽なので、終に予は傍への客と共に吹き出さざるを得ざるに至つた。兎に角當時瑞典人の我に同情を表したことは非常なもの、此の啞先生もその一人であつたのである。

□お前は芬蘭人か

ストックホルムに着いて間もなく、ウプサーラの大學見物に出掛けて再びストックホルムに引き返す時、汽車の予が居た室内に、二名の瑞典人が、一名の少女を連れて乗つて居たが、予を見て、お前は芬蘭人かと問ふから、日本人だと答へると前の話の啞と同じく、いと丁寧な敬禮をして、日露の役に露の敗北したのを、自分等は愉快に思つてゐると言ふから、君等の職業は何だと聞いたら、麵麩屋だと答へたから、予は麵麩屋まで日本最負するとは、瑞典人は能く露人を嫌がつて居るものと思つた。是れ、言ふ迄もなく、十八世紀に瑞典のチャールス十二世が露

のペートル大帝に負けた以來、兩國の常に相反目してゐる結果に外ならぬのである。

□湯屋で驚く

ストックホルム滞在中、予は一日町の湯屋に行つた。一體、獨佛英等の湯屋では、浴室に這入ると、中からびんと錠を下して、それから着物を脱いで湯舟に飛込るのであるから、その積りてどん／＼二階に揚つて行くと、肥つた年増の女が出て来て、予を案内した室は、湯舟はなく、寢臺風の長椅子二臺湯上りのタオルや湯かた、鏡臺等のものがあつて、化粧室と思はれた。しかし此處に着物を脱ぐ處であると思つて、椅子に腰掛けて四邊を見廻すと、前の女が幕で仕切つた入室に黙つて立つて居るから、幕を締めて裸體になつて、後方の湯舟のありさうな室の戸を開けやうとしても、錠が下りて居て開らない。それでは矢張幕で仕切つた室から行くのであるかと思つて、幕を開けると、前の女がまだ立つて居る。喫驚して幕を半分隠して、あつちへ行くと手眞似をしたら、笑ひながら向ふの室に這入つたから、締めたと思つて急いで、湯舟室に入り込んで、湯を遣つたが、若し

是が我國なれば何でもないこと。しかし西洋では男にさへ素裸を見せない位だから、女には尙更のこと、それで予は此の湯屋では大に面食つたのである。それから數日の後、公使館に行つてその話をすると、その女は我國の番頭と同じこととて、身體をすつかり流して呉れるのであると聞いて二度喫驚。さうか、それは洵にしくじつたと云ふと、館員の一人が成る程それでだ、僕が昨日その湯屋に行つたら、湯女が時々物慣れぬ外國人が来て、自分を邪魔にすると言つてゐたと言つたから君の聞いた其の外國人といふのは僕を指したのに違ひない、實に間の悪いことであつたと話したことがあるが、斯うであるから、ストックホルムの湯屋は、東洋風で存外開けてゐると賞めて遣つてもよいのである。

□ 芬 蘭 人 の 深 切

芬蘭の都、ヘルシングボルスに行つて、二日間滞在したが、此の間、大學地學教授ロスベルク博士の案内で、諸處を見物するやら、又諸方から馳走に招かれるやらして、殆ど忙殺されさうであつた。是は一は、予が同國人同様蒙古人種であるにもよるが一は、同國人が非常に露國嫌ひであるからである。芬蘭人の、日露

戦争に就ての話は、頗る面白い。曰はく、
「戦争の始めには、露國新聞の挿書に、露人が盛に日本人を銃劍で芋刺しにした所などを出して、如何にも、毎戦大勝利を得たかのやうに見せかけたのであるが、後には段々真相が知れて来て、遂に人が此等の繪や新聞を信じないやうになつて仕舞つた。」

「露國の本國から戰場に送られた、彈藥彈丸等を入れた箱の中には、間々土石を詰め込んだものがあつたが、此等は皆官吏が彈藥彈丸に費すべき金を、自家のポケットに着服した結果であつた。」

「戰場に軍用電線を送ると、その針金が、兵士の靴を纏ふ紐になつたことが間々ある。是は破れ靴を穿かして置いて、換りの靴を送らなかつたからである。」

「黒溝臺を襲撃したグリツペンベルク將軍は、芬蘭人であつたが、クロバトキが將軍を悪んで、少しも援兵を出さなかつたから、一度取つた黒溝臺を、日本人に取り返されてしまふに至つた。是に於て將軍はクロバトキの處置を憤慨して、直に戰場を去つて、國に引き返してしまつた。」

「對馬海戰の際に、三隻の巡洋艦オロラ、オレグ、ゼムチウクを率ひてマニラに落

ち延びたエンクイスト提督も、芬蘭出身者であつたが、本國に歸り着くと、直に軍法會議に廻されて詮議の結果その所爲卑怯なりと罰せらるゝに至つた。實は船を無事にマニラまで漕ぎ付けたのは、破壊さるべき船を助けたのであるから、謂はゞ國に忠義を盡くしたやうなものである。夫に、提督を罰するなどは、以ての外である。

以上の談話は唯一二例に過ぎないのであるが、是に因ても、芬蘭人が如何に露西亞反對であるか、分る。

又ロスベルク博士の如きは、自分の門弟中に、トイゴリといふ姓のものもあれば、オイヤマといふ姓のものもある、と言つて喜んで居たから、一體貴國の人は、昔何れの方面から移住して來たものであらうかと聞いたら、亞爾泰山附近からの説であると言つた。成る程、芬蘭人中には、東洋式の面相が少くない。尤も頭髮や皮膚の色から、眼の凹んだ所などは、白人種と、雑婚の故か、歐洲人に大いに似て居る。

□三日間の絶食

十月の中旬予は、露國から匈牙利に入つて、其の都、ブダペストに行つたが、此の地出立の前日匈牙利料理といふのを食べて寢に就くと、夜中から腹が痛み出して、その痛みが朝になつても止まないから、下痢でもするかと思つて見みたが、中々さう行かない。然し、その日は地質調査所の陳列所を見る豫定であつたから、痛いのを我慢して、十町ばかりもある地質調査所附近まで行くと、腹痛が益々激しくなつて、殆ど立つて居られないやうになつた。それで、調査所前の公園の共同椅子の上に寝轉んで見たが、晴天であるに拘らず、寒さは東京の寒中のやうだから、長くは寢て居ることが出来ない。詮方盡きて宿屋に引き戻し、午後四時頃まで寢臺の上に休んで居たが、痛みは少しも薄らがない。其内豫定の出立時刻が近づいたから、遺憾ではあつたが、陳列所の見物はよしして、馬車で停車場に駆けつけて見ると、汽車の出發までは、まだ少し時間があつたから、待合室のソファの上に横になつて居ると、少しは輕快になつた様である。それで、餘り絶食も悪からうと思つて、食堂に入つて、珈琲に牛乳を入れて飲むと、又候痛みが増して來た。夫から汽車に乗つて、終夜苦んで翌朝になつて始めて痛みが止まつ

た。夫からといふものは物を食べるのが怖くなつて、食べる氣にならない。又旅の空で病み付くのも、心細い次第と思つたから、治るまで絶食と極め込んで、其の日と、その翌日とは、時々紅茶を飲んだ切りで、何んにも食べなかつた。そのお蔭でか、四日目、伊太利の羅馬に着いて、麵麩を試みても何事もなかつたから、もう占たと思つて、其れから本式の食事を取ることにした。今考へれば、何んでもなかつたやうではあるが、其の當時は非常に苦心した。

□ 日本語で怒鳴り附ける

羅馬からネーブルスに行つて、市中を散歩して見ると、十月の末でありながら、東京の秋の彼岸頃の陽氣であつた。然るに、予は、露國や匈牙利に居た時と同様に冬装束をして居たから、暑い何んのつて溜らなくなつたから、何處か涼しい處がありさうなものと、あちらこちらと歩き廻ると、幸ひ海濱の一大公園に出た。それで其の樹蔭を徐歩して居ると、後方から年若い伊太利亞人が英語を以て繪葉書を買へと云ふから、予は要らぬと答へやうと思つたが、いや／＼言葉を掛くれば、向ふは商賣必す根氣強く勤めるに違ひない。夫よりいつそ手眞似て彼れ

を去らしめるに若かずと思つて、色々手眞似をやつて見たが、中々去らない。買はない間は、何處迄もといふ風で、予に付き纏うて来る。夫て予も、五月蠅くなつて来たから、英語で怒鳴りかけたが、いや／＼彼れに解る言葉を用ひては、こちらが根氣負けをするから、こゝは一つ彼を驚かしてやる所だと思つて、大きな聲で、「入らぬといふのに五月蠅い奴だ、あちらへ行け」と親譲りの日本語をやつたら、利き目は靦面「アージャボネセ、ジャボネセ」(伊語で「日本人だ日本人だ」といふこと)を云ひながら、向ふの方へ行つてしまつた。是に於てか、予は心中予の策的中したのを喜んだ。

□ 宿屋の失火

予は七月中、瑞士國ゼネバ市の一旅館に一箇月ばかりも泊つて居て、それから僅か手下げ靴二個の外、他の荷物は皆、其の旅館に預けて、歐洲諸國の巡回と出掛けたのであるが、十月の末に伊太利亞に到り、それから久し振りでゼバネの停車場の前に出て、前に泊つた宿屋の迎ひ馬車が来て居るだらうと思つて、そこらを見廻して見たが、一向見當らないのみならず、外の宿屋の馬車も甚だ少ない。そ

れて、是は寒い時節で、夜半近くでもありするからそのせいであらうと思つて、儘よ僅かに二三町の處歩いて行くと、靴を兩手に下げながら宿屋まで漕ぎ付けて見ると、戸が締つて居る。變だなと思ひ乍らチン／＼と呼鈴を押すと、内から一人の男が出て来て、何の用だと云ふから泊り附けの客だと答へると、此の内は數日前火事を出して、今は營業中止中だ、是れこの通りと言ふから、四邊を見廻すと、成る程煉瓦の毀れが散亂して居る。夫て予は膽を潰して、それなら兼て預けて置いた荷物は如何したと予の命から二番目の大靴のことを聞くと、そんなものは僕は知らぬ、明朝来て見るがよい支配人が来るからと冷に答へたから、貴様は何者だと尋ねると唯の番人だと言ふから、夫れては仕様がなと思つて、外の宿屋に泊つたが、其晩は荷物が氣になつて眠られない。あゝ、もう一週間も早く歸つて来たなら、無事に荷物に有りついたかも知れないなど、愚痴をこぼして居る内夜は遂に明けてしまつたから、朝食を終るや否や、前の宿屋に飛んで行くと、兼ねて見知りの支配人が居て、火事は烟突から出たらしく、大分天井を焼き抜いたが、貴下の荷物は無事で、此處にあると廊下に置いてあつたのを指した時は、先々安心と胸をなて下ろして、三年ばかりも命が延びたやうな氣がした。

□ベスプ火山に登る

ベスプ山は歐洲切つての有名な火山である。夫てネーブルス迄来た序に見て置かうと思つて、之に登る方法を聞き合せると、明治三十九年の破裂までは山登りの電車があつたが、今は毀れて運轉しないから、徒歩で登るか、左なくば馬で登るの外ないと言ふから、それは馬にしゃうと言ふと、それはボンベイまで汽車で行き、ボンベイから山麓まで馬車で行き、山麓から馬に乗るとの事であつたから早速ボンベイに出掛けて宿屋に其話をすると、馬車が来た。馬車に乗ると、英語を操る案内者、英米の旅客多き爲に案内者は多く英語を話すが同乗した。馬車は直に麓に駈け着けて、或る家の前に停つたすると案内者が此處から馬になるから下りろと云ふ。因てその通りにすると今度は家の中で休めと云ふ。やすむと家の者が、一壘の白葡萄酒(此の邊で醸造するもの)を持って来て飲んで呉れと云ふ。然し少ししても飲めば、一壘二リラ(約八十錢)を拂はねばならぬから僕は酒嫌らひだと云つては見たが、日本人は吝嗇だと思はるゝのも強腹と思つて、先二リラを拂ひ、直に酒を案内者と馭者に飲ましてしまつた。其の内二頭の

馬が来た。一頭は予の爲、一頭は案内者の爲であつた。夫から此二頭の馬に對して一人の馬丁が附いた。さてこの人間三馬二の一行が山を登り始むると、三十九年の破裂に流れた焼石の爲に半ば之に填まつた村、半焼の寺院、丸坊主になつた森の木などがあつて、其の慘状は目も當てられぬ程で、焼石の害は斯んなものかと、實は日本の様な火山國に生れた予が目にも頗る目新らしく見えた。それから段々登ると、一軒家に來た。此處で休んでくれといふから馬から下りると、又葡萄酒を持つて來た。飲み度ないといふと案内者と馬丁とが咽が乾くから飲まして呉れと云ふ。仕方なしに二本を飲まして四リラを拂つて、又登ると、今度は柵を繞らした所があつた。這入ると小屋があつて番人が居た。此處で又々一休、又々ニリラと云ふ工合で實に旅人の巾着を絞るやうにしてあるには、少々驚かざるを得なかつた。夫から又登ると山腹が非常に峻しくなつて、九合目邊から上は馬が利かない。因て歩くと眞黒な焼石の砂礫で、富士のハシリ見たやうな所。三步進めば二歩退くといふ難所。然し山路は得手ものさつさと登ると、一名の伊太利亞人が予の前に來て細引を出してすがれと言ふ。引張り上げるつもりのだ。予は直ちに之を斥けた。けれども、根據強く予より

數歩さきに登つて度々細引を出すから、予は日本人だ山登りには慣れて居るそんなものは入らないと言ふと、それなら酒代頂戴と手を出すから、馬鹿をいふなと怒鳴つたら、悄悄として下りて行つた。それから頂上に着いて、火口壁に立つて火口内を覗いたら、存外小さな火口で、底は砂礫ばかりで、豫期した熔岩がない。又繪にあるやうな大噴煙もない。只火口壁の内面諸所から少しづつ、硫氣を吐き出して居るのみで、洵に詰らなかつた。案内者にどうして斯う活動が鈍いかと聞いたら、三十九年の破裂後、山は鎮靜してしまつたと言つた。火口より一層予が意に協つたのは、ネーブルス灣を視下した景色であつた。その景色は、丁度富士から視下した清水灣の小規模のものであつた。下山の際にも山腹で葡萄酒二本麓で一本、夫から馬丁、馭者案内者等の心附けを迫られて、馬代や馬車代よりも、此等不必要的入費が遙に多くなつた。伊太利人の外國人と見ると無暗に食ひたがるには驚き入つた。之を思ふと、我が商人の觀光の外人に高價で物を賣り附けやうとするのは、大々的の罪作りだ。

□ 瑞士の富源は旅客の財囊

瑞士國は、我九州に四國の半分を加へた位な小國であるが、風景の佳いので歐羅巴の公園と云はれ、觀光客の此の國に遊ぶ者年々幾百萬あるか知れぬ。それで湖水には遊覧船を浮べ、山には山登電車を設けて、宿屋萬端の設備迄到れり盡くせりと云ふ有様。夫て旅客が宿屋に落とす金額が、一ケ年に積もると、四千萬圓と八千萬圓との間にあるといふこと。それで之に旅客が土産物等に費す概算の出來ない金額を加へたなら、随分大きな金額に上るに違ひない。評判によつても、瑞士の富源をなすものは、旅客のポケットであるといふのである。

□ 浦鹽は何時取るか

巴里の宿屋に居る頃、同宿の露國人に新聞通信員と自稱する者が居た。その言に自分は日露戦争の前には旅順に居て新聞の通信をして居たが、南山の役に捕虜となつて松山に送られ、永らく同地に滞在して少しは日本の事情も知り又言葉も聞き嗜つたと言つて、時々早う今日はぐらゐの日本語を遣ひ、又或時は

日本の看護婦の深切な事などをほめて愛嬌を振り蒔いて居たが、一日突然予に向つて而も眞面目で、浦鹽は何時取るかと云ふから、予は最初は笑つて答へなかつたが、同じ質問を度々繰り返すから日本人は泥棒でないから人の物を横取るやうな事は決してないと言つてやつたら、不審な顔をして予の言を信じない模様であつた。是は蓋し露人の日本を恐れる一證で、彼等の中には右の様な考へを有つて居るものがいくらもあると見える。

□ 倫敦の霧

冬季、倫敦市に霧の多いことは有名なものでも早くから之を聞いて居たが、霧といふのであるから、我國で見るとやうな霧であらうと高をくゝつて深くも考へて居なかつたが、向ふへ行つて見ると、思つたとは大違ひ、實に驚いてしまつたから、一寸之を無經驗の人に紹介したくなつた。

予は一月二日の晩に倫敦について、早速宿を取つて翌朝九時頃、知己訪問の爲め宿屋を出て見ると、それまで多少明るかつた天が、俄かに眞暗になつて、而も夜間より悪いのは、街燈が皆點火してない。それで是では溜らぬ、速も初めて訪問

する人の宿所を捜す譯には行かぬと大に行くの躊躇して見たが、儘よ折角出たものやれる所までやへて見ると考へて、手探りに附近の地下電車停留所まで漕ぎ附けて、夫から豫定の停留所まで乗つて、そこで下りると、漸く街路にも火が付き店頭にも火が付いたから、どうか向ふの家を捜し當てる事が出来たが、その間といふものは、眼が溢くつて溜らなかつたから變なことだと思つて居たが、此の霧と眼の溢い謂はれば、こうであつた。即ち此の時の霧は英人が黄霧と稱へるもので、全市百萬戸もある家々の煙突から出る煙が皆々霧と共に往來に舞ひ下つて、之に黄色を帯びしめたのである。黄霧が下ると、暗夜も同然、否それより一層悪いといふのは、街燈の効力が無い。如何に明煌々たる光でも四五間離れば見えなないのである。予は從來霧は白いものとのみ思つて居たから、此黄霧を見て非常に驚いた。予は一月中に三回の霧に會つた。一度は日が暮れてからであつた。此時予は散歩中であつたが、一尺先は闇の夜で、人道を行く時には人に突き當りはしまいか、車道を横ぎるときには、電車や馬車に衝突しはしまいかと、大々的心配で宿屋まで歸つたことがある。勿論こんなときには、市の交通機關は全く其の運轉を中止するのであるか、又は徐行するのである。市

内に黄霧が下りた時でも市外に出れば白霧である。白霧は交通機關に大した支障を與へない、此の白霧は北海道や樺太のガスによく似て居る。一體倫敦の冬は、天が非常に朦朧として日光の出た時でも其の力は極めて微弱なものである。

□ 家屋の傾斜

阿蘭陀のアムステルダム市の町を散歩して居ると、一軒の非常に前の方に傾いて居る煉瓦家屋に眼がついたから、オヤ、市街の煉瓦造りが前のめりをして居るとは、珍らしいものだと思ひながら、少し進んで行くと、又同様の家があつた。夫て家毎に氣を付けて見ると、傾斜して居るのが頗る多い。して其の傾斜は家が櫛比して居るため、多くは前のめりである。其後ライデン市に行くところにも傾斜家屋が多かつた。して見ると、原因はみな同一で、つまり地盤にしまりがないからに違ひない。地理書を讀んだ者は皆知つて居る通り、阿蘭陀と云ふ國は卑低の地が多く、殊にアムステルダム附近の如きは實際海面下にあるといふ珍無類の土地である。素より海水が押しよせて來ては大變であるから、大

丈夫な海除けの堤防が築いてあるが、兎に角斯様な土地柄であるから、建物の傾くのも全く無理はないのである。

□ 汽車内の乞食

西伯利亞鐵道に乗らうと思つて、伯林からワルソウに行き、ワルソウから露國のモスコイに行く途中、或る停車場に着くと、車内に穢ない男が這入つて来て何か妙なことを言ふから、側の露人に聞くと、乞食だと言ふ。それからその露人が二コペーク(約二錢)の銅貨一枚をやつたら、警一瞥して、こんなはした金は入らぬと突き戻して行つてしまつた。それから西伯利亞線でも、停車場のプラトホムで旅客に錢を請ふて居た乞食を見受けた。一度は二三人の子供が車内に這入つて来て、東洋風に手と膝とを下について頭をベコ／＼下げて居たが、車掌の一喝に遇うて宙を飛んで逃げて仕舞つた。汽車内の乞食とは生れて初めての經驗。こゝらが露國式かも知れぬ。

近 世 ロ ビ ン ソ ン 物 語

□ ウキリアム、マクキツボン

ロビンソン漂流物語とは、昔英國の作家デフォー氏が著はした子供の讀み物として、世界に其の名を轟かしたものであるが、元來此の物語は、スコットランド人のアレキサンダー、セルカークが南亞米利加附近で破船して、大海中の一孤島に漂着した話を土臺として、面白可笑しく作り出したもので、その主人公であるロビンソンは、破船の結果、餘儀なく獨り島住居をすることになつたのであるが、爰に此の文明の世の中に、而も自ら好んで洋中の一孤島に獨住居をするものがあらうとは、何人も思ひ及ばざる所である。

此の孤島住居の近世ロビンソンともいふべき者を發見したのは、明治四十一年から二年にかけて、南極を探險した英のシャックルトン氏を乗せて、南極地からニウジールランドへ引き揚げたデービス船長の乗つてゐたニムロット號で、其の島はニウジールランドを南に距る二百八十里の、マククエーリーといふ大海中に

孤立する極めて淋しい島である。

デービス氏が特に此の島に立寄つたのは、此の島で動植物を採集する爲であつて、決して之に住居する人間を訪ふ爲ではなかつたのである。氏は又そんな人間が此島に居やうとも思はなかつたのである。

さて此の孤島に、人が住居をして居ると云へば、或は此の島は餘程好い所であるやうに思はるゝかも知らぬが、デービス氏の記事によると、決してそんな所であるとは思はれないのである。氏の記事は左の通りである。

此の島が世界中最良の土地でないことは、島が到る所岩のみでその岩は海岸では多く船の寄り附けない暗礁をなし、内部では秃兀たる山をなし、其の上を暴風のやうな強風が間断なく吹き巻くので明である。但し肉食をする者にはペングイン、海犬、アシカ、野牛の四動物が居るからどれを食べやうと少しも不足はない。飲料水は雨水のみである。しかし餘り淋しい場合には前の動物の一を其の友とすることも出来る。

デービス氏が島に立寄つて發見した人間は、ウキリヤム、マクキツボンといふ男で此の者は世界の文明を後に見て、自ら好んで此の島に投じたものである。

島には其の西側此の處は、難破船の様々な屑に富んでゐるには勿論のことまた東側にも投錨でもしやうと思ふ所は全くない。デービス氏は初めルシタニヤ灣といふのに投錨して、此處で種々の採集をなして、それから島の北の方に行かんと、徐に沿岸を傳ふて船を進むると、無人島と思つてゐた此の島に細い煙の立ち昇るのを見て大に驚いたのである。此の時氏は、此の島には破船した者でも上陸してゐるのかと思つて、雙眼鏡を取出して島上を眺むると、氏は又綺麗な二個の家屋の建つてゐるのを見て、再び驚いて海獸捕りて此處に一時的に住居をするものでも居るのかと思つたのである。蓋し此の考へは無理のない事、此の頃でこそ此の島附近は、濫獲の爲め海獸も大に減じたなれ、昔は海犬、鯨その他の海獸が非常に多く、爲に随分多數の海獸船がこゝに集合した時代もあつたからである。

近世ロビンソンの住家

是に於てデービス氏は、一艘の短艇を下させ之に數名の船員を乗組ませて、島の様子を探らせに出したが、その短艇が島に近づくと共に岸から一人の男が水

中を船の方に向けて来て、上陸に最も適する點を教へて呉れた。それで船員等は之を謝して、且漂流人とのみ思つて船中に來て自分等と共に文明世界に返つては如何と云ふと男は之を謝絶したのみならず、殊によつたら無理に連れて行かれはしまいかとの虞から將に隠れんとまてしたので、船員等は何等惡意のないことを説いて、漸く此の男を安心させたのである。

それから此の第二世ロビンソンは今度は反對に船長を自分の家に招待したいと申し出たのであるから、デ・ビス氏は快く之を承引して、翌朝此の仙人とも云ふべき男の住家を訪問したのである。

すると其の住家といふのは、思ひの外小綺麗で室内も極めて清潔で床には一面藁を敷いて種々の家具を皆島で得らるゝ材料で拵へてあり、又室の隅には鐵製の籠があつて、是れが又同時にストーブの役を兼て丁度デ・ビス氏が這入つた時には其の中に燃えてゐた火は英國風の壁ストーブのそれと同じく極めて心持よく感じられたのである。それに其の側に在つた机の上に、自覺まし時計がカチ／＼と鳴つてゐたのには、デ・ビス氏も坐にその本國たる英國を思ひ出したとの事である。

又斯かる島に、壁紙などのないことは無論であるから、ロビンソンは之に代ふるに英米の諸雑誌から彩色のしてある繪を切り抜いて、之を壁に貼つてゐたのである。その貼り方も餘程色彩の調和するやうにしてあつて、その貼り手の大に美術心に富むことを證明したのである。

ランプは一種特別のもので、鐘詰の空罐で拵へ、油は海犬の脂肪から取つたものであつた。斯く言へば其のランプは極めて粗末で、蠻人的かと思はるゝのであるが、實際はなか／＼、手際よく綺麗に拵へてあつて、その外何から何まで思ひの外皆小綺麗に出来てゐたのである。

さて主客は先づ暫く巻煙草を燻らして、雑談の後デ・ビス氏の請求により、仙人ロビンソンは其の來歴を左の如く説き出したのである。

□ 其の來歴

私はウキリヤム、マクキツボンと申す者で、生れは英國のカリク、オン、シャンノンにてありますが、若い時から船乗になつて、今年で既に四十年にもなります。その初めは軍艦に乗り、中頃は商船に乗り、最後に海獸船に乗りまして、年齢は本

年取つて五十三歳になります。

數箇月前吾等一同がジエツシー、ニコルといふ古い船に乗つて、此の島に海獸捕りに参りました時に、突然私には此の島に止まつて見たいといふ考へを起しました。すると私の朋輩は皆此の淋しい島に如何して獨りて居られるものか、そんな馬鹿な考へは早く止してしまつた方がよいといろく／＼と之を止させやうといはしました。しかし私は既に決心をしてゐましたから、朋輩の言ふことには少しも耳を傾けませんでした。此の地は氣候が悪いのですから、人によつては長く耐えられないかも知れませぬが、私は三箇月間ゐる間にたつた一度の外之が爲に健康が悪くなつたといふともありません。その一度の事に就ては後で精しく申し上げます。

事によつたら貴下は私に此家を建て、いろ／＼の家具を拵へてしまつてからは仕事がないので困つたであらうと思ひ召すかも知れませぬが、それは大違ひであります。私には毎日々々爲るとが澤山あります。私が唯獨り此の島にゐるのは、決して人が嫌ひで此處に隱遁した譯でもなく、又閑靜が好きでしたともありません。實は私には一つの願があります。その願といふ

のは外でもありません。英國のホバルト港に久しい前から私の欲しいと思ふ帆船がありますから之を買ひたいといふとです。しかし船一艘を買ふには大層な金が要りました。私のやうな素寒貧には逆も出來ない相談であります。が人は奮發次第で随分金を溜めることも出來ると思ひまして、終に此の島で其の金の調達を企てる考へを起したのであります。或はさう申し上げたなら、如何して此の淋しい所で金の調達が出来るかとのお尋ねがありませうが、それは此の島にゐるペングイン鳥、海犬、アシカ并に海象で出来るのであります。御承知の通り此等の動物は、多量の脂肪を蓄へて居ますから、是れから取れる油が金になるのであります。

以前はペングインも、アシカも、今日から見ると餘程澤山此の島にゐました。しかし私は必ずしも左様多くを望みませぬ。私の最も望ましいのは海象であります。是は以前は數百を以て數ふる様にゐました。海象は長さ二十尺にもなりまして、鼻の長さが一尺足らずもありますから、一見しましてはなかなかの猛獸のやうですが、人が之に害を加へやうとさへしなければ、随分柔順しい動物であります。しかし之を怒らせると却々其の勢は強いのです。それで

此の物が水中に泳いでゐるときは人間は逆も之を攻撃することは出来ませぬが陸上にゐるときは吾々は勝手自由に飛び廻ることの出来る足を持つてゐますから容易に之を殺すことも出来ず。海象の皮膚の下には厚い脂肪の層がありまして是れが多量に最良の油を供します。

□ 怪物に逢ふ

是に至つて、マクキツボンは、さも嬉し氣に、後方の全部鐵製の家を指して、其中に搾油機械と油のタンクのあることを物語つたが、其の顔付きて察するに既に多量の油を貯へてゐたやうに思はれたのである。

それからデービス氏の、天氣の悪い日には如何にして時を潰し、又時々は物淋しく感じはしないかとの質問に對して、ロビンソンは左の如き答をした。

天氣は悪くても私には決して仕事のないのに苦しむ様なことはありません。何故なれば油を搾るには種々の準備が入るからです。又天氣が非常に悪く、準備仕事も出来ない時にはストーブの前に坐つて煙草を燻らし乍ら縫を編みます。仕事をしたいと思へば仕事は何かあるものです。私には一度も淋しいな

ど、思つたことはありません。私の友としては又二頭の犬もゐます。此の犬は心しれぬ人より遙に増してす。

最初此の島に上陸した時には、ジェツシーニールの船員で私と共に此の島に残りたいと言つた者が一人ありました。そして乗組員数名の人がまだ此の島にゐました時に、此の男も亦一同と一緒にゐましたが、暫くの間は少し向ふの方に行つたかと思ひますとけた、ましい聲を揚げて一生懸命に駈けて來ましたから、一同は喫驚しまして、何んだ何んだと申しますと、幽霊がくと申しましたから、一同は馬鹿を云ふなど、大に笑ひましたが本人は眞青な顔をしていへ、決して笑ひ事ではない、白い霞のやうなぼんやりしたものが地の中から湧いて出たやうに、突然自分の目前に現れて指を以て、自分を威したと申しまして、それから自分は今、世界にあるとあらゆる寶を呉れるといふ人があつても、此の島に止まることだけは平に御免を蒙ると申して、遂に船に歸りました。

私は此の幽霊の事を本當とは思ひませぬが、私自身も亦一度大に驚いたことがあります。それは或る天氣の好い日に、ペンダイン狩りに参りましてつ

ひ晩くなりまして家に着いた時はもう暗うございました。そして可なり寒い目に遇ひましたから家に這入るや否や直火を焚いて之にあたりながら煙草を喫ひ始めました。しかしあまり急いだのでつひ外の戸を締めることを忘れましたが不圖その戸の方を見ますと黒い委のものがつくと立つて火のやうに光つてゐる二大眼を以て私を白眼みました。私はギョツとするほど驚きました。直に心を取り直して側にあつた大きな薪を力を込めて其の頭上と思ふ所に投げ付ました。するとその物は非常な唸り聲を出しましたから幽霊でないことだけは分りました。それから更に之を熟視しますと此の鳥に來ます前に多數に産した野牛でありましたから今度は銃を取つて其の心臓の所在と思ふ所を射ました。すると弾丸は果して命中して牛は其の儘倒れましたから翌日其の肉を糧食として貯へるとにいたしました。實は此の肉は、私が大に歓迎した所のものであります。何故なればヘングインや海犬の肉は、一種の臭氣があつて餘り甘いものとも云はれませぬからです。尙又私が海犬やヘングインを捕る其の重なる目的は油を搾る爲でありますから食糧としては自然牛を狩らなければなりません。此の牛狩に際して一度辛い目に遇つた

ことがあります。御覽の通り鳥は長さ十一里で幅は僅に二里半しかありませんから何處へ出掛けても晩までには歸つて來られると思ひまして或る日少しばかりのビスケツトを携へて犬と共に出掛けました。が獵がないので先きへくと進みまして意外に遠い所まで行きましました。是れはしまつたと退却を始めますと折悪く濃霧が掛りまして手を目の前に持つて來ても判然見えないくらゐにひどくなりました。それで長い間盲目が手探りに歩行くやうに歩行して居ますとつひ道を取り違へてしまつて彼所此所と目當てなしに彷徨ふてゐますと遂に一つの山に來ました。それで山頂は事によつたら霧層の上に櫻んで、私の位置を知るによろしいかと思ひまして勇を鼓して登つて見ますと私の思つた通りでもありませんでした。その代りに上に着くと俄に霧が切れて眼下に十五個の湖水を望みました。してその水の青々として美しいのと其の中に在つた島の滴るばかりの緑の色を呈して居たのは、くさくさして居た精神も一時に爽快になりまして仙境にでも這入つたのかと思ひました。此の時の景色は私は一生忘るゝことが出來ないと思ひます。

□ 彼の理想

さてその内鬨は再び眼下を遮りまして、舊の通りになりましたから、今度は又々諸方を彷徨ふのも馬鹿々々しいと考へまして、その邊に在る種々の萱や草の類を集めまして崖の側に屋根を造りまして其下に這入つて寒風を避けることに致しました。すると又間の悪い時には種々な不幸が續出するもので屋根の下にしががんでゐる間に熱が始めまして、それが次第に高くなつて、終に私は夢中になつてしまひました。それで私は今でも如何して家に歸ることができたか不思議でなりません。又幾日ほど夢中であつたかも知れませぬ。併し貴下の船の日附けと私の手帳に控へてある日附との間に二日の差のある處から見ますと私は發熱中二日間を知らずにゐたことになりませぬ。尤も私は熱に對する良薬を持つてゐます。それはマオリ島の油です。併し當時は途中の事でありましたから、之を服する譯にも行きませぬでした。兎に角此の熱の原因ともいふべきものは、毎々此の邊に吹く強い西の寒風です。此の風の吹くときは、西岸は船の爲に極めて危険であります。西海岸に破船

の跡の多いのも全く之が爲です。一度南洋を諸方面に航海して、種々の物品の交換をするグラチウドといふ帆船が此の島の西岸に投錨したことがあります。すると突然西の強風が吹き出しましたから、船長は狼狽て錨を揚げさせ、帆を掛けて沖の方へ出やうとしましたが風が餘り強いので船は岸の方へ吹き附けられて終に岩で粉碎しました。併し幸にも乗組員は皆島に居た海獸捕りに助けられて無事でした。尤も何時でも左様都合よく行くことばかりはありませぬ。随分溺死する者もあります。それで溺死者があつて其の死骸が岸に漂着しますれば私は人間の義務として之を埋葬します。島の東側には既に小さな墓場が拵へてありまして、私が此處に葬つた死骸は、既に數體に及んでゐます。其の場所は島の中でも最も荒れ果てた所、蓋し世界に是れほど荒れ果てた墓場はありません。御覽の通り私の此の島生活は淋しいには違ひありませんが、しかし又なか／＼忙しいのです。私は今後尙一年間、同じ生活をしたと思つてゐます。すると油も澤山溜つて彼の帆船を買ふことが出来やうと思ひます。私は決心して此島に止まつたのですから、誰が何と云はふと目的を達するまでは初志

を 齎 ひら さない積りです。又私 わたし は斯やうな生活をしてゐるからと申して、決して粗食ばかりしてはゐませぬ。

と言ひながら、つと立つて次の室に到り一二分間の後持つて来たものは、バター(寄せ肉又は蒲鉾とでもいふべきか)と菓子とて之をデービス氏に呈したゆゑデービス氏も珍しさに味つて見るとなかく、甘しかつたので、其のバターの原料を尋ねるとその原料は文明世界で用ゆるやうなものとは全く違つて、海象の心臓と舌とであると答へたさうである。

話は是れだけで、其の後此の二世ロビンソン先生は如何したか不明であるが、多分油も充分取ることができて國に歸つて目的の船を買つて、今頃は船長となつて諸方を乗り廻はしてゐるであらうと察しられる。

海上の水柱五千尺

□水柱出現の前後

龍巻と稱して、小區域に限る大旋風が起れば家屋や木樹を捲き揚げて、非常な

損害を来たすことは、國の内外を問はず餘り珍しからぬ現象であるが、此の風が沙漠で起れば空中に砂柱を現し海上(湖上河上)でも起れば空中に水柱を現するのである。

航海者の水柱を記した記事はいくらもあるが、中に左の如きものがある。

風は風ぎ、海面は鏡の如く平になつて空気が甚だ蒸し暑い。此時に當つて、俄然黒雲が船の方に舞ひ下るかと思ふと、又附近の海水は、長柱の形に伸び上がり、騒然たる音を發して、長囊狀に垂れた雲と相合して、水は倒に天に向かつて流れ始めたかと思はれた。是に於て水夫等は船は水柱と共に天に捲揚げらるゝか、左なくば千尋の海底に沈没するかと、恐怖して絶望の餘り水柱に向かつて大砲を打ち掛ると、雲は忽ち舞ひ上がり、柱は忽ち舞下がり、さしもの奇現象も跡形もなく消え失せた。すると今度は冷やかな驟雨が降つて、電光雷鳴を起したから又もや不思議が来るかと心配すると、天は鎮まり雨は霽れ涼風吹いて船を不安の個所から脱せしめた云々。

水柱出現の前に當つて空気が静て蒸し暑いことは多くの實見者の談による。夕立前と同じやうである。又水柱の出現は、暑い季節に多く、寒い季節に少な

いのである。

□ 水柱の形状

水柱の形は種々である。先づ大抵は字の如く柱状ではあるが真直なことは罕て曲つて居ることが多いのである。又上擴がりになつて喇叭や漏斗の形のこともあり又尖端で相結び付いた二圓錐のやうなこともある。多くの書には、天から長袋を下げたやうな形といふ字が往々遣つてある。

水柱は、必ずしも雲あつて始めて出来るものではなく、時に晴天に下から水が持ち揚り、而して後始めて上に雲が現はるゝこともある。水柱の脚部は、多く水煙や霞に取り巻かれて居る。

ホルネル氏の記事に據ると、水柱の直径は二尺から二百尺に及び、長さは三十尺から千五百尺にも及ぶといふのであるが、他の實見者によると、長さ五千乃至六千尺にも及ぶのがあるといふことである。

水柱は、多く進行するものである。そして其の速度は、人の歩行くやうにのろいものから、一分時間に三千尺といふ早さに及ぶものもある。又其の進行する

間に、種々速度を變ずるものである。それから其の道筋は直線のこととあれば、曲線の事もあり又罕には屈曲線の事もある。少しも動かない水柱は極々罕てある。

水柱は陸上の砂柱の甚しい損害を來たすに反して、割合に無害のものである。まだ是が爲に船が捲き揚げられたり、沈没したりしたことはない。しかし損害を受けた例は罕にある。即ち今から二百三十八年前、アフリカ洲のギネア海岸附近で無風の際に砲數十門を載せて居た三百噸の小軍艦が、突如出現した水柱に出會ふて、帆樫を折られ且甚しく船首を傷けられて、殆ど横に倒れんとしたことがある。又今から百八十年前、バルチック海を航して居た、一本橋の帆船が、水柱の衝動を受けて、五名の人と一大重機とが轉倒したことがある。

汽 船 の 發 明 争 ひ

□ 發明の名譽

汽船は何人によつて發明されたかといふ質問に對しては、その答は甚だ易々

たるやうで、實は極めて困難であると云はゞ江湖の諸君は定めて不審に思はるゝてあらうが事實は矢張それに相違ないので、又是の質問に對して、是れまで種々の答が出たのによつても其の容易に答へ難いことが判るのである。

抑々今の文明世界で、人類に偉大の裨益を與へるやうな大發明のあつた時、その發明者を出した國の名譽の大したものであることは、言ふまでもないことである。それがかゝる場合に、各國がその發明争ひをするのも亦無理ならぬことである。即ちその最近の一例ともいふべきは、例の無線電信で、世間一般その發明者は伊太利亞人マルコニの如く言ひ囃しては居るが、其の實同じ様な考案を有つて居た人は、マルコニ以前に自分の國に在つたと云つて、列國は激しく發明争ひをして居るのである。又電話の如きも、英米佛獨の四個國でその發明争ひをして居るが、その論は何時終着するやら殆ど目當てがなないと云つてもよいのである。

然るに茲に尙既に百年の以前から、各國最も激烈の争ひをして居るものがある。それは外でもない。即ち蒸汽船の發明である。してその國々は、英蘇佛獨西米の六箇國である。

□ 各國の我田引水

西班牙人は曰ふのである。西曆千五百四十三年六月十七日、一船長であつた、ブラスコデ、ガライといふ者が、その發明した汽船を、バルセロナ港内で試運轉して結果良好であつたから、直に之を時の國王チャールス第五世に献納したことがあると。

獨逸人は曰ふのである。千七百七年九月二十四日、ドニ、ババンといふ、もと佛國生れて、後獨逸に歸化した學者が、汽船を發明して、之をカツセルとミュンデとの二市間を流る、フルダ河に運轉させたことがあると。

英吉利人は曰ふのである。千六百六十一年に、種々の新發明をしたと自稱したウスタ、侯が汽船發明者であると。併し、その後その誤つたことを見出した爲めか、更に又ジョナサン、ハルスといふ者を擔ぎ出して、此の者は千七百三十六年十二月二十一日、反對風若くは無風の時、若くは潮流の強い時に、船を自由に入港出港せしむる爲めに、蒸氣力を利用する特許願を差出したのであるから、此の者が眞の汽船の發明者であるに違ひないと。

佛蘭西人は曰ふのである。一千六百二十六年に歿したサロモン・ド・コースといふ者は、物理學者間に名高い學者であるが、蒸氣力船を動かす工夫に熱中したとて狂人と看做され、時の勢力家リシエリヨ・僧正の命によつて、ピセートルの瘋癲病院に幽閉された位であるから、此の者こそ眞の汽船發明者である。蘇格蘭人は曰ふのである。千七百八十八年十月十四日、其の國の一湖上に、汽船の試運轉をしたのは、ウキリヤム・サイミングドンであるから、此の者こそ汽船發明の月桂冠を擔ふべきものである。

亞米利加人は曰ふのである。一千八百七年八月十七日、ロベルト・フルトンは、ニウヨーク州のハドソン河を、ニウヨーク市からオルバニー市まで、汽船で溯つたことがあるから、此の人こそ、汽船の創始者と稱すべきものである。してフルトンに次いで、汽船が世界一般に行はるゝに至つたのであるから、世界の人々も、多くはフルトンを以て、眞の發明者であるかのやうに思つて居る。

□月桂冠を擔ふは何人か

さて以上列擧した、所謂發明者と稱せらるゝ者の中で、精探の結果、到底發明者

の候補者として取るべからざるものもある。例へば西班牙人ガライ(此の人はコランバスの米國發見の航海に隨從した人である)がチャールズ第五世に献納したといふ船の如きは、當時の記録や繪などから見ると、眞の汽船ではなく、船の兩側に水車の如きものを附して、人力若くは動物力て風に反對して動かす様に造つたものであつたのである。蓋し水車付きの船は、既に十五世紀の出版に係る書物の繪にも見るのであるから、之を直にガライの發意に成つたやうに言ふのは僻見である。

又佛のサロモン・ド・コースが、汽船發明熱中の結果狂人として病院に入れられたといふことも、能々調べて見ると、全く虚構の説と云ふの外ない。といふのはマリヨン・ドロルムといふ婦人が、千六百四十一年にコースを病院に見舞つたといふ事實があるといふ説であるが、是れが既に虚言であることは、千六百四十一年とは、コースの死後十五年であるからである。何故に斯かる虚構の説が世に行はるゝに至つたかといふに、それは千八百四十三年頃佛國では汽船發明の名譽を自國に獲得せんとして、ベルトリといふ者をして、種々の説を捏造せしめたによるといふ世間の説である。

又獨逸人が發明者であると威張つて居るババンも、其の頭腦中に、汽船に對する正當の考案を有つて居たことは事實のやうであるが、其の殘した手紙の中に、種々の不幸がその考案を實地に試みることを許さないと書いてある。それから同人が千七百七十七年九月二十四日に、フルダ河で試運轉をしたといふ船は、ガライのそれと同じで、眞の汽船ではなく、人力で回轉せしむる水車附きの船であつたのである。して此の船はその翌日河上に船を泛べて居た、他の船頭と喧嘩の結果全く破壊されてしまつたが、同人が獨逸有名の物理學者ライプニツに宛てた手紙にその目的は船を英國に廻はして、蒸氣機關を据ゑ付ける計畫であつたが破壊された爲にその目的を達し得ないのは、甚だ遺憾であると書いてある。

して見ると、ババンが眞の發明者でないことは明白である。
英吉利人ハルスに就ては、明治四十三年十月二十二日發行の、グラヒツクといふ一英雜誌が、同人を汽船の眞の發明者であると書き立てゝ居る。しかしババンと同じで、その考案は立派であつたらしいのであるが、千七百三十七年に、同人が行つた試運轉では、全く成功しなかつたのである。
尙又サイミングトンといふ蘇格蘭人をも、眞の發見者と稱することの出来な

いのは同人が千七百八十八年に、その考案に係る汽船を湖上に浮べて試運轉をした時には既にその前に蒸氣力を用ゐた船の試運轉が、諸處で行はれて居たからである。例へば千七百八十一年には、佛國のドロブ河で千七百七十四年と五年とは、同國セイヌ河で千七百七十三年には、米國のデラウエヤ河での如してある。

此の中で、千七百八十一年のドロブ河での試運轉は佛國のクロード、ジュフロア侯が行つたもので、此の時には船は三時間蒸氣力で動いて居たのである。それで立派に成功はして居るが、此の故を以て侯を直に汽船の發明者とも云ひ難いのである。

以上陳述した所によつて觀ると、汽船も他の大發明と一般決して一頭腦の案出したものではなく、數多の頭腦の共同して案出したものと見るべきである。それで何人がその發見者であるかといふ質問に對しては、到底満足な答をすることは出来ないのである。しかし強いて發明者を挙げねばならぬ場合には、已むを得ず、ババン、ハルス、ジュフロア、フルトン等は勿論尙その他汽船の工夫に關係した數多の大家をも擧げるの外ないのである。

驚くべき安價の燃料

近頃世界の一大問題となつて居るラヂウムは、一種不可思議の力を有つて居るもので、地球内に産する其の量が莫大であるから、巧く之を利用する事が出来れば非常に安價の熱源を得る譯である。之が爲めに石炭業者間に大々的恐慌を起して、一時彼等は立往生の非運に陥りはしまいかと心配したとがある。其時此件に就て精しい計算をした獨逸人カール・クルツ氏の言は左の通りであつた。

ラヂウムはウラニウム鑛、一名輝瀝青と稱する鑛物中に比較的少量に含まれて居るものであるが、それが空間に一種の眼に見えぬ極微物質を放射する速力は大したもの、之をして或他の物質を通過せしむる場合には、速力變じて熱となるのである。随つて此の元素は、吾々に無限の熱源を提供するものと云ふべきである。最近の計算の結果、一グラム(目方二分六厘六毛)のラヂウムは、一時間に一グラムの水を氷點から沸騰點まで高むるに足るべき熱量を放射するばかりでなく、その放射力は、數十年間毫も勢を減ずる事がない。故にラヂウムは石炭の如く燃えて仕舞へば忽ち其の力を失ふものとは違ふ。

さて、我が地球内に含まれて居るラヂウムの量を計算して見るに、約二千八百萬噸あるといふから、其實力は、三萬億箇の電燈に相當すべきものである。今假に、普通の小さい一世帯で燃料として費す一箇年間の石炭の量を一萬斤としてその代りにラヂウムを用ゆる場合には、僅々十二グラム半(三匁三分餘)で済む勘定である。此のラヂウム鑛は、英國コーンウォール州の鑛山のみでも年々約十噸づゝ採掘して居るが、獨逸のミュニツク市のやうな大都會の一年間に需用する燃料でも、此の十噸の百分の一で十分である。英國でウラニウム鑛一噸の代價は三千磅(三萬圓)であるから、一世帯が一年間に費す十二グラム半のウラニウム鑛の代價は僅かに半シリング(約二十五錢)で足りる。然るに、一萬斤の石炭は九磅内外だから、ウラニウム鑛を石炭に代用する時は、石炭の代價の三百六十分の一で充分な譯である。以上の如くウラニウム鑛は、嘘のやうに安い燃料である。只吾々の今日困つて居るのは、如何にせば之をして容易に熱を生ぜしむる事が出来るかといふ方法乃至装置である。然し斯かる方法装置は、文明の今日早晚發明されるに相違ないと思はれるのである。

百五十萬年前の人類

前世界の洪積世中既に人類の存在したことは、久しい出前から知られて居る。とてあるが、これは重に、その手工品たる石器によつたもので、人骨その物の発見は、最初は甚だ少かつたのである。即ち今日の人類と違つた人類の骨の発見されたのは、今を距ること六十二年、前て、其の場所は獨逸デュツセルドルフ市附近のネアンダタールと稱する地で、その骨は一枚の頭蓋骨であつた。此頭蓋骨は形から見ると、額部が低く、且眼腔上に前に突出する結節があつて、今の人類とは大に違つて居たのである。然し此の一遺骨を以て直に洪積世人類の全體を推測する譯にも行かないから、以上の異性は病的なるやも知れずとの曖昧な理由の下に、その後三十年間他に類似の人類の発見さるゝ迄は、餘り古生物學者の注意を引かなかつたのである。然るに明治十九年、白耳義のスピに発見された二體の人類骨は、前のネアンダタール式、その儘のもので、額低く眼腔上に結節があるのみならず、顎骨強大で、齒も亦大きく且頤に當る部分の骨が非常に引込んで居て、所謂無頤の形をなして愈々以て今人とは大に違つて居ることが分つたのである。

ある。して見ると明治十四年、埃國メーレンのジブカ洞から出た下顎骨やスピの骨と同年に出た、佛國ラノレットの下顎骨も、それから其の以前に出た獨逸タウバハの二本の人類骨も亦皆此のネアンダタール式の人類に屬するものらしくなつて來て、明治三十二年に、埃國クロアシヤのクラピナ洞から出た少くも十名の人に屬する人類骨も亦同式のものであることが分つたのである。夫から尙此の部類に入るべきものは、明治三十八年の発見に係る埃國シユウエーデンチツシユ洞の下顎骨、四十年の発見に係る佛國ラシヤベル、オーサンと、ルムスチエーとの人類骨である。斯かる譯であるから、洪積世に、今の人類と相異なる人類の生存したことは、最早



エチスムール - 発見の頭骨

蔽ふべからざる事實となつて、殊に、八年前、獨逸ハイデルベルク市の南、マウルに産した下顎骨の如きは、第三紀に接する洪積層中に出て、その形から推せば、ネアンダール式人類より一層劣等の人類が、當時彼の地方に居たことまで、明かになつ

たのである。それで左にルムスチエーの骨と、マウルの骨とを稍仔細に述べて見やう。

ルムスチエーといふのは、佛國南西部の、ベゼル河の上流地で昔から石器の多いので有名な所である。此地の人骨は、四十年十月二十一日に發掘されたもので十八歳ぐらゐの若者の骨骸らしく、身の長四尺八寸八分四厘、四肢は割合に太く短く、胴は割合に甚長く、又下肢骨に就て觀るときは、歩行の際には足を眞直に伸すことが出來ずして、猿類の如く多少膝を曲げ同時に身體をも多少前に屈めて歩行したものらしく、又頭骨を觀るに第一額低くして、斜に後退し眼腔の上には、結節突起して、その以前獨逸のネアンダール、白耳義のスビ、埃國のクラピナ洞等に發見された人骨と、同一式のものであつたのである。尙又其の眼腔の過大にして、今の文明人に於けるよりは一層左右に相離れて居ると、鼻廣くして平く、鼻孔下向きならずして、多少前向きなること、口の甚だ大なること無頓なること、齒根の強大なること、下顎を動かす筋の附着面の大なること等は、一として多少猿的ならざるはないのである。此骨の出た地層は人類學者が、アシエール層と名づくるもので、地質學の所謂洪積世下部のミンデル、リス間氷期層（アル

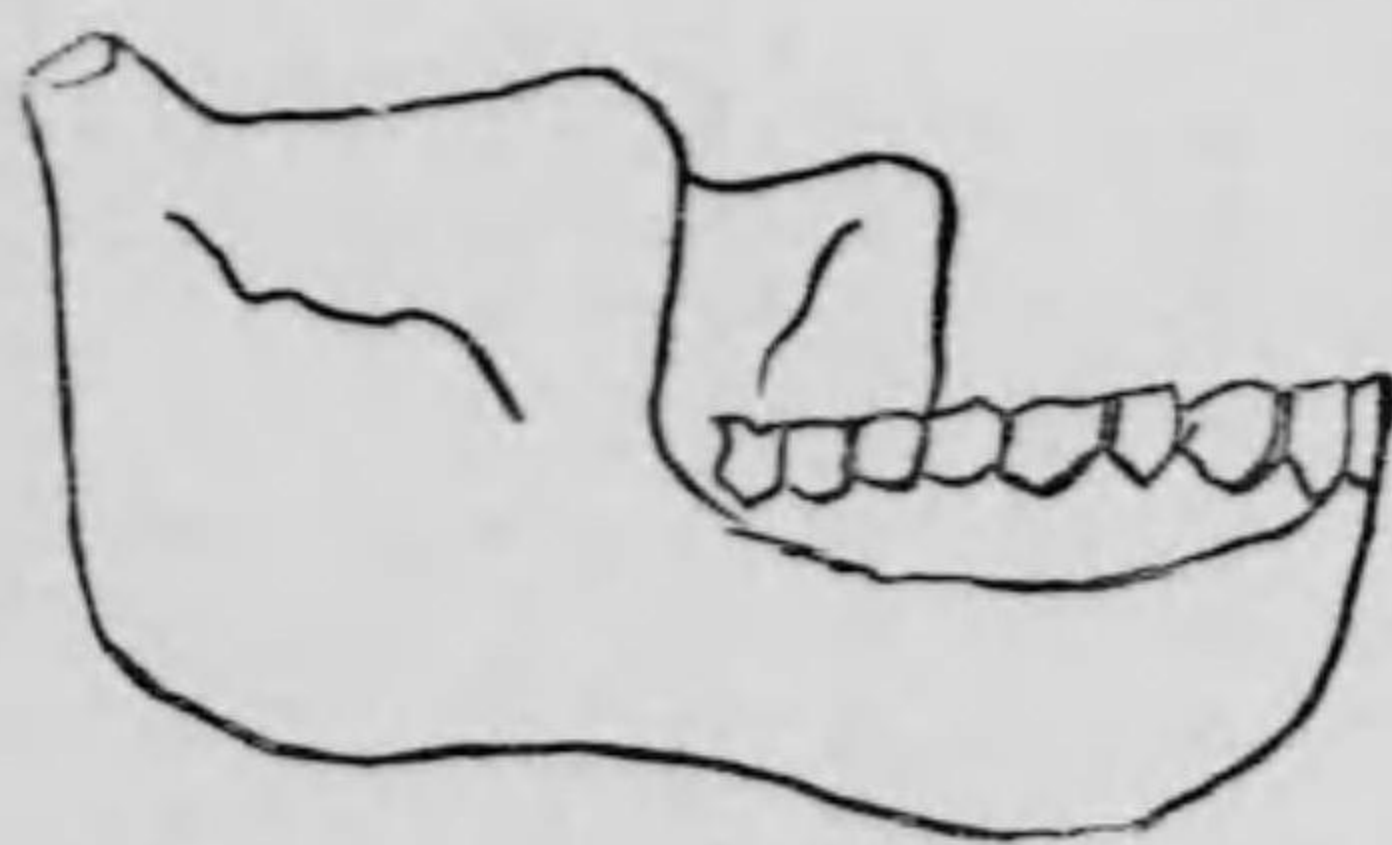
プス山に於ける第二間氷期層に當るといふのである。それで、ラインハルトといふ人類學者は、其の古さを今から四十萬年乃至六十萬年前として居る。

獨逸産の下顎骨は、佛國のそれより一層古いので、其出た地層は、第三紀層に接する洪積層最古の砂層である。此層には太古象、エトルスカ犀、ステノ馬等をも産してラインハルトは其の古さを少なくも百五十萬年前として居る。

顎體の高さは二九九耗（九分八厘六毛七）乃至三四四耗（一寸一分三厘五毛二）その厚さは一七五耗五分七厘七毛五）乃至二三五耗七分七厘五毛五）で一見大猿のそのの如きも、齒を見れば、人類に違ひない。何故なれば猿に固有の突出した尖犬齒がないからである。

顎體から突出する後枝部の上に向ふ角度甚だ急で、其の上縁の幅は、今の歐人では三七四耗であるが、此の化石では、六〇耗である、又冠狀突起は、顎底から六三耗の高さを有して、今人のそれと違ひ、尖らずに鈍いのである。是は大に猿的の性質である。且其面大で、他筋の附着面の廣い所から見ると、咀嚼筋の強大であつたとが明かである。その他關節突起も其關節面が非常に大で、前記佛國ルムスチエー産の化石のその既に、細弱に出來て居るのに比べて著しい對照て

ある。全顎骨の構造の強大頑丈であるに比ぶれば、齒は稍小である。殊に、其の第三白齒がさうである。しかしそれでも今の歐人に比ぶれば、尙大て斯かる大齒は、



マウルの産下顎骨

石には、ネアンダタール式の骨と同じで、無いのである。此の下顎骨は、全體の性質から観れば、ネアンダタール式のより一層獸的である。因てシエーテンサクといふ人類學者は之をネアンダタール式以上の式

と稱して此の人類には、Homo Heidelbergensis の名稱を付けて居る。底で、從來發見された人骨の重なるものを擧げて見れば左の通りになる。



今の白人の下顎骨

- 一、埃國クラピナ産 Homo Primigenius
- 二、獨逸ネアンダタール産 Homo Neanderthalensis
- 三、白耳義スビー産
- 四、佛國ラシヤベル・オー・サン産 Homo Capellensis
- 五、佛國ル・ムスチエー産 Homo Monstériensis Hauseri
- 六、埃國シブカ洞産
- 七、同シユウエーデンチツシユ洞産
- 八、佛國ラ・ノ・レツト産
- 九、西班牙ジブラルタル産(頭骨にしてネアンダタール

式である乎)

二、ネアンダタール式以前のもの

獨逸マウル産 Homo Heidelbergensis

さて、以上によるとネアンダタール式のもの、は産地によつて、それゝ種名を異にして居るが、こは便宜上からさうしたので、その實總てを Homo Primigeni 若くは Homo Neanderthalensis と云へば宜しいのである。

尙時代別にして、擧ぐれば左の如くなる。

洪積世下部(アンタイクス象時代)

獨逸マウル産

第一氷期(ギエントツ氷期)

第一間氷期(ギエントツ・ミンデル間氷期)

第二氷期(ミンデル氷期)

第二間氷期(ミンデル・リス間氷期)

洪積世中部(マンモス象時代)

(時期不明以下同じ)

佛國ラ・シャベル・オーサン産

獨逸ネアンダタール産

同 タウバハ産

佛國ラ・ノーレット産

獨逸シブカ洞産

同 シユウエーデンチシユ洞産

白耳義スビー産

西班牙シブラタル産

洪積世上部(馴鹿時代)

佛國クロマニオン産 Homo prisens

白耳義アンジ洞産

獨逸の墟斯中に在る所謂墟斯人類

原黒奴 Primal negros

洪積世上部の人骨は、今の人類と同一で、例へばクロマニオン産の骨は、今の北歐人と似て居るといふ人もあれば、南西歐人の祖先と見る人もある。墟斯人類も亦一般に南西歐人に似て居るといふ説であるが、しかし尙幾分か、ネアンダタール式に似寄の點がないでもないのである。夫から原黒奴といふのは、佛國マントリス産の頭骨の如きものを云ふので、ベルノイ氏によると長頭斜頸で、今の亞弗利加の黒人に似て居るといふのである。南米のパンパス層(洪積層)中には、既に度々人骨が掘り出されたが、その中で、オ

ルナハの頭骨は低額と眼腔上の太い結節との二性質で、大にネアンダール式に似て居る。夫からパンバス人類と稱せられたラ、チグラの頭骨も此の類らしいのである。

數年前、ブエノスアイレス府で、舊洪積層から掘り出した頭蓋骨がある。アメリギノ氏は之を人類の祖先と見做して *D. prothomo platensis* と名附たのである。併し是は眞の人類ではなく、ピテカントロプスの猿に似たものである。

其から、尚ヘルモン山から出た頸椎の第一骨がある。ローマン・ニツチ氏は之を人類のものであるとして、此の人類に *Homo neogenus* の名を附けたのであるが、ウキルサー氏は之を *Promthropus neogenus* といふ名に改めて、之をピテカントロプスとも密接な關係あるものと言つて居る。

最後に、アメリギノ氏は、第三紀の鮮新層から出た載域と大腿骨とを以て、*Tetraprothomo argentinus* といふ名稱を拵へて、之を人類の太祖であると主張して居る。

最近発見の人類の元祖

人類の化石は、前記の通り是迄いくつも発見されてゐるが、しかし大體三に分

かれて居る。便ち今の世界に産する人類(今人)と前世界洪積期中に産する原人とハイデルベルグ人とである。之が學名を羅馬字で書けば左の通りである。

一、*Homo sapiens* 今人(學名は智慮ある人といふ意)

二、*Homo primigenius* 原人(野蠻、昧、原始の人といふ意)

三、*Homo Heidelbergensis* ハイデルベルグ人(産地に因んで名)

以上三種の人類の外に、最近に発見された人類の化石は、左の如き學名を得たのである。

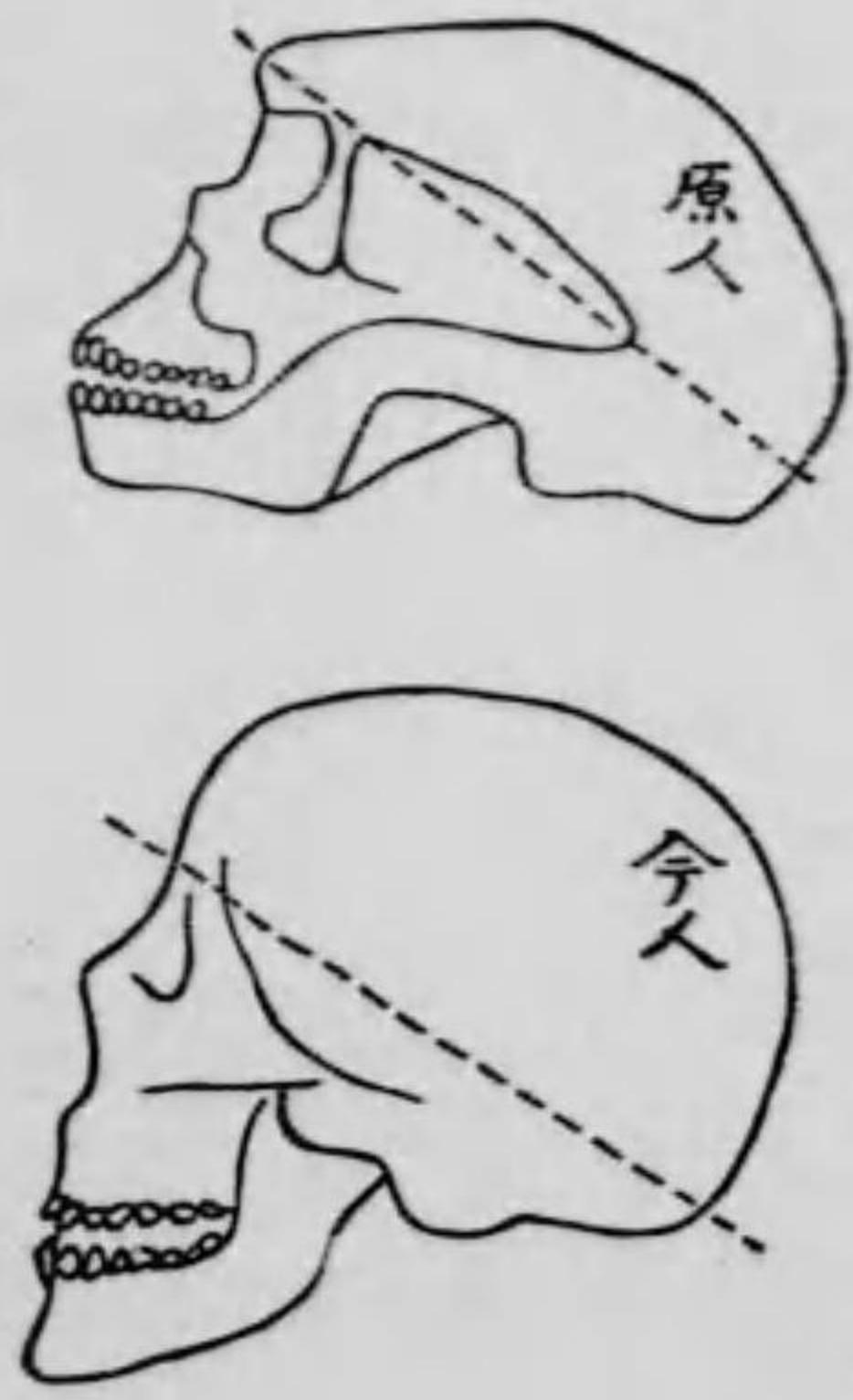
四、*Eoanthropus Dawsoni*

屬名のエオアンスロパスとは、曉の人といふ意味で、詰まり人類の曙光即ち最古の人類といふ事である。種名のドーンニはドーン氏の発見に係るといふ意である。

此の曉の人が如何なる人類であるかを説明するに當つて、先づ從來発見されてゐる人類に就て一言を費さなければ、その間の區別が判然しないによつて左に手短に之を述べやうと思ふ。

今人とは、前述の通り、現在世界に住んで居る人類で、西洋人は白人種とか黄人

種とか黒人種とか色々々な名稱を設けて、その間に區別を立て、はゐるが學者眼から觀れば斯様な區別は立て難いのである。成程それ／＼皮膚の色とか毛髮の色とか骨格の形とかは多少の區別はあるが、此等は今の人類を數個の別種とするに不充分であるばかりでなく、その間には所謂間の子性質を帯びたものがあつて、どちらに入れて宜しいやら少しも判斷の附かないものも多々あるのであるから、今の人類中に種類別をするとは、絶対に不能であることになつてゐる。



昔し、瑞典のリンネといふ大博物學者が動植物の種といふものゝ定義を定めた時に、斯ういふことを言つてゐるのである。生物は同種に屬するものなら互に相交つて子を生むとが出来ることが出来るが、異種に屬するものなら互に相交つても子を生むとが出来ない。よし罕に之を生むことが出来ても、その子に至つては最早生殖力がなないと。是はリンネ氏が從來の經驗上から言つたこととして、現在の學者も之を大した誤りのある言と見てもゐない。

ないのである。夫でもし之を生物界に遠く行き渡る事實とすれば、今人中に種類などのある筈がないことになる。何故なれば今の黄白黒何れの人種も互に相混血して、毫も子を擧げるに差支がないのみならず、其の子も亦充分の生殖力があるからである。それは兎も角種々の情況は學者をして、今人中に種類の區別のないことを認めしむるに至つたのである。

原人は、化石によつてのみ知れてゐるから、混血の成績などを見得る譯のものではないが、其の骨格には今人と大に異なる所がある。便ち頭骨を見るに額が低く、後方に退いて、其の眼孔の上で眉毛の生えてゐる所に當る骨が前方に著しく突出してゐるのである。夫から顎骨が頭に對して前進して、下顎骨の前方端が今人では前に突出して所謂顎を形づくつてゐるに反して、後方に引込んで所謂顎なしである。そして此等の性質は皆猿に見るものである。狒々や猩々の如き高等の猿を見るに、皆額が低いのみならず、後退して、且顎なしである。是によつて原人が今人より劣等て多少猿に似てゐたものであることが明々瞭々である。

ハイデルベク人に至ては、下顎のみしか發見されないものであるから、眼の上

の事や、額の形は不明であるが、頗なしの點は原人のそれより一層甚しく、隨つて猿のそれに大に似てゐるのである。そして化石の新舊から云へば、ハイデルベルグの人類は、洪積初代の産て原人はその後の産である。以上は從來知れてゐる人類に關しての極々大體の性質に過ぎないが、是れだけ述べて置けば、新發見の人類の如何なるものであるかを説明するに、大なる便宜を得るのである。

さて、大正元年の事であつた、英の地質學者、チャールズ、ドーンソン博士は、同國サッセツクス州のビルトダウン附近を散步してゐると、新に道路に布かれた燧石の層があつたから、見慣れぬ石を布いたものかなと、稍不審の念を起して、その燧石の出所を尋ねると、其は附近の地の砂利取場から持つて來たものとの事に早速その砂利取場に行つて見ると、成る程燧石を混じた砂利の層があつて、そこに二人の夫がゐる砂利を掘つてゐたのである。元來博士はそれまで斯の種の砂利が此の邊に産することを知らなかつたのであるから、大に興味を感じて、人夫に向ひ砂利の中に骨か又はその他の化石の類は見えなかつたかと尋ねると、何にもなかつたとの答へに、それなら若しあつたら取つて置いて呉れと頼んで

く、突起は極めて微弱である。之に反して、額の邊はハイデルベルグ人や猿に似



人の頭

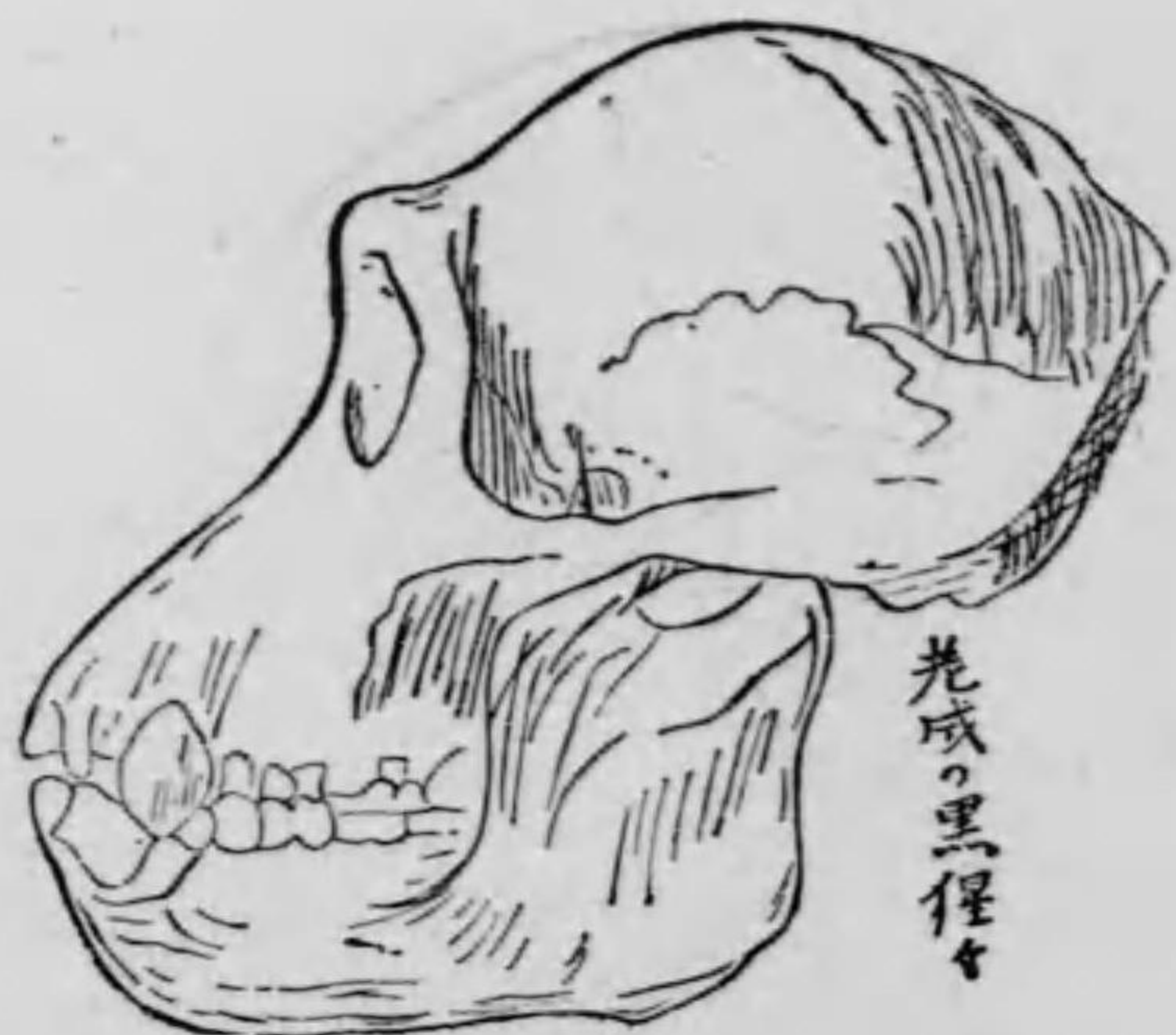
その儘自宅に引き返し、それから四五日を経て、再び此の砂利取場に行つて見ると、人夫が斯やうなものがあつたと、博士に見せたものは人の頭骨の一片であつたのであるから、博士は俄に面白がつて自らその邊の砂利の中を捜して見ると、種々の頭骨の破片が発見されたのであるから、此等を盡く採集して之を宅に持ち歸つて、ミス博士といふ頭骨學に尤も精しい學者とも相談の上、出来るだけ之を組み立て、缺けてゐた部分は、想像して拵へ上げたのが、即ち上圖に示してある通りの者である。乃ち之を観るに、額と眼孔上の突起とは、今人と大に似て、額は高

て大て引込んで、前にも言つた願なしてある。
是によつて之を観れば、新発見の人類の頭骨は、今人と猿とに見る二性質を兼備共有するものと云はねばならぬ。すると従來人が考へてゐた様に、最古の人類は皆猿同様、低額であつたとの議論は地に墜ちて効力のないことになる。すると最近発見の人類は、原人より劣等であるか、高等であるかの問題まで起るのである。乃ち此問題は進化論から云へば、極めて樞要の問題で、その解決のしゅうによつては、或は進化論の矛盾といふことにもならないものでもないのである。しかし、新発見の人類が進化論に違反するものでないことは、左の事實あること



を記憶すれば判明するのである。
乃ち猿の頭骨の發育を見るに、生れて直ぐは額が高く、且眼の上の突出も弱い

洪積以後のものであるとは、萬々思はれないのである。然るに砂利を供給した岩石は無論洪積以前ののもので、而も共に哺乳動物の骨片や齒を産するものであ



先成の黒猩猩

のであるが、生長するに随つて、突出も著るしくなり且つ額も低くなること、左圖に示す通りである。
是によつて之を観れば、新人類の高額であることは、少しも驚くに足らないのである。蓋し此人類は原人の發育の初階を

表示するもので、原人はその老成したものと見るべきこと猿の頭骨の發育に照して、殆ど疑を容れざる所である。文今の猿の頭骨の發育から見れば、最古の猿の頭骨もし発見されるれば之を第三紀の中部に期待すも亦高額のあつたと推定しなればならぬ。

新発見の人類の時代に就ては、今はまだ極々確な事は解らないのである。併し其の發見された砂利層その物は、洪積層であるから

るが、その哺乳動物中には第三紀鮮新世のものもあれば、洪積期の者もある。便ち第三紀のものは、マストドン象とステゴドン象と、洪積期のものは、エラフス

幼少の黒猩猩



のない限りは、矢張之れを川獺鹿馬等と同様洪積産と見なければならぬ。乃ち

鹿と川獺と馬とである。夫から何れとも判然しないものは河馬である。中て象類の遺跡は、非常に摩擦を受けて長く川底に轉輾した形跡があるから、是れ等は古い層から流れ出して、して砂利の中に這入つたものに違ひないのであるが、洪積産の動物に至つてはその遺跡が餘り摩擦を受けてゐないのであるから、恐らく砂利の出来た場所附近で死んで、その骨片はその儘砂利の中に埋つたものと判断するの外ないのである。然らば肝腎の人骨は如何かといふに、是れも摩擦は受けてゐないのである。して見ると、之を第三紀と見るのは不穩當で、他に反證

発見者の考では、多分洪積期に属するもので、從來最古の人類と見做された、ハイデルベルグの産と殆ど同時代のものなるべしとの事である。何にせよ、此発見は學術上極めて趣味の多いものと云ふべしである。

人の足跡の化石

目下、米國の地質學者間の一大問題となつて居る新発見がある。此発見は、人間の足跡に酷似した印痕のそれ、場所は加奈陀、オンタリオ湖畔、トロント灣底を距る三十七呎の地の底に在る、青粘土の面である。此處には去る頃から、ヘーニー及びミラー會社で疏水工事を起して、灣底に隧道を穿つて居たのである。前の発見は、即ち此の際に係るのである。此件に付き、明治四十一年十二月十四日のトロント市のイーブンング、テレグラム新聞は左の如く報じて居る。

トロント灣底の下三十七呎の處に在る、青粘土層中に數多の人の足跡こそ発見せられたれ。此粘土は前世界中の間氷期に成立したるものなれば、則ち今より五萬年乃至十萬年の昔のものならざるべからず。随つて此発見の米國の地質學に取り極めて大切なると言ふまでもなし。嘗てドン河盆地の間、

氷期の粘土中に、木炭(木の焼け渣)の発見せられたることありしも、前記の如き古き人類そのもの遺跡の発見せられたるは、米國にては今回を以て嚆矢とす。発見の日は去月十三日にして、灣底に隧道を穿ちたる際なり。足跡のある層面の幅は凡六呎にして、足跡の数は凡一百形はモカッション(米國土人の穿てる革靴を附けたる足の印痕に酷似せり)。足跡の発見せられた場所附近で之と同水平に、又長さ十二吋の間氷期産の木片も出た。

足跡の所在は、堅坑第一番から凡千呎の個所で、灣の水面上から計ればその凡七十呎の下である。此個所から南方數百呎の同水平の層面にも、亦數個の足跡が出たがこれは其の形不完全であつた。

足跡中二三の横向きものを除き、他の皆一齊に、トロント市の方に向つて居たとも、一の著名な事實である。印痕の深さは種々極めて淺いものもあれば、又深さ二呎に及ぶものもある。

足跡発見の現場に居合せたもので、教育ある人は、警官グリウ、エツチ、クロス氏と工事監督、ウキリヤム、アックスフノード氏との兩人であるが、氏等は直に技

師ジブソン氏に電話を掛けて、速に來て檢分せんとを要求したのである。然し元來足跡発見の場所は豫て、コンクリートを敷く手筈になつて居たのみならず、技師の來ようが遅かつた爲に、その來る前に層面は遂に毀されて、其の上は更にコンクリートに覆はれてしまつたのである。

目撃者クロス氏は、トロント市、オイク街第二十一番邸に住んで居る人であるが、氏の言ふ所は左の通りである。

余が見た足跡は其の數百餘で、同一の人に屬する双脚の印痕も、盡く之を追蹤するとが出来た。又或る足跡は他のものゝ上に在つて中には之が爲め、多少磨滅して居たのもあつた。足跡には大小があつて、其一個は長さ三時半の小供のであつた。

足跡は皆多少明て指先の邊は、他の部分より稍深く入り込み、又踵の前の土ふまずの部分も、明に區別が立つて居た。足跡は皆モカッションを穿いて附けたものに相違ない。足跡の方向は二三の側方に向いて居たものを除けば、他は皆北であつた。

余は足跡の標本として粘土の一片を取らうと試みたが、其の質が軟かて直に

毀れてしまふといふ次第であつたから、遂に之を取ることができなかつた。掘此の足跡に掘り當てた順序を言へば、此の足跡は隧道中稍傾斜した面に在つたのであるが、左右から手挺を入れて、一枚の粘土層を起すと直に其の下層面に附いて居たのである。此の箇所から凡一百呎を隔て、且水平に亦不明の足跡が現はれた。此の兩處の間で、余は化石した木の枝らしいもの數本を拾ふた。次ぎに、ウキリヤム、アツクスフアード氏(トロント市、デフアード街六十四番邸)の言ふ所は左の通りである。

足跡の明など、モカツシンを着けて、粘氣ある粘土中を歩行いたものゝ如くであつた。足跡と水平に、余は黄鐵礦の小塊數個と、長さ凡一呎の木片とを見出した。余は此木片を數片に折つて、人夫に渡した。此木片の出たのは足跡に近い所であつた。足跡發見の箇所は、灣底下三十七呎で、即ち灣底から隧道の天井までが三十呎、天井から下の粘土層面までが七呎である。クロス氏は、早速足跡の見取圖を製し、且其の向いて居た方向を計り、尙又同時に技師に足跡の深さを示す爲に側の軟い砂の中に、自家の足跡を着けて置

いた。此の件に就き、トロントイ大學の、コルマン教授の言ふ所は左の通りである。クロスと、アツクスフアードとの二氏の言が、果して眞で、勿論之を疑ふ理由はないが、又足跡の附いて居た石が青粘土であれば、此の發見は米國大陸に取り極めて大切のことである。從來我が國の間氷期の粘土中に、木片や木炭の出たことはあつたが、人間の痕跡の出たことは、今度が始めてある。蓋し彼の足跡の年齢は五萬乃至十萬年であらう。

佛國で發見された間氷期の人の遺跡に據れば、當時の人は頗る伶俐で、骨片の上に馴鹿馬、マンモス象等の形を刻むことも、知つて居たとのことである。又教授は、發見の木片を検査して、其の間氷期のものであることを確め、且其の埋まつて居た岩石が、青粘土でなくてはならぬことをも附け加へたのであるが、其の言は左の通りである。若し、足跡の附いて居た石が粘土でなく、硬い頁岩であつたならば、其の足跡は人間の物ではなく、何か外のものゝ跡形でなくてはならぬ。何故なれば、頁岩は

のてきた時代は、人類の未だ此の地球に現はれない前であつて、當時居たものは脊椎動物では僅に魚の一種で、又人類の此の世界に出てからは、まだ十五萬年ぐらゐしか立たぬとの説であるからである。

頁岩と堅い青粘土との見分は経験ある地質學者の外甚だ難いのである。

トロント市の案内記中、其の地質に關する部分には、下の如く言つてある。

即ち市其ものは、平均三十呎の厚さを以て、堅岩の平坦面に堆積せる、漂粘土の上に建設せらる。粘土の時代は、新近なれども、其の下頁岩は甚だ古きものなり。

前の足跡が如何にして、地の底に在る粘土の上に印せられたかに就ては、コマン教授は左の如く言つて居る。

トロント市では、二回の氷期を経験して居る。此二氷期間に介在する所謂間氷期には、オンタリオ湖は今より遙かに小さくて、今のトロント湖と稱ふる部分の水底は、全く陸地であつた。即ち水面より一層高い所であつた。此の時の邊の陸地の高低に變化を生じて其の結果、ジョルジャ灣の水が、直接にオンタリオ湖に流れ込むことになつた。此の際出來た川は、即ちローレンシヤン河と名附られたもので、其の押し出した青粘土の洲が、即ち足跡の着いて

居た所である。蓋し此粘土の面は足跡の付いた儘、日光に乾かされて固まつて其の上に更に又粘土が沈澱したものであらう。

當時此の地方の氣候は頗る溫和で、今のオハイヨ州ぐらゐのものゝやうであつたが、其の内第二回目の氷期となつて、土地の高低に變化が起つた。其の結果として現今見る状態が現はれた。それでジョルジャ灣とスベリヨル湖との水は、イーリ湖を通過して、オンタリオ湖に流ることゝなつて、遂にオンタリオ湖の水平は、今日の様に高くなり、又之が爲に、湖の形も大きくなつたのである。

さて、モカッションを着けた足は、不思議の様であるが、歐羅巴の間氷期に産した人類の智識の發達から考へて見れば、不思議でないのみならず、或は當時既に此の靴を用ひたといふとは、随分實らしいのである。若し之を用ひたとすれば、其の人類は今の土人の祖先であると思ふべきであらう。

教授は、木の枝と稱へられたものを取り調べて、其の木ではなく、枝珊瑚の如きものであることを言つて居るが、其の枝なるものは頁岩中に産したもので、偶然粘土中に在つたやうに見えたものである事をも言つて居る。又粘土中に出た、

黄鐵礦の塊は、足跡に對しては、何等の關係もないものである。木片に就ては、トロント一案内記を參考するに、左の如き記事がある。堅岩の上に成層する粘土は、他より流れ來たりしものにして、三種あり。即ち黄色のもの、青色のもの、及び革色のものは是なり。青色粘土中には、木の破片を産すること珍らしからずして、此の粘土は地面最近のものにして、又同時に時代最新のものなり。

ナイヤガラ瀑布の中間に位する、ゴート島に關する書中、ベートル、エー、ホータ

といふ人が、氷期に就て論ずる個所に、左の如き一節がある。宏大なる氷層の重さは、土地をして、北東に於て隆起せしむ。其の結果として、氷層の退却あると共に、今の三大北湖（スベリオル、ヒウロン、ミシガンの三湖）の水は東の方、オッタワ河の方に流るゝに至り、其の後、土地昂起するに及んで、トレント河谿に入るに至れり。而して茲に注意すべきは、北東に方る土地は、今も尙昂起しつゝありて、徐に昔の水平に復しつゝあることは是なり。トロント市、師範學校附屬博物館のデヒッド、ポイル氏の言は左の通りである。

灣底下に發見された印痕が現代の足跡であることも、不可能の事ではないが、然し、余はそれが實らしいと云ふことはできない。トロント附近に住んで居た土人はアツチワンダロンと稱へて、ヒウロン、イロコワ種族に屬し、又、其の北には、煙草印度人、一名チヨノミテーツ族も、住んで居たのである。



足跡の石化

如上の土人は、米國發見の當時此の邊に住んで居たものであるから、其は餘り古いことでもない。現下、博く考古學者間に唱へらるゝ説によれば、塚を拵へたものは今の印度人ではなくて、其の祖先であるとのことであるが、余が考へては、此

の塚を拵へた祖先には、その亦祖先があると思ふのである。今の印度人や、其の祖先の塚を築いた種族の手で出來た遺物よりも、尙一層古い遺物中には、巧妙奇麗の細工品といふものは、一もない。余は此粗製品の多

數を採集して持つて居るが未だ之を公衆に見せたことはない。其の採集場所
所は地面附近で品物は皆鍛て掘り出したものである。前の足跡を人の足跡
とすれば其の人と此等の採集品を拵へた人とは同族かも知れない。よし
うでなくても之を否認する地質學上の證據は全くない。しかし此の邊の土
人の祖先や、その又祖先の住んで居た時代は全く不明である。之に關する記
録的のものが少しもないのである。

モカッシンは頗る古いもので、最初草で造つて足裏に結び付けたものである
が其の後草は革に變じて纏ひ方も亦變じたのである。

トロント市では、今から數年前に、地面下十二呎の處にある青粘土中からマ
ンモス象の骨を掘り出した事がある。又同市デウボン街でも同じ粘土の中
から同種の象骨を掘り出したことがあるが、何れの場合にも骨骸の位置から
判断すれば昔し象が泥沼に入り込み深く足をめり込ませて、立往生をしたも
のゝやうに見えたのである。

従來の研究によれば、歐洲では人とマンモス象と同時代に生活したことは確
實であるが、米國では未だ之を證するだけの材料が出て居ない。

若し前の足跡が本物であつて之を附けたものは人であるとするれば、米國に於
ても亦人とマンモスと同時代に住んで居た事が有り得べきことになる。ア
イオワ州デープンボートの僧ガス氏は曾てマンモスに似せて刻んだ煙管を
掘出したとがある。尤もスミツソニヤン、インスチウシオン會の學者は、之
を或る者の惡戯になつた物と言つて居る。西部諸州にはマンモスの形に似
せた塚が少なからぬといふとであるが、若し之を眞なりとせば米國でも人がマ
ンモスと同時に生活して居たことは、明である。

ポイル氏は尙塚を築いた種族前の種族の手に成つた細工品を所持して居る
が、其の中にヒウロニヤ時代の粘板岸で拵へた石斧がある。形も綺麗であるが
其の面には又奇妙な模様も着いて居る。又砂岩の煙管で、其上に種々の面を附
けたものもある。其の他鰻や獨木舟形に彫刻した石や石の鶴嘴等の如きもの
もある。

モカッシンに就て、ロング、ロート氏の言ふ所を聞いて見ると、北米印度人の用
ふるモカッシンといふ靴は、中古の末に當つて、歐羅巴で中等社會の人の用ひた
靴に、大に似て居る所があるによつて、或は歐羅巴から米國に輸入された者では

あるまいかとの説もあるが、是は全く取るに足らぬ説で、その故は昔し西班牙人が始めて渡米した頃に既に土人は一種の靴を有つて居つたことが記録に残つて居るからであると言つて居る。

トロント地方の間氷期の層に就ての第一の専門家であるのは、前のコイルマン教授で、その著書中に、トロント系統と稱する地層こそ、加奈陀に於ける、間氷期の層の最も完全にして、且最も有名なるものであるといふことが載せてある。

此の間氷期中には、紅葉、バヤ樹、トネリコ、赤樅、オセージ蜜柑等の植物が入つて居るが、紅葉は、學名をアセルプライストセニクムと稱へて、今は既に無きもので、バヤ樹も、今は、加奈陀には産しない。又オセージ蜜柑も、目下合衆國の南部にのみ産するものである。

間氷期の層が出来たのち、オンタリオ湖の水は其の量を増して、水平を高むること、現状より六十呎の上に至つて、此の水平の高い間に、粘土、砂、砂利等を沈澱した。此の間氷期中のドン時代と稱するは、少なくとも數百年間に跨つた長い年月であつて、當時トロント地方は一時樹木繁茂して、青蒼たる森林地となつたも

のである。

コイルマン教授は、十二月十四日に、出来得るだけの證據を集めて、足跡の研究をなしたが、其の結果は、翌十五日刊行のテレグラム、新聞に掲載せられた。其の文意は左の通りである。

コイルマン教授は、灣底の下に開かれた、隧道中の足跡に就ては、餘程困却の體なり。教授は第二番堅坑に行き、アックスフロードの二氏に會見して、隧道より掘り出したる土石の堆積に登りて、二三の石の見本を取りたる後、下の如く言へり、此の件は、一の不思議である、此の不思議を明にすることは、今は不可能である、足跡なるもの、附いて居た石を壊す前に、一應地質學者の臨檢を乞ふか、又は其の石を、其の儘標本として、取り置かなかつたのは、此の件に就ての、一大恨事である、今となつては、其の如何なるものであつたかを明言し得るものは、一人もない。

クロスと、アックスフロードとの他、尙此足跡を見たものは、ウエリントン街、二百七十一番邸の、ウキリヤム、ハリス、及びクラレンス小路十四番邸の、エツチ、キングの二氏であるが、孰も之を足跡と認めて居る。ハリス氏は、モカツシン

を穿いた人の足跡であることは、明々瞭々であると言つて居る。又キング氏は余は人の足跡であることは少しも疑はない。他にあのような跡を付け得るものは決してないと言つて居る。

コールマン教授が足跡の附いて居た石の見本を得たしとの望によつて、クロス、アックスフアードの二氏は、堆積中を捜したのであるが、原品は之を見出すことが出来なかつた。又其時、掘り出した石は何處に捨てたものであるか、一人も之を知つて居る者がなかつた。因つて二名は致し方なしに斯くの如き石であつたと、原品に似た石を教授に見せた。アックスフアードの言に、或る所では青粘土は頁岩の下になつて居て、其の質の軟きこと、鍬を以て之を鞠ひ上げることが出来る位であるとあつた。

間氷期の木片に就ては、アックスフアード氏の言は、左の通りである。木片を見出したのは、伊太利人にて、其場所は足跡から南に方る所で足跡発見の翌日である。発見者である伊太利人は、余にその木片を持つて来たから手に取つて之を見ると可なり長さ有つて居たものであつた。余は之を數片に折つて記念として、數人に分與した。

夫から、クロス、アックスフアードの二名は、雪の中に形をつけて、足跡の形やその深さ、明瞭の度等を教授に示したのである。尙以上二氏の外之を見たものは今セイント、カサリンに住む、ロイ、タツガートといふ人であつた。底てコールマン教授は左の如くに言つた。

此の事件は、余が初めて木片を見て、之を間氷期産と鑑定した頃には、甚だ簡單であつたが、今は複雑な問題に變じた。蓋し此問題の解決は今となつては不能であらう。第一人の足跡が青粘土に附いて居ることは有り得べき事であるといふのは、其の粘土は五萬乃至十萬年の昔のものに過ぎないからである。然るに足跡の附いて居た石と同じであると言つて二名の目撃者が、余に示した石は、粘土ではなく、頁岩である。頁岩は頗る古いもので、此時代には魚を措いて他に、脊推動物は一も居ないのである。然し目撃者は人の足跡であつた事を信じて居る。若しさうであれば、其附いて居た石は、頁岩である筈はない。尙又頁岩時代には、目撃者が形容するが如き形の印痕を附くるような動物は、絶対に居ないのであるにも拘らず、二名は足跡であることを信じて疑はない。すると問題は下の如くなる。原石が頁岩で、其の中に足跡様のものが附い

て居たとすれば、其の足跡様の印痕を附けた者は何者であるか。
 第二に、此の問題を甚しく錯雜ならしむるものは、木片である。此の木片は
 間氷期産に相違ないもので、頁岩中より出てべき筈のもてない。言ひ換れ
 ば粘土中のみ産すべきものである。此の木片の外、頁岩の下にも青粘土が
 あると言ふ所から見れば、問題の地の地層の構造は頗る混雜して居るものと
 見なければならぬ。若し余をして足跡なるものを見せしめたならば、尙又若
 し余をして足跡の附いた儘の原石の一片なりとも、見せしめたならば、余は此
 の問題の、少くも一部分だけは之を明にすることを得たに違ひないと確信
 するのである。

コールマン教授は、此の件に付き、千九百八年十二月十五日の日附を以て、自署
 の上左の如き覺書を認めたのである。

トロント灣底の下を通ずる、道隧中人の足跡と稱するもの、發見は、自然、世
 人の耳目を聳動せしめ、又トロント附近の間氷期の層中に産する木と相似
 たる木片の發見は、足跡をして之を真ならしめば、或は間氷期時代のものなら
 ざるやとの疑を起さしめたり。從來米國にては、人類が既に間氷期に産し

たることを示す證據は、未だ之を發見したることなかりき、歐洲には之あり。
 昨日の午後余は、隧道より取り出したる土石の堆積ある箇所を檢分して、足跡
 の附着し居たる石と稱ふる石は、最初木片の存在より判斷したる如く、間氷期
 の粘土に非ずして、ハドン河頁岩と稱へて、古生界の下部に屬する頗る古き
 岩石なることを確めたり。

印痕を目撃したる人々は、そのモカツシンを附けたる足の印痕なることを確
 信せり。斯かる印痕が、間氷期の粘土中に發見せらるゝは、随分有り得べき事
 なるも、頁岩時代の如く魚類を以て、最高等の動物としたる時代の岩石中に、有
 り得べからざることは、今更言ふまでもなし。

頁岩は、毀れ去り足跡の附着し居たりと稱する箇所は、最早セメントにて、敷き
 詰められたれば、蓋し吾等は、永久その如何なるものなりしかを知る能はざる
 べし。從來發見せられたる頁岩時代の化石中には、人の足跡に似たる形のも
 の一もあることなし。

斯く趣味多き事柄の、只不思議として、永く解決せられざるは、學術上の一大恨
 事と云はざるを得ず。コールマン(自署)

此の件に付き、ジョーセフ、チレル氏の批評がある。その大要にて十二月十六日のテレグラム新聞に、現はれたのは、左の通りである。

ジョーセフ、チレル氏は、マスター、オブ、アーツ、並にパチエラー、オブ、サイエンスの兩學位を有する、名高き鑛山技師なるが、排水工事の隧道中に、発見せられたる印痕を、間氷期の人類の作用になれるものとする説を、非認して、且言へり、若し印痕を、頁岩中に在りたるものとすれば、それは蓋し植物の印痕ならん、勿論、從來頁岩中に産したる植物、動物若くは魚族中には、足跡に似たる印痕を附け得べきものなきを以て、その印痕を附たる植物は、未だ曾て學術上に知られざる、全く新規の種類なるべしと。

昨日の新聞に出たる記事に、氏は彼の印痕を海老の一種、ピロピテスの爲せしものなりとの一節ありしが、氏は之に對し、下の如く云へり、記者は、事件を混同せり、余は傳話にて呼び出しを受けたるのみにて、原事實の話は、少しも聞かず、余は鑛山技師なり、地質學の書を繙かざることに、既に久し、故に、余はかゝる事柄には、頗る迂なり、頁岩に就ての、チレル氏の言は、左の如し。

地質學者をして、印痕を見せしめざりしは、不幸なり、我が地方には、地質學者少からざるを以て、毎月一度は、地質學者の臨檢を乞ふこそ至當なりしなれ、彼の印痕が足跡ならざりしにせよ、面白き発見なりしには、相違なし、余は固より、発見者が足跡なりしと思惟せしことを、少しも疑ふものにあらず、然し若し此の印痕が、頁岩中に在りしものとすれば、それは人の足跡なること能はざるなり、若し左は、なく、粘土中に在りしものとすれば、それは人の足跡なるか、又は或る動物の足跡なるべし、若し灣底の成層不規律にして、岩石面に凹所ありてそれが足跡と見誤られたりとすれば、その面は青粘土面なりしなるべし。

チレル氏が、アックス、フロード氏より、隧道の天井に、魚の推骨と肋骨の出でたりしことを聞いて、言へること下の如し、それは青粘土中なりしならん、尙又発見されたる木片の所在は、青粘土中の外、他にありべき理なし、但し岩層面錯雑せる場合には、下の頁岩中に、突き込まれたることなしとせじ、余は素より、隧道開鑿の際、其の場所に臨み居たるには、あらざれども、然れども、足跡所在の個所に就て聞きたる所によれば、それは岩石の硬き部分と軟かき部分との間に在る、硬結せる粘土中なりと判断せざるを得ず、蓋し化石の保存し易きも、多くは斯かる個所に在りとす、頁岩の成立したる時代には、三葉蟲及び介類産したるも何

れも人々の見たる如き印痕を附するに適する大きさのものにあらず、又當時の植物中にも問題の如き印痕を附し得るものあるをきかず、尤も中には奇形の藻なきにあらずして、其の一は双子球の形を有せり、但し彼の印痕を附し得るには、餘り小に過ぐ、蓋し彼の印痕は大なる藻の葉の型なるべきも、そは學術上人の未だ知らざる種類なるべし。

ウキリアム、アックスフロード氏は、前にも述べた通り、足跡の目撃者であるが、氏は始末書とも云ふべきものを認めて、之に自署して居る。その言は左の通りである。

トロント市、デフラー街六十四番住のウキリアム、アックスフロードなる余は、ヘーエー及びミラー會社の、隧道開鑿工事の監督者なるが、去十一月十三日の朝トロント灣底に當る隧道にて、第二番鑿坑の底の北凡一千呎の點にて工事に従事し、隧道底の一凹所より、水を排出して之を掃き清めたるに、長さ凡三十呎、幅凡七呎の層面現はれて、其の上に人の足跡と認むべき印痕一百餘を數へ得たり。因て余は、警官クロス氏を呼び寄せて、之を見せしめたるに、氏も亦余と同じく、之をモカッシン靴に包まれたる足の印跡なることを信じたり。

是に於て、余等は石の一部を剝き取らんとせしも、其質脆くして、毀れたり。余等は直に此の事を地上に傳へたれば、二三の人は、下り來て、印跡を目撃して、又足跡なりと言へり。足跡中には、余等が小兒のものとして認めたる、長さ三吋乃至四吋の一跡も存せり。他は是より遙に大にして、第七號靴を穿てる余の足より、大なりき。或るものに於ては、モカッシンの母指深く粘土中に侵入して、之が爲に粘土は、踵の方に押し遣られて此の所に突出せり。或る足跡は、側方に向へり。

余は、足跡の附着せる岩石が、如何なる種類のものなりしかを、言ふ能はず。此邊に、隧道を開鑿する際には、凡そ每十五呎に、硬き青粘土中に在る軟き部分に出會ふを常とす。此部分は、鐵にて削り取ると難からず。足跡の所在點は、隧道の底と豫定せられたる面の下十八吋にして、此の所には、其の後、一面コン

クリートを布けり。
翌十四日の朝、前の個所より、凡そ一百呎の南にも、亦足跡數個を發見せり。但し前日のもの、如く、明かなるものには、あざざりき。
十五日の朝、伊太利亞人にて、チャーリーと云へる者、隧道中にて發見したりと

て余に木の一片を示せり。余は之を數片に折り、記念として人々に分與し、余も亦其の一片を取り置けり。余が其の後、イーブンング、テレグラム新聞社に呈出したるは、此の一片にてありき。
附圖(クロス氏の畫きたるものを指す)は正確に、足跡の如何なる觀を呈したるかを示すものなり。

千九百八年十二月十八日

ウキリヤム・アックスフアード(自署)

足跡の化石の由來は上述の通り、洵に面白いものに相違なかつたのであらうが、之を破壊してしまつたのは實に残念至極である。

世界最大の金剛石

現下、世界で最も貴重なる寶石視せらるゝものは、金剛石である。此石は化學上の成分から謂へば、一塊の炭素に過ぎないで、木炭や石炭又は鉛筆の原料である石墨など、殆ど同質のものであるから、珍くもなければ、香ばしくもなく、平々凡々たる代物に違ひないが、さて此の平々凡々たる代物が、何故に左程世人に重

寶がらるゝかと云ふに、つまり金剛石の形をなして産する炭素は、其の質が純良でさへあれば、珍無類の光澤を發するからである。尤も此光澤も玉磨かざれば光なしの譬へに漏れず、研磨をかけて始めて出るもので、天然の儘では、まことに詰らぬものである。昔金剛石の産地として有名であつたのは、印度であるが、今は阿弗利加の南部、トランスワール國が之を凌ぐようになつた。現に明治三十八年同國、ヨハネスブルク附近のブルミエー坑から掘り出した一塊は、古來未曾有の尤物で、其の重さ、三千二百二十四カラット(我が百六十四匁九分餘)に達し、形は八角で、其の中の四面は、八面體の原結晶面であつた。品質も純良で、少しも申分のないものであつた。

此の逸物發見以前に在つて、最大の名を取つた石は、矢張トランスワール國の「エーガスフランティン坑」から出て、エキセルシヨールと名づけられた一塊である。此石は、長卵形をなし、長さ二寸九分餘、幅は二寸八厘であるが、三十九年に出土のものに比ぶれば、大人に對する子供のやうに小さなものである。

さて、ブルミエー坑發掘の石は、直にトランスワールの大統領の名を取つて、「カリナン」と稱することになり、其市價に就て様々の説が出た。中で最高のもものは、

五億圓であつたが、然し當時其の市價を豫想することの出來なかつたと云ふのは石はまだ天然産の儘で、切子玉に製せられて居なかつたからである。よし又切子玉に製せられても、斯かるものは、買手の出ない内は、直打も極まらないものである。如何なる寶でも買手のない時には三文の直打もないと云つて差支ないのである。彼の「エキセルシオール」石も價額は一千萬圓と見積もられたのであるが、今以て買手が無い位である。「カリナン」はその後五百十六カラットの玉一個、三百九カラットの玉一個、百カラット以内の玉百個に切られたのである。葡萄牙の國寶となつて居る寶石中に「ブラガンザ」と稱する金剛石がある。此石は重さ千六百八十カラット、九十一匁六分あつて、エキセルシオールよりも大きく、市價は一時法外にも十億圓とまで取り沙汰のあつたこともあるが、人の噂に此の石は、其の實金剛石ではなく、綺麗な黄玉又は水晶ならんとの事である。固より之が眞偽を見るのは、専門家に取つては、雜作もないことであるが、葡國の王家では、決して之を人にいぢらせないとの事である。それも其筈、若し此石が偽物であつた日には、王室では非常に面目を失ふ譯である。

「ボルネオ島」マツタン王の手に在る一石は、重さ三百六十七カラット、凡二十匁

て同島南東部の「ダナウ」河附近に出たと云ふので、「ダナウ」王と名が附いて居るが、是にも曾て眞偽問題が起つて、終に今から四十八年前に、「ボンチャナツク」の地で試験をした所、試験した石は水晶であつたのである。然るに所持者たる王は試験に出した石は、本物に擬して拵へた偽物であると辯解したといふことである。王の言が負け惜みであるか、或は本當であるかは未だ疑問の中に在る。

既に二百六十年も昔から、世界に名高くなつて居る石は、大蒙古と稱したもので、今は其の所在さへ判然しないのであるが、西曆千六百六十五年、佛人「ダベルニエ」が印度「テルヒ」府の大蒙古王「アウレンゼベ」の朝にて、目撃したと云ふ話によれば、石は二百八十カラット、凡十五匁の重さで、「ロゼット」形の切子玉に製したものであつたとの事である。一説に目下英の國寶である「コヒニール」と稱する金剛石が取りも直さず、此の大蒙古にはあるまいとかの噂であるが、兎に角此の「コヒニール」は、今から六十五年前、英印會社から、印度産として、「ヅキクトリヤ」女王に獻納したもので、當時は重さ百八十六カラット、凡十匁の「ロゼット」形の玉であつたが、此の石は、其の後阿蘭陀國「アムステルダム」にて、「ブリリヤント」形に切り直された爲に、重さが百六「ラカット」凡五匁七分厘に減じたのである。

然るに亦他の説によれば、現今露國の帝室に在る「オルロフ」と稱する石こそ昔の大蒙古であると云ふ事である。「オルロフ」は半球状をなして、其の球面は「ロゼット」形に切られてゐて重さは百九十四カラット（十匁五分七厘）ある。又一説に「オルロフ」は大蒙古ではなく、其の昔印度の一寺院にて梵天王の眼球に用ひてあつたものであるが、二百餘年前此眼球は佛國の一兵卒の爲に盗まれ、それから數人の手を経て「アムステルダム」府に現れた時「オルロフ」公が當時の露帝「カサリナ」第二世の爲に百四十萬グルデンを出して買ひ取つたものであるとのことである。

印度地方の産て最も美麗で最も有名なのは佛國の國寶になつてゐる。攝政一名「ピット」である。是は千七百一年「マラツカ」半島に出たもので、當時印度「マドラス」府の奉行をしてゐた「ピット」と云ふ人が之を二萬四百磅て買ひ取つて、夫から十六年の後之を當時佛國の攝政であつた「オルレアン」公に二百萬フランて譲つたのである。其の時石は四百カラット（二十二匁三分四厘）の重さであつたが之を「ロンドン」の職人にやつて「ブリヤント」形に切らしたゝめに、百三十七カラット（七匁七分六厘）に減じた。然し其の質の玲瓏鮮麗なる點に於ては、世界第一等

と稱せらるゝのである。扱此の寶石も千七百九十二年佛國革命騒動に際して盗難に遇つたのであるが、さすがの泥棒も露見を恐れて、之を賣ることが出来ず、詮方なしに之を街頭の溝渠の中に隠し置いて、無名の手紙を以て警察に自首したのである。夫て右は早速發見せられて、再び國の所有となつたが、其の頃成り立つた共和政府は、財政困難の爲に之を質入したのである。然るに其後「ナポレオン」一世の時代になつて受け戻され、今も尙佛國政府の寶物として残つて居る。攝政より一層歴史の多いのは「ナンシー」と稱する五十四カラット（二匁九分四厘）の石である。此石の産地は不明であるが、先最初の所有者として知らるゝものは佛の「ブルゴイス」公爵「シャル」であつた。公が「ナンシー」の戦ひで不幸討死をした時にも之を肌に着けて居た爲に、瑞士の一兵が之を奪ひ取つたのであるが、兵士も其の寶石なるを知らずに二足三文に賣り飛ばした。夫から遂に「ナンシー」石名も之に出づと云ふ人の手に入つたが、それから更に英皇「エリザベス」の手に這入つた。其後「チャールス」一世の代に至つて佛國「マザラン」僧正の手に舞ひ込み、僧正の手から佛王「路易十四」世の手に移つたのである。其後佛國革命の際に盗まれて、一時其の姿が見えなくなつたが、それからどういふ道行をした

ものであるか、一時西班牙の國寶中に混て居た。然し此にも長くは止まらずして、遂に露人デミドフ公の手に這入つたが、其の子孫の代になつて賣り拂はれた爲に、千八百六十七年の、巴里の萬國博覽會場に陳列されてあつた。今は印度の「マハ」王の手に在ると云ふことである。

現今露國の帝室に在る波斯王と稱する石は、千八百二十九年、ホスロエス親王から露帝に差し上げたもので、其の形は柱状をなし、切子面には、波斯文字が彫刻してある。重さは八十六カラット（四匁六分八厘）ある。

尙有名の金剛石は、埃國の帝室に在る、フロレンチーネル、同國一公爵の所有にかゝる「エステ」星、英國「ウエストミンスター」侯の「ナツク」等である。

名高い金剛石は、無色透明のものばかりにも限らない。黄色、綠色、藍色等のものて立派なものもある。曾て佛の國寶であつた、貴石中に、六十七カラット「三匁六分五厘」の「ブリリヤン」形の綺麗な藍色を帯びたものがあつたが、前に述べたものと共に革命騒動の時に紛失した切り、其の行衛が分らなくなつた。

以上述べたものの中で、攝政は、千七百十七年の頃、まだ天然の儘の時に、凡八十萬圓に賣れたが、玉に切つた後には、其價が六倍に上つた。又「オルロフ」の賣價は

百二十五萬圓「サンシー」の賣價は二十萬圓であつた。

高價の動物標本

動物園に飼つてある動物には、手に入り易い普通のものゝ容易に得難い高價のものがある。高價のものゝなると、普通の動物園の經費では、逆も買へないものがあるから、此等は經費の豊かな動物園に行かなければ見られない譯である。故に動物園の眞價は、その大小に在るばかりでなく、高價のものゝ有無多少にも在ると云つてよろしいのである。

動物をして高價ならしむる原因は、種々ある。便ち捕獲し難い事、運搬費の掛ること、病氣に罹つて仆れ易いこと、特別の由緒や歴史のあること、實際稀であること等で、中には此等數個の原因を兼有して居るものもある。

□獅子と虎と狒々

獅子や虎のやうな猛獸は、多くは生擒し難いので高價である。三年前、エジンボロ市で、動物の競賣があつた時に、亞弗利加獅子は一頭八百圓に賣れ、印度虎は

一頭千五百圓に賣れた。虎の獅子より高いのは、その性が一層悍猛で捕へ難い
によるのである。獅子も印度グゼラット産は印度の一局部ギルの森林以外に産せず、而もその
地の領主以外は、之を捕ることを禁じてあるから、歐米の動物園で之を藏してゐ
るのは一もない。

虎も西伯利亞と朝鮮との産は、容易に得難いので、その價も非常に高い。先年
獨逸ハンブルクの動物園で得た西伯利亞虎は一萬二千圓して、英國ロンドンの
レゼント公園に在る動物園のも亦殆ど同價であつた。

狒々も生擒し難い動物の一である。諸方の動物園に猩々や黒猩々の多いに
反して、狒々の甚だ罕であるのは、全く此理によるのである。淺草花屋敷に狒々と
札の附いた猿は、バビヤンで狒々とは大違ひ。最近に、ロンドンの動物園で買つ
た狒々の小供は八千圓であつたが、大供ならば確に四萬圓はしたのである。

□象

象の如きは、大きい割にはさう高價のものとは云へないが、運送賃は、身體の大

きいだけに、可なり高いものである。印度象を、歐羅巴まで送るには、運賃のみが
少くも四百圓かゝつて、航海中の食物が約八百圓かゝるといふのである。その
他經費と象の原價並に商人の手數料等を合せて約五千圓の直段になる。

□猫と狎と蚤

猫や狎は普通のもは極めて安價で蚤に至つては、只ても貰ひ手はない筈で
あるが、しかし此等でも特別に由緒あるもの若くは特別の場所に産するものは
却々高價である。

曾て、波斯猫で、王宮に飼はれたものといふので、一萬圓に賣れたのがある。又
米國の富豪ピヤボント、モルガン氏は、清朝時代の北京の後宮内に飼はれてゐた
といふ狎を持つてゐたが、或る人が之を五萬圓で譲つて貰ひたいと申入ると
モルガン氏は、金に不足のない人だけに、そんなはした金で手離せるものかと之
を拒絶したとのことである。

英國の大金満家ロスチャイルド氏は、種々の動物に寄生する蚤を集めてその
數を二千餘種にまで及ぼした。しかるに、北極狐の蚤がないと言つて、採集人を

出して見たが、却々手に入らないので、加奈陀の重なる新聞紙に、北極狐の蚤を探集して呉れた人には、多分の禮金を出すと廣告した。すると同國は北氷洋に毛皮獸を狩りに行く獵師の多い所の事として、問もなく玻璃管詰めにして三匹の蚤を送つたものがあつた。そしてその蚤が實際北極狐に寄生したものである事は共に送つて來た地方官の證明書で明白であつたから、ロスチャイルド氏は發送者に禮金として千二百圓を呈した。如何に珍しい蚤とは云へ一匹四百圓とは驚き入つたものである。

□ 幽靈マキの稱ある擬猴

幽靈マキといふは、鼠大の擬猴の一種で、學名をタルシナス、スペクトラムといふ一見奇態な動物である。頭大きくて顔面は蛙の如く、眼は馬鹿に大きくて、ミヅクのその如く、耳はヒに似て手足指等の細いこと殆ど骸骨の如く、尾は長く、その先きは毛深である。斯かる奇動物であるから、之を産するジャワ島の土人は、餘程之を忌んでゐるのみならず、之に手を出せば、祟りを受けると稱して又大に之を怖れて居る。随つて之を生擒させることが容易でない。

されど一度和蘭陀の船長で土人の獵師に二百五十圓を與へて一匹のマキを捕へさせたものがある。此時にも獵師は餘程躊躇したさうであるが、金が欲しさに勇氣を奮つて動物を押さへたといふことである。船長はマキを得て、シン



ガポールに航して、此處で之を或る獨逸人に五百圓に賣ると獨逸人は更に之を丁抹人へ、ハンブルグの獸類商會の出張員をして賣つたものに、千二百圓で轉賣した。すると出張員は直にロンドンの動物園に報告して、之を四千圓に賣る約條を結んだ。尤も動物園

では金は動物と引き替への外渡さぬとの事であつたから、出張員は途中異變のないやうに、非常に動物を勞りながら、歐洲向けて出立した。そして紅海を過ぐる迄は何の異狀もなかつたが、船が蘇士の運河に入ると、氣候急變の爲め動物は風を引き込んで、次第に不活潑になり、終に目を閉ぢて、息を引き取つたによつて、

出張員は、千二百圓の金を棒に振つて大落膽をしたとの事である。

□ アルミキ(學名ソ
レノドン)



ど滅亡に瀕して居る。

アルミキとは、蟻の如きもので、一見しては鼠に似て専ら西印度に産する動物である。二種ある。一はソレノドン、キウバナスと稱して、キウバ島に産し一はソレノドン、ドミニカナスと稱して、サンドミンゴの島に産するのである。昔西班牙人が初めて此の地に渡つた頃には、アルミキは到る處に産したが、西人の輸入した猫や犬が殖えるに連れて、アルミキは次第に減じて、三百年後の今日では殆

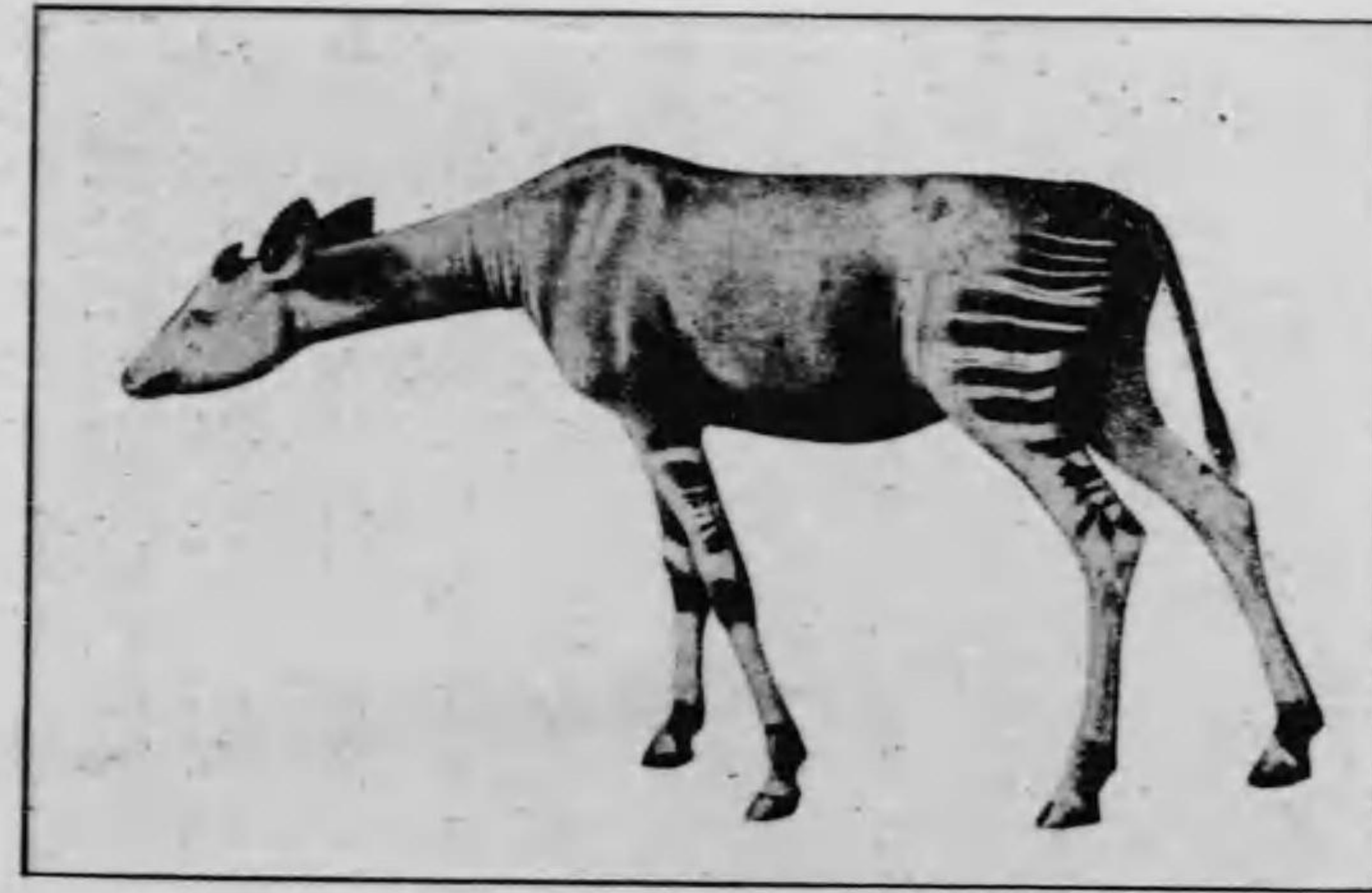
先き頃、ニューヨークの博物館で米洲産の動物は、皆之を網羅したしと大金を掛けてその一標本を買はんと試みたが、一匹も手に入らず、よつて金のある儘キウバ島に採集隊を派遣して、六個月間之を捜さしたがそれでも一匹も得ることが出来なかつた。夫て昨年又採集隊をサンドミンゴに出して、辛うじて三匹を生擒した。しかるに此の三匹は捕はれの身となるや、皆死んでしまつたから、止むを得ず之を剝製にして、ニューヨークに持つて歸つた。底て採集隊を出した費用が二回で三萬圓であつたから、アルミキ一匹の剝製品は一萬圓づゝに當つてゐるわけである。

尙アルミキの外、得難いものは澤山ある。南米西岸地方のチンチラ、ニウジールランド島の、ハツテリヤやキウイ、濠洲のカモノハシ、西伯利亞のウムキ等、一々枚舉に違ないが、今日世界中最も得難いものゝ大王ともなつてゐるのは、次ぎのオカビである。

□ オカビ

オカビは馬のやうな動物であるが、其の得難いことは非常なもので、蓋し是れ

ほど得難いものは從來一もなかつたといふのである。随つて同じ重さのダイヤモンドを提供しても、その得られるか得られないかの點は、確保し難いといふ位である。



最も有名なオカビ

いと、獨のシユワインフルトとが之を再発見するまでは、二千二百五十年間、全く

人知れずに居たのである。

又オカビもさうである。埃及學者によれば、埃及の昔の宮殿の墟址中に此動物は彫刻となつて立派に残つてゐるといふのであるから、太古の埃及人は之を知つてゐたものに違ひない。

然るに、オカビを初めて目撃した軍人は、博物學者でなかつただけに、餘り之に注意を拂はなかつたものと見えて、之をその儘にして置いて、明治三十七年に始めて之を本國に報告したのである。すると歐洲では、それは珍しいと言つて早速搜索隊が出来て、それがコンゴ國に向けて出張したが、其の準備の大袈裟な割りに獲物は極めて少なかつた。即ち二三枚の革と、數個の骨とに止まつた。

而もこれも皆前記侏儒人種の盡力によつて手に入つたので、搜索隊自身は、不健康な森林の湿地を數個月間探して歩いたに拘らず、目的物は一頭だも、之を目撃することが出来なかつた。

されど、革は幸に完全してゐたから、早速剝製となつて、一は、ロンドンの大英國博物館に、一は、巴里の天産物博物館に陳列された。素より歐羅巴の人が、右の二剝製のみで満足する謂はれなく、明治三十九年に

は八組より尠からざる搜索隊が、コンゴ一國に向けて出發したが不幸一も獲物を手にして歸還したものはなかつた。

それから其の翌年白耳義から出した隊は、艱難辛苦を極めた後、やつと一頭のオカビを生擒したから、皆歡天喜地鬼の首どころか、月の世界でも征服したやうに躍り廻つて之を海岸地まで輸送する間に、死んでしまつた。併し幸にも一行は動物がまだ無事であつた間に、四方八面から之を寫真に撮つて置いたのであるから、その生きてゐる時の状態は之によつて知ることが出來た。死體は勿論剥製となつて白耳義に渡つたのである。

底て各搜索隊の費した金額を、平均五萬圓を下らずとすれば、搜索に出た隊数は少なくとも十組もあるから、從來之に費された總金額は約五十萬圓となる理である。して見ると彼の動物が生きて歐洲に渡つたなら、少なくとも七十五萬圓の價はしたものであらうといふのである。

稻田の地理的分布 (米食者の數)

全世界に於ける米食者の數は何程であるか、之を精確に知ることとは不可能事

であるが、兎に角、その大部分は亞細亞に居て、而もその季節風の吹く地方に最も多いとは疑ふ可らざる事である。蓋し亞細亞の米食者を見積つたなら、約六億もあるべく、而もその中の四億四千萬は、支那と印度とに在る。今此の數字を擧ぐるに當つて、吾々の特に氣を附けねばならぬことは、以上の二國にても米を主食物とせず、粟麥等その他の穀物によりて生活するもの少からぬとてある。

六億から四億四千萬を差し引いた跡の残り、日本帝國、菲律賓、スンダ諸島、印度錫蘭、露領亞細亞、西部亞細亞等に居る米食者となるのである。亞細亞に於ける米食者は西するに隨つて次第に減ずるといふのは、中央亞細亞と西部亞細亞とでは小麥と大麥とが米に取つて代はるからである。但し此等の國々の輸出品を見ると、米も尠少からざる部分を占めて居る。

亞細亞以外、稻作をする所は、亞非利加と南亞米利加にもあれば、又歐羅巴や北亞米利加にもある。但しその實際食物となつて居るのは、前の二大陸のみである。亞非利加で稻田のあるのは、マダガスカル島と、その周圍の諸小島の外重なる場所は、南部である。して全大陸の米食者の總數は約二千八百萬もあるかと思はる。南米は近年大に稻作の盛になつて來た土地で、殊にその最たるのは、

ブラジルとギアナとである。南米の米食者の總數は西印度主として外國から輸入して自ら作らずを入れて、約一千萬もあらう。

北米合衆國の南部と、伊太利ポ一河の平地では、稻作は經濟上重要な部分を占めて居るが、之を主食物と見る能はざるのは、その需用高を頭割りにして見ると他の米食國のそれに比し遙に少ないからである。さて米を主食物として生活する人の頭數を總て六億四千萬とすると、世界の總人口は約十六億と打算されてあるから、米食者の數は世界の總人口の約五分の二となる譯である。

して見ると米も經濟上極めて大切な穀物で、小麦を除いては、他に之に及ぶ穀類はないのである。又他方には、此の米は他の穀物と共に、數百萬の人の食物の一部分を形作るといふことを忘れてはならぬ。例へば亞弗利加では、粟と共に之を食ひ、南米や中央米では、玉蜀黍と共に之を食ひ、北部伊太利では、小麦と共に之を食ひ、又近來になりては、歐羅巴を眞先に他の溫帶國も、次第に之が消費を増加しつつあるのである。米が熱帶地方に非常な蔓延を遂げたのは、蓋し其の消化し易いこと、餘り身體を溫めないこと、他の穀物の到底期及すべからざる收穫の多い事とである。是に由て之を觀れば、稻作の殆ど全世界に擴がつたのも、

亦無理のないことである。稻作の成功する條件は夏季の氣温が攝氏平均二十度以上であること、成長期に降雨潤澤な事並に新近の沖積地の如き良地味の土地になると等であるから、此の三條件を充たす所には、稻は既に擴り若くは擴がりつつあるのである。しかし以上の條件の最も遺憾なく充たさるゝのは、南東亞細亞の季節風帶で、殊に南支の如きは、最古の時代から之を作つて居るのである。

亞細亞季節風帶は、稻に尤も適するの地であるから、此の所では、多くは盛に植ゑられて、他の作物をして殆ど顔色なからしむる迄に盛況を呈して居る。例へば、後印度の如きは、其の一、南部緬甸に於ては、稻田は全耕地の九割二分を占め暹羅でも殆ど之と同様の割合で東埔塞交趾支那並に東京河内の盆地でも八割を占めて山の多い北部緬甸に至りて始めて四割七分に減じて居る。又支那では、少しも統計がないから水田と畑との割合を知ることが出来ないが、北部の南部より水田に乏しいことは確である。蓋し支那の米庫とも稱すべき所は、揚子江下流の低地で、此の地が年々數百萬噸の米穀を北部に向けて輸送して居ることは、人の皆知る所である。我が帝國内に入つて、先づ臺灣を見ると、耕地の約六割が水田となつて居る。それから朝鮮のは尙不明であるが、兎に角、此國が多量の米

を輸出する所を見ると、水田の亦少なくないことが略分るのである。我が内地に至つては、九州三割五分、四國四割本州北部六割、同中部四割七分、同南部五割二分となつて居る。北海道は、氣候が稲作に不適當であるに拘らず、既に一割の水田を有つて居る。比律賓は米領と變じてから政府獎勵の爲め、近來水田が大に發育して、從來多かつた米の輸入が、年々減少しつゝある。同群島で水田の最も多いのは、呂宋島とミンダナオ島とて他の小島には甚だ少ないのである。スンダ諸島も亦水田が耕地の大部分を占むる所であるが、之を數字で表はし得るのは、瓜哇のみである。即ち此の島での割合は、四割五分である。一體マレイ多島界では水田は西するに随つて減じて居る。マラツカ半島の英領の下に在る諸邦では、水田二割七分となつて居るが尙擴張の餘地はある。印度は、地勢と雨量の多少とによつて、隨所大に違つて居る。乃ち水田の尤も盛なのは、ベンガル、アッサム、恒河流域、婆羅門河流域等であるが、其の割合は、東部ベンガルとアッサムとでは、七割四分、西部ベンガルでは、五割七分、アグラ、オーバの二州では、二割五分、中央諸州では、二割三分、マドラスでは、二割八分、ボンベイでは、八分、シンドでは、二割一分、パンジャブでは、三分である。

錫蘭島は土質もよし氣候もよいが、水田は茶畑の爲に大に其の區域を狭められて、僅々一割七分しかない。随つて米の輸入が多いのである。此の輸入は上に列擧した地方を除いての印度の他の部分にも見るのであるが、輸出國は大抵緬甸である。

上述の如く、亞細亞洲の季節風帯は、水田の最も多く開けて居る所に相違ないが、近來大陸的乾燥の氣候地である、露領亞細亞にも亦大に開けつゝある。それは即ち土耳其斯坦地方で、現にサマルカンドとタシケントでは、四割七分になつて居る。尙外に、波斯のギランとサマンドラレとの二州、プハラ、カシミル高原等にも頗る盛で、小規模の水田は、亞富干、ベルチスタン、後カウカサス、ユーフレチー、スタイグリスの兩河の盆地、アラビヤ沿岸、小亞細亞の二三個所等にもある。

行方不明の探檢家ミケルセン

去る明治三十九年の事である。デンマルク政府の命を請てグリランドの北東角を探檢する目的で同國の東岸ピスマルク岬に上陸した一隊の學者があつた。これは即ち其の後大悲劇に遭遇した、エリクセン博士の一行である。此

の一行は沿岸諸處に糧食貯藏場を設けて、北東岸一帯の探検に便して翌四十年の春都合八名機十臺を犬に引かせて、北方沿岸の探検兼測量に出掛け、北緯八十度に至つて、二名は附近調査の爲めそこに残り、他の六名は更に二組に分れて、一組は北方指して進行し、一組は西方指して進行した。乃ちエリクセン博士は、此の西方組に居たのであるが、博士等は諸處探検の末、六月二十四日に至つて再び引き戻さんとした。すると極北地とは云へ暖時節になつた爲め、それまで何事もなかつた海上の氷が、多數の龜裂を生じたのみならず、其の上に積つて居た雪がぐさぐさに解け、氷を引くことは勿論、歩行くことさへ危険となつたので、エリクセン博士外一名は止むなく、海岸傳ひを中止して、陸上の山の間を辿つて還らんとしたが、進行が海面の氷上と違つて甚だ鈍く、終に半途にして糧食が盡きて、氷上餓死の不運に遭遇したことは、其の後ピスマルク岬に残つた人々が出した搜索隊の報告によつて分明了のである。乃ち此の搜索隊が、真先に見出したのはエリクセン博士と運命を共にした、ブレンルト氏の死骸であつて、其の側に残してあつた日記帳には、左の如く記してあつた。

吾々は、歸途内陸の氷上を辿りし、勞苦の爲に北緯七十九度に於て年の十一

月次第に虧け行く月の下に死す。吾が脚は凍りて、四邊は暗し、行くこと能はず。二友の死骸は、灣附近に在るの中央に在り。ハーゲン(一友)は十一月十五日に死し、エリクセンは其の後十日を経て死せり。

是によつて、三名が非業の死を遂げたことは分つたが、搜索隊は外二名の死骸を捜さずして其の儘引き返したのである。是れが即ちエリクセン一行の悲劇の大略である。

此の報が本國デンマルクに傳はるや否や、同國でも大騒ぎをして、他人は兎もあれ、隊長エリクセン博士の死骸とその學術日誌だけは是非之を取り寄せねばならぬと、四十二年にミケルセン博士が隊長となつて、グリーンランドの東北岸に出掛けたのである。然るに博士等は同年六月東岸のランベルト島に向けて出た切り、又全く消息がないので、デンマルクでは、再度の大騒ぎをして、翌々年四月、八十日の豫定を以て、エスキモ人種の研究者として名高い、クヌード、ラスムセン博士をミケルセン氏一行搜索の爲グリーンランドの北星灣から、同國の北東角へ向けて派遣した。するとその秋(四十四年十月七日)に至つて、ラスムセン博士が七月の某日附けて、グリーンランドのヨーク岬から出した手翰がデンマルク

に着いた。是によるとミケルセン博士の安否は未だ不明であるゆへ、明年(四年)二月を以て、更に樫にて、北東岸のビーリ水道に趣き、其の邊一帶の地を搜索する豫定なりとの事であつた。それでミケルセン一行の安否も甚だしく悲觀さるるに至つた。只一縷の望ともいふべきは、一行は東岸のシャンノン島に集つて援助の船を待ち居るにはあらざるやとの事であつた。此の望の全然根據なしてなかつたことは、シヤシノン島には一行が大正元年の夏迄生活し得る丈の糧食が貯へてある筈であるからであつた。(ミケルセン一行の安否は次ぎの項にある。)

命拾ひの探検家

丁抹の探検家ミケルセン大尉が、グリーンランドの北東岸に出掛けて遂に行衛不明となつたことは前述の通りであるが、其の後も永らく大尉の消息がなかつたので、本國では、大尉は雪原の鬼と化し去つたものとのみ思ひ込んで、知らざるとを問はず一同念佛に餘念なかつた大正元年の秋、不思議にも大尉は突然生還したのであるから大尉の妻子眷族は言ふまでもなく、官民一同も夢か

とばかり喜んで、盛に大尉の生還祝をしたのであるによつて、茲に大尉が歸國までに具に嘗めた艱難辛苦の概略を報道し、以て探検事業が決して山師的に名利の爲にすべきことではなく、全く國家の爲に身を犠牲にしてすべきものであることを、大方諸君に知らせたいと思ふのである。故に諸君も成るべくその心して讀まれんことこそ切望の至りである。

抑もミケルセン大尉といふ人は、探検事業には決して素人ではなかつたのである。大尉は明治三十九年から四十年に掛けて、アラスカの北に在るボーフラルトの氷海を、ベッドフロイド卿と稱する船で探検して大に獲る處があつたのである。然るに不幸船はパロイ岬の東フラクスマン島附近で氷塊の壓迫を受けて終に破壊沈没したから、大尉は止むを得ず、アラスカに逃れ、次いで本國に還らざるを得ざるに至つたのである。

然るに當時大尉の同僚エリクセン博士は、一隊の同志者を率ゐて、デンマルク號に乗つて從來未知界であつたグリーンランドの北東隅地の探検に出掛けて、ハーゲン少尉とブレンランド氏と共に上陸點であつたピスマルク岬から遂に北方に樫行して遂に最北端のビーリ水道まで入り込んで、充分の探検

を了へ更に南方へ引き戻す途中、雪解けの爲に氷が進まず、遂に糧食盡きて三名共に餓死するに至つたのである。

中で、ブレンランド氏は最も南進して、ランベルト國の糧食貯藏場附近で死し、博士と少尉とは、稍北の内陸氷上で死し、そして、ブレンランド氏の死骸と遺書だけはその後、デンマルク號から派遣された捜索隊に発見されて、博士等の死骸とその學術的記録とが、その儘発見されず、にわたる事は既に述べた通りのである。

是に於て前のミケルセン大尉は、大に之を遺憾とし、旁、同僚等の死骸を埋葬して其の幽魂を慰めんと志を起し、官民の間に奔走して費用を募集し、次いで登簿噸數僅に四十五噸の帆船アラバマ號を購入し、之に石油發動機を据ゑ附けて一時間四海里の速力とし、同志六名と共に之に乗つて、丁抹の都コーペンハーゲン港を出發したのが、明治四十二年六月二十日であつた。

船はフェロー島とアイスランド島とを経て、グリーンランド東岸唯一の殖民地であるアングマサリクに至り、此處で糧を引かする犬數頭を求め、後更に船を北に進めたが、ミケルセン大尉の最後の手翰は、ジャンソン島の南でアラバマに出遇つた一捕鯨船が本國に届けたもので、日附は四十二年八月十九日としてあ

つた。

さて、アラバマ號は、ジャンソン島に至つて、此處に根據地を設け、それからミケルセン大尉は豫ての決心通りに、直ちに自ら探檢の任に當つて、イベルセン機關長と共に、沿岸傳ひに犬糧を驅つて北行して、遂にランベルト國の豫てエリクセン博士が設けた糧食貯藏場に着いて見ると、此處で死んだブレンランドの死骸は埋葬もせずその儘になつてゐたから、直に之を埋葬して、翌年三月三日更にエリクセン博士等の死骸のあるべき、デンマルク峽灣に向けて糧を進めたのである。

さて、歸つて後に残つた船アラバマ號に就て記せば、此の船は探檢用として造つた堅牢な船でなかつたのであるから、大尉等が之を去ると間もなく、氷に押し潰されて、憫れ沈没の不幸を見たのである。因つて乗組員一同は、皆ジャンソン島に小屋掛けをして此の中に住んでゐると、四十三年の夏、圖らずも諾威の海獸捕獲船ラウラ號が來合せたので、一同大欣びをして之に便乗を乞ひ、直に諾威トロムセー港に引き揚げたのである。尤も此の擧は一見ミケルセン大尉等に對しては不人情極まるやうではあるが、しかし又た引き揚げた者の言では大尉

等の歸還時日は未定である。而もラウラ號は永く引き留めて置く譯には行かぬ、して見れば、自分等だけでも引き揚げて陸揚げした糧食の減少を防いで、大尉等の歸還後の餓死を助けねばならぬとの事であつたのである。

右の如き次第であつたから、一同の引き揚げ後大尉等の消息は皆無知れなかつたのである。唯豫て一同が聞いてゐた事は、大尉等は最北のビリーリ水道といふのが果して水道であるや否やを見極め、しかして後多分西の方ヨーク岬へ向けて、グリーンランドを横切つて北緯七十八度の邊に住むエスキモ部落に入り込むならんとの事であつたのである。

これから更に大尉等の行動を記さんに、大尉等は自分等の船が沈没したことなどは夢にも知らず、ランベルト國から内陸氷上に登り掛けると時候が次第に暖かになつてそれまで氷つてゐた雪が融け始めて、軟かくなつて橇を行るに非常に難く、且又雪下の氷面には多數大龜裂ができてゐて、其の危険も甚だしく、それに大尉等は、海拔四千尺の高處まで登つたのであるから、頂上に着いた頃には身體綿の如く疲れて殆ど卒倒せんばかりの有様であつたが、しかし此の邊は長居のできる所でもないから、急いでデンマルク峽灣の方に降り掛けると一の湖

水の畔に出たのである。すると數頭の麝香牛がゐたので、早速之を射殺し、久振りにその鮮肉を食ひ、爲に精力も稍や回復したのであるから、二人は愈々足を早めて峽灣に下り着くと、其の北岸に以前エリクセン博士が建てた避難小屋を見つけたのである。それで其の中を覗くと、豫ての目的物たる博士の學術的日記も之を發見したのである。

底て之を披くと、中に「ビリーリ水道は水道に非ず、峽灣なり」又「ビリーリ國は、島に非ずしてグリーンランドの西北部の陸續きなり」とあつたから、ミケルセン大尉は全く其の目的を達したものと、此の邊の地形を製圖し終つて直に歸途に就いたのである。

此の歸途には、最初の豫定ではグリーンランドを西方へ向け横斷する筈であつたが、斯かる冒險的旅行には食糧足らず、加ふるに其の他の準備も不充分であつたので、東岸傳ひに南下することに、愈々出掛けて見ると、時恰も六月で雪は一部解けて水まじりとなり、堅いと思はれた氷面も一尺乃至三尺の水溜りに覆れてゐるといふ次第であつたから、橇を驅るには非常に困難で、進行意の如くならず、その内製圖機械や其の他の機械類も紛失して、辛ふじてノブガルド島の

糧食貯藏場まで迎り着いて見ると糧食は浸水の爲に腐敗して役に立たず、大尉等は殆ど餓死せんばかりの苦しみて進行を續けると幸にもランベルト國の稍や北で麝香牛に出會つたので、早速之を殺して食用に供したが、これもさう永くは續かず、數日の後には遂に糧用の犬の中二頭を屠つて之を食ふと之が爲かイメルセン機關長は俄に發病して、容體頗る悪くさればとて雪と氷と水との中て如何ともすることができないので大尉は病人を糧に乗せ深さ一尺五寸の水の中を、蟲の這ふが如き鈍速力で進行したが、唯さへ糧食不足の折柄遂に最後の犬まで屠らざるを得ざる仕儀に立ち到りそれから又た更に筆紙に盡し難い艱苦をなめて九月十九日、やつとの事でデンマルク港(ランベルト國の南八十里)にノン島の北四十里に着いて、此の地で充分の休養をしたのである。

是より先、デンマルク港以北の小屋に休んだ際、大尉は自分の日記帳を置き忘れたので、之が回復を思ひ立ち北行に七日を費したが、悪道路の爲に之を果さず、其の内數日間の暴風に遭つて、命から／＼デンマルク港に歸着すると、時既に十一月二十五日であつたから、此の地で冬籠りをして翌四十四年の早春、大急ぎでジャンノン島に還つて見ると、豈圖らんや、自分等の乗つて來たアラバマ號は愚

か其の乗組員まで一人も見えず、どうした事かと大落膽をしたもの、幸ひ多量の糧食が残してあつたので、之を唯一の頼りとし、傍ら熊狩りをして其の日を暮し、暖かになつてからは再度の日記回復を企て、此の時は首尾能く成功したのである。

それから大尉は、ジャンノン島に引き返へして、七月に入つてからは、もしや海獣船が來はしないかと鬼界ヶ島の俊寛のやうに、沖の方ばかり見てゐたが、そんなものは影だに見えず、其中、同月中旬から八月末まで、沿岸の海が氷結してしまつたので、船の近づく望も全く絶えたのである。よつて二名は小舟で遠く沖の不凍海に出やうとしたが、これも亦た全く失敗に歸して了つたのである。

是に於て、四十四年から五年に掛けての冬も、亦た之を此の地で越さざるを得ざることになつたのである。しかし冬籠りには稍や南のパス岩が地形上一層好都合であるといふので、此のパス岩に移つたのであるが、此の地滞在中、二名は沿岸傳ひに南方アングマサリクの殖民地まで迎らんことを相談して見たが、しかし犬は居ず、二名の氣力も消耗して、糧食携帶の力なく、到底遠路の旅行に堪へずとの理由で遂に之を見合すことになつたのである。

さて第三回目、冬籠りもやつと無事に之を了えたのであるが、餘りに永い仙人生活で、不自由なことも甚だ多かつたのである。例へば最初携帯した衣類は古くもなり、又た破れもして、見る影もない形となり、さればとて別に掛け代もなく、又た食物の如きも年中單調で、健康に宜しからず、それやこれやで二名の命も長く續きさうもない場合に當つて、圖らず天の救ひが來たといふのは、二名の運命の未だ盡きやらぬ證據であつた。その救ひといふのは左の通りである。

明治四十五年の夏、諾威の海獸捕獲船セーブルムステン號は偶然此地方の海に來て六月十七日、バス岩に近いワルロス島に來て見ると、島の上に棒が立つて居るので、近づいて之を見れば、其の上に一、九一二年と大きく刻み込んであつたのである。これは變だと其の附近を見廻すと、遙か向ふに怪しげな小屋があるから、乗組員は早速上陸して、其の小屋に行つて外から其の戸を叩くと、中から二名の人が火蓋を切つた銃を携へて身構へしながら飛んで出た。其姿と云つたらとても人間界の者とは思はれなかつたのである。即ち顔色は憔悴して、餓鬼の如く、身體は垢染みて、黒奴同様、衣服は寸断されて裸身も同然。實に譬へやうのない状態であつたから、諾威の人々も大に驚いて、その姓名を聞いて見ると、歐

洲では死んだとのみ思つて居たミケルセン大尉と、イベルセン機關長とであつたから、一同は二度喫驚をして、何故に銃を以つて出て來たかと尋ねると、戸を叩いたのは人ではなく、全く熊と思つたからとの答をしたのである。

これより、大尉等は一同に援けられて歐洲に歸り、再び故國の人々に會見することができたのであるから、非常に幸運の人と云ふべしである。

大 怪 我 を し て の 大 探 檢

大正元年の夏、丁抹國のヨツホ大尉の一行が決行したグリーンランドの横断は、從來此の國に行はれた横断中のレコードを破つた長距離のもので、途中の出來事も亦近來稀な危険的のものであつた。

グリーンランドの横断は、是が既に四回目である。即ち初回は明治三十三年にナンセン氏が行つたもので、其の距離は道筋が國の南方に偏しただけ、百四十里しかなかつた。

それから二回目と三回目とは、明治四十四年から五年に掛けて行はれて、一は瑞士のケルバン博士によつて、一は丁抹のラスムッセン氏によつてあつた。

中でケルバン博士の取つた道筋はナンセン氏のより北であつたが、ラスムツセ
ン氏のより一層南であつただけに、その二百五十里あつたに反して、約百七十五
里にしか及ばなかつた。

然るに第四回目のコッホ大尉の道筋に至つては、最北に位してグリーンラン
ドの最も幅の広い部分に在つた爲に、全長約三百里もあつた。

大尉は同行者と共に目的地に出掛くる前に、アイスランド島に立寄つて其の
内部の氷原を試験的に横断して見た。是れは言ふまでもなく、氷原旅行の経験
を得る爲て之を遂行してからは、直に目的地の東岸のビスマルク岬に向けて出
発して、此處に着いたのが、元年七月二十一日であつた。それから一切の荷物と
アイスランドから携へた同島産の馬(日本の馬より小)十三頭を陸揚げすると、馬は
直に四方に逸走してしまつた。それで之を捜して十頭だけは之を發見したが、
他の三頭は終に見當らなかつた。依つて之を棄て、沿岸傳ひに豫て冬籠りの地
として選定したルイセン女王國へ向けて急いだが九月一日ストツブ岬まで行
くと海面が既に結氷してゐたから、一同は之を自動艇で渡らんとすると、氷が意
外に薄かつた爲に忽ち破れて艇は沈没し、一同は可惜北門の土左衛門とならん

としたが、神の加護にや、幸に一命だけは助かつた。しかし進むことが出来な
い爲めに、三週間の滞在をなし、氷が十分厚くなつてから之を馬と橇とて乗り切
らうとすると、運の悪い時には仕方のないもので、馬上のウエングネル博士は落
馬して肋骨一枚を折つた。それで一同は大に驚いて、是に應急手當を施して前
進を繼續したが、博士の傷は大事に至らずして済むだけであるから、一同は一先
づ胸撫で下した。

それから一行は寒氣の加はる前に是非ルイセン女王國まで辿り附かんと焦
心つて見たが力及ばずであつた。依つて、コッホ大尉は、止むなく目的の個所か
ら約四里手前の内陸氷上で越冬すると決心して、急設の越冬小屋に這入つた
のが十月十三日であつた。此處で一行は馬十頭中の五頭を屠つて、残りの馬の
滋養食料となし、四月末に至つてルイセン女王國に向つて橇旅行をしたが、此の
際大尉は深さ四十尺の氷河の割目に墜ち込んで右の脛骨を挫折した。之が爲
に大尉は三箇月間小屋以外に出ることが出来なかつた。

小屋住居中は、精しく氣象觀測をしたが、氣温は攝氏零下五十度まで降つた。
四月二十一日一行は五臺の橇と、五頭の馬と一頭の犬とて、内陸氷横断の途に

就いたが最初の四十日間、降雪の日多く、一行の困難一方ならざりしのみならず、馬は皆見渡す限りの白雪の爲め、終に雪盲病(目を刺痛)に罹つて、大に苦しみ出したゆゑ、重病のもの三頭を殺して之れを食料に供した。其の内、天氣も次第に持ち直して、終に晴天續きとなつたはよかつたが、之が爲に一同の皮膚が日光の當つた處だけ腫れて傷みだしたゆゑ、一同は又候多少の困難に陥つた。

天氣が晴れてからは、氣温が零下三十度に昇つた。是れから馬は大に役に立つた。即ち食物として次第に之を屠つて、最後の頭を屠つたのが六月十一日であつた。

總て、氷原は次第に下り坂となつて、七月二日、遙に西岸附近の山を望むことが出来た。此の時、氷上を避ること既に二百七十五里に及んだから、残り僅に二十五里であつた。併し天氣が又々悪くなつて、氷上の足場も非常に悪くなつた。それで進行が意の如くならず、その内食物も盡き、非常の吹雪となつたから、一行は止むことを得ず、三十五時間崖下に食物なして避難したこともあつた。

七月十五日、寒氣と無食物との爲に、一同大に弱つて、最早一步も進むことが出来なくなつた。それでそれまで忠實に一行に附いて來た犬を屠つて之を食は

んとする刹那遙か向ふの峽灣中に一隻の帆船が見えた。それで一同は信號をするやら銃を放つやらして之に注意すると、船の人も漸く氣附いて直に舟を岸に着け、一行を迎へて舟に乘らしめ、最初プレップに到り、それから更にウベルニピクの殖民地に送り届けた。そして此の船にゐたのは、僧ヘムニツ氏であつたから、一行に取つて大仕合せであつたが、もし是れが土民のエスキモー人でもあつたのなら、或は知らぬ振して構はなかつたかも知れぬ。

ウベルニピクで、一同が大歓迎を受けたことは、言はずして明らかであるが、此の横斷は餘程冒險的であつたので、殖民地でも皆一同の大膽なものには、舌を巻いたとの報があつた。

英 國 南 極 探 檢 隊 の 大 悲 劇

大正二年二月十日の朝であつた。英國の南極探檢隊長スコット大佐遭難の電報が突然各國の新紙上に現はれて、世界は爲に大に震駭した。而も英國では最初の間は半信半疑であつたが、精しい電報が着くに随つて愈々その事實であることが判つた。即ち大佐は南極に達しての歸路根據地から百五十哩(約六十

里糧食貯藏場から僅に十一哩四里四分の個所で大吹雪に出會つて、數日間テント中に避難中終りに四人の友と共に餓死の不幸に遭遇したのである。乃ちそれまでの遭難者の行動を紹介すれば大略左の通りである。

□探検隊の到着と上陸

スコット大佐の南極探検隊を乗せた船のテラノバ號が、ロンドンを解纜したのは去る明治四十三年の七月二日、其の船がロス海のマクマルド水道に着いたのか翌四年の一月二十日であつた。其から本陣をエバンス岬に設けた大佐スコット、少尉エバンス、其の他所謂南組と稱へられた人々は、小屋崎(エバンス岬附近)から東南東七哩の所に前進根據地といふものを設けて、此に食物の一貯藏場を置き、更に東南東の方向に二十七哩進んで、此の所を隅角野營地と稱して之に又一の食物貯藏場を設けて、それから尙南緯七十九度半東經百六十九度二十三分の地に一貯藏場を設けて、之を一噸貯藏場と名づけた。

スコット大佐等の南組に對して、北組と云ふものがあつた。此の組の人々は最初の豫定では南組を上陸させた後船でエドワード七世王國に行き此處で上

陸する筈であつたから、早速目的地に回航して見ると、氷の關係上々陸が出来ず、止むなくアダレ岬に上陸した。是れが即ち二月の十八日、其の後此のアダレ岬の北組もエバンス岬の南組も問もなく來るべき冬(北半球の夏の時の仕事に忙殺された。

□南進して

極地に達す



佐大る於に内屋小の地據根

南組の南極へ向けての出發は、豫定に少し後れて十一月の二日であつた。是れは全く尙所々に食物貯藏場を設くる爲めに時日が豫定以上に掛つた爲めであつた。

さて南組中の本隊が、南緯八十四度二十四分に達したのは、十二月四日、ピヤドモア氷河に達したのが同日であつた。此の點まで食物貯藏場は一度毎に各緯度の上に置かれて其運搬には馬と犬とを用ゐたが、是から先きは人が皆自

身に槍を引き揚ぐべく餘儀なくされた。それでも尙翌明治四十五年一月四日には八十七度三十六分に達して是から一部隊の人を後へ引き返へさして極へ向けて進んだ者はスコット大佐の外、ドクトル、ウキルソン(醫者兼動物學者並に畫工)オーツ大佐、パワース少尉、エバンス氏の四名であつたが、皆勢ひ能く前進して一日十二哩(四里八分)の平均速力にて一月十七日に南極に達した。すると此處には前月中に第一着をしたアムンセン氏のテントと記録とがあつた。到着した其の日は曇天であつたが、其の翌十八日には太陽が見えたから、早速四時セオドライトで太陽の高度を觀測して見ると、アムンセン氏がセキスタントでした觀測と半哩の差を生じて、アムンセンの南極と見た點は八十九度五十九分半であつたから、更に半哩進んでそこに英の國旗を樹てた。此の點の氣温は華氏零下約二十度攝氏零下約二十九度で、氷面は頗る軟であつた。寫眞は此處で數枚を撮り、中にアムンセンのテントの寫眞も二枚あつた。

□ 極地を退却す

南極での觀測その他の仕事を終るや大佐はアムンセン氏の記録(南極に着い

た者は之を證據として歐洲に持ち還れと書いてあつた記録を携へて直に退却を始めたが、最初の間は天氣も中位で氣温も華氏零下二十度と三十度の間を昇降したから、進行も毎日平均十八哩(七里二分)の速力にて可なり早く、南緯八十九度と八十四度との間に在る高原上の食物貯藏場は皆無事に之を利用して、ピアド



最 初 に 伴 へ る バ ス ン 氏

モア氷河を下る前に、ドクトル、ウキルソンと、パワース少尉とは、氷原中より突出してゐたバツクレイ島といふ山の頭らしいものに登つて、化石と石炭の標本とを採集し、尙氷河を下る際も、石灰岩中に在る化石を採集して、標本はその重さ合計三十

五ポンドに達したが、それでも皆最後の野營地まで運ばれて、大佐等の死んだ後は又皆悉く英國に轉送された。

□ 一 行 の 遭 難

化石採集の時までは、一同元氣であつたが、それから天候が非常に險惡になつて雪が降つて進行を大に妨害した。その中豫て南極に達する前から健康如何と氣遣はれたエバンス氏が、凹凸粗面の氷の間に轉んで強く頭を打つた。是が一行をして又大に其の進行を遅からしめた一因であつた。その中餘分の食物も漸次残り少なになる次第であつたから、一行は病人のエバンス氏を勵しながら進行すると氏は靴が破れた爲か、二月十七日には一行に後ること敷町であつたから、一行の人は大に心配して、後戻りをして見ると、エバンス氏は倒れてゐて、間もなく絶命した。是れはその日の野營地に達する二時間前の事であつた。エバンス氏病死の爲めに、一行は一時その進行を中止すべく餘儀なくされたが此の中止の結果はその後の進行の大なる妨害となつた。其の理由は季節が次第に進んで寒くなつて、氷の結晶は砂の如き小粒となつて其の上に楯を引いても、従來の如く解けなくなつて爲に楯が滑に進まず、随つてその速力が甚しく鈍くなつたからである。之れが爲に又各食物貯藏場間を、携帯食物と燃料

とに不足を來たさずに進行するに必要な、一日九哩の速力は到底之を出すことが出來なくなつてしまつた。此の時に當つて、オーツ大佐が又弱つて他の人々の足手纏ひになることが大したものであつた。それに風は始終反對風で時々之に吹雪が伴ふたのであるから、他人の世話などは殆ど不能と云つてもよいくらゐであつた。それでオーツ大佐は健氣にも亦勇壯にも他人の迷惑に鑑みて吹雪中に身を隠して雪中の鬼となり了つた。スコット大佐はその手帳に左の如く書いて居る。



二番目に仆れたオーツ大佐

の時猛烈な吹雪であるに拘らず、じきに返つて來ると言つて外出した切り返つて來なかつた。オーツ大佐の隱影後、生存の人々は尙引き續く古今未曾有の惡天氣に弱り切

つた身體と、疲れ切つた足とを引きずりながら、南緯七十九度四十分東經百六十九度二十三分の一噸貯藏場から、十一哩の所まで猛進したが、此の時吹雪は益々激しく、食物と燃料とは愈々缺乏して、最早一步も進むことが出来ず、一同テントを張つて其の中で自若として死を待つことになつた。スコット大佐の日記帳には、三月二十四日の日はちやんと書いてある。又二十五日は悲愴極まる遺書を認められた日であるから其の死は多分二十七日頃と推測される。

□ 救助隊と搜索隊との派遣

さて一方エバンス岬の根據地では豫定の期日を過ぎて、南進隊が歸來しないので、大に心配をし出して、テラノバ號が冬籠りの爲めニウジランドへ向け解纜しない前にと、ドクトル、アトキンソン氏は、カード氏と犬御者デメトリ氏との二名を救助の目的で出したから、二名は三月三日一噸貯藏場まで進んで七日待つて見たが、犬の食物が不足して来且つ犬も既に大に弱つてゐたから、長居は無用と大急ぎで根據地へ引き返したが、悪天氣の爲に、二名も殆ど半死の姿になつてゐた。此時船は既に出帆後であつたが、何にさま安閑としてゐべき時

なかつたから、今度はアトキンソン氏が、水夫ケオヘーンを連れて、出掛けて見ると悪天氣の爲に却々進行が容易でなく、やつとの事で隅角野營地まで漕ぎ付けて此に一週間の食物を置いて命からく、這々の體で根據地に引き戻した。それから、冬の真最中には、救助隊の派遣などは思ひも寄らぬ事であるからその儘に過ぎ、十月になつてから二組の救助隊を出すことに決し、同三十日根據地を出發させたが、其の一隊はアトキンソン、ガラード、デメトリの三名から成つて、犬權に乗り一組はライト、テルソン、格蘭、ラシリ、の四氏が水夫三名を連れ、騾權に乗つて出掛けて



スコット大佐と共に働いた
ドナルド・ルソウ氏

各組三個月分の食物を用意携帶した。

さて二組は相前後して、一噸貯藏場に着いて見ると食物はその儘手が附かず、にゐたので更に前進すると、十一月の十二日ライト氏の組が、南進隊のテント權

その他の諸具と共にスコット、ウキルソン、パウリスの三名の死骸を發見した。それで雪の中に穴を掘つて丁寧にならぬ中に葬つて、十字架を立て、更に其の傍に碑を立てて、之に諸氏の略歴を書き一同禮拜して更に二十哩南進して、オーツ大佐の死骸を捜して見たが、是れは見出すことができなかったから單に碑を立て墓を作つて其の幽魂を弔ひ、それから南進隊の残した荷物一切を携へて二組共根據地に引き揚げて明治四十五年の二月十八日、テラノバ號がニウジラランドからの歸着を待つて、南北兩組並に西組といふものも皆一緒に、ロス海を解纜し、大正二年二月十日ニウジョーランドに到着して直に遭難の大略を打電した。

□スコット大佐の遺書

左に掲ぐるは、大佐が今はの際に、自ら認めてテント内に遺したものである。遭難は組織の不備に因るに非ずして、全く左の如き不幸なる不意の出来事に因る。

(一)一九一一年(明治四十四年)の三月、牽引用の馬を失ひたる爲め吾々の出發豫定より遅れたること、又糧食等も牽引力不足の爲め、豫定より減ぜざるを得

ざりしこと。

(二)旅行中の天氣は、吾々の進行を妨ぐることに大にして殊に南緯八十三度に於ける暴風が、吾々の進行を止めたる日數の甚だ長かりしこと。

(三)氷河の下方の雪極めて弱軟にして、吾々の歩行速力をして大に遲鈍ならしめたること。



スコット大佐と共に働いた者
バウリス少尉

吾々は、以上不意の出来事と喜んで戦へり。而も之に打勝てり。然れども之が爲め吾々の豫備食物は大にその量を減じたり。糧食と被服の供給並に南極まで七百哩間の氷上に設けられた貯藏場に關する件は、最も精細

に設計されて毫も遺憾なかりき。前進隊が何等の異状なく、而も十分の食物を携へて氷河まで歸着し得たりしことは疑なし。思はざりき途中、吾々の事故最も少かるべしと期待したりし

人の病まんとは。水夫エドガル、エバンスは一行中の最強者と思はれたり、而してピヤトモア氷河は、天氣さへ好ければ、之を下ること難からず。然るに不幸吾々の歸途一日として終日好天氣を見たることなし。此の事は病友を伴ふ吾々の心配を非常に増せり。
予は予が日記に記したるが如く、恐ろしく凹凸を極むる氷面に出遇へり。此の處にてエバンスは、轉倒して腦震盪を受けたり。
彼れは天然の病死を遂げたり。而も悲哀に沈める吾々の爲には季節甚しく後れたり。

然れども、以上列擧せるが如き事實は、之を吾々が堤氷上に實驗せる不意打的の出來事に比すれば、殆ど取るに足らざる些事なりき。
予は、吾々の歸路に對する準備が、少しも誤れるものにあらざりしことを飽くまで主張す。而も一年中に於ける此季節に吾々が遭遇したる如き、氣温と氷面とは全世界中何人も之を期待せざる所なるべし。即ち南緯八十五度乃至六度の氷の高原上に於ては、零下二十度乃至三十度なりしが、氣温が一萬尺も低き南緯八十二度の堤氷上に於ては、反つて低く、晝間は零下三十度、夜間は殆ど規則正

しく常に零下四十七度を示して、風は毎日眞正面より吹けり。
以上の出來事が、不意に起りたることは、言はずして明なり。吾々の大打撃實に此の不意の原因未詳の寒氣猛烈の天候に歸すべきものなり。
予は、此の世界に、吾々の經驗したる如き、一個月を経験したる人ある事を信ず



雪艇に乘りたり大佐

る能はず。而も尙吾々は此の難關を切り抜け得たりと確信す、若し幸にして吾々の第二の友オット大佐が病まず、貯藏場内の燃料不足せず(理由不明)又最後の供給を受くべき貯藏地を距る僅に十一哩にして、大吹雪に遭はざりしならば——嗚呼。

吾々の不幸中、此の最後の打撃ほど大なるものはなかりき。
吾々は豫て見慣れたる一噸貯藏場の、十一哩此方まで迎れり。此貯藏場には一回だけ暖かき食事をするに足るべき燃料と二日間を支ふるに足るべき食物ありき。

暴風吹き荒み四日間テント外に出づる能はざるなり。
 吾々は最早力なく筆を取ること困難なり。予一身の爲には此の旅行を後悔
 せず。是に依て英人は艱難に耐へ互に相救ひ且過去に於けるが如く死を恐れ
 ざることを證明するを得たり。
 吾々は危険を冒せり。危険を冒したる事を知れり。而も事態は吾々に反對
 せり。故に吾々には苦情を唱ふる謂れなし。吾々は天命に従ふのみ。吾々は
 最後まで吾々の出来得る限りの力を盡したり。
 勿論吾々は此の度の企業の爲に一命を犠牲にしたることを喜ぶ。是れ吾が
 國の名譽の爲なり。然れども予は吾が同胞に訴ふ。吾々に依頼するの人々の
 爲に充分なる善後策を盡くされん事を。
 若し吾々の命脈盡きざりせば予は如何なる英人の心をも動かし得べき予が
 諸友の具に嘗めたる艱難辛苦と溢るゝばかりの忍耐力と勇氣とを物語りした
 るなるべし。而も其の役目は此の亂筆と吾々の死體とに移れり。
 然れども吾が國の如き大にして富みたる國が吾々に依頼する人々に對して
 充分の手當を給すべきことは予が固く信じて疑はざる所なり。

嗚呼何等の悲痛ぞ。何等の壯烈ぞ。語簡にして意味深く讀む者をして千萬
 無量の感あらしむ。古今東西を問はず英雄の心は皆一である。死に臨んで自
 己を言はず只管雇ひ入れた多數の船員その他の人々を氣遣つてゐる。宜哉
 大にして富たる英國の人々は忽ち大佐と探検隊一同とに同情の雨を降らした。
 寄附金は立處に集つた。人々の手當は充分に行き届いた。又皇室は大佐の未
 亡人に戦死同様の扶助料を下賜され同時に大佐が生存歸國の時に賜はるべか
 りしナイト、コマンド、オブ、ゼ、バストといふ高級の勳章佩帶者同様の待遇を賜は
 ることになつた。

北米合衆國の黒人族

□黒人の口數一千萬

北米合衆國に、阿弗利加種の多數の黒人の居ることは、之が爲に米人は、南北互
 に鎬を削つて戦つたといふくらゐであるから、予は遠ほの昔予が學校時代に於
 て、既に之を學んだのである。しかし年月が経つて予が學問も他方面に向いた

のであるから、其の後は黒人の事は深くも考へず、且米國は白人の開いた國とのみ思つて、先年不圖米國に渡つて見ると、例の黒人が到る處に巢ふて、而も南方諸州には彼等の數が白人のそれを凌駕する所さへあつたのであるから、予は之を觀て今更の如く、彼等の甚だ多いのに驚いたのである。其れも其の筈、彼等の數は今殆ど一千萬に垂んとして、合衆國の總人口の十分の一を占めて居るといふ素晴らしい勢である。

此の一千萬といふ多數の黒人は、非常に白人に嫌惡されて居る。而も此の嫌惡の度は、黒人の百分の一にも足りない、吾が同胞の上に下されたそれよりも遙に烈しいのである。吾が同胞は、其の實勤勉正直、褒むべき性質こそ有すれ、嫌惡すべき謂はれば、少しもないのである。然るにも拘らず、米人は吾が同胞を蹴出さんと試みて、黒人を蹴出さんとし、ないのは抑、何故であらうか。是れは蓋し米人は彼等の數に怖れたのであらう。

□ 米人の不可解事

米人の黒人を嫌ふの理由は、獨り歴史をのみ讀んで、其の實際を究めない者に

は解し難いのである。否、反つて奇怪に思はるのである。何故なれば、米人は正義人道を旗印として、大戦争までして、黒人を奴隸の境遇から救ひ出したからである。之を自由民即ち黒米人と造してやつたからである。斯くの如く、數億の費用を掛け、數萬の同胞の血まで流して、救つた黒人を今更嫌惡蛇蝎視するとは、普通の眼で見ては、不可解といふの外ないのである。蓋し嫌がる日本人を世界の交際場裡に引き出して、更に之に一鞠を加へんとする不理智と、毫も選ぶ所がないのである。是に於て白人が常に日人を不可解人種と稱するのを、幸之を竹筥返しに、白米人こそ不可解なりと言ふ者があつても、米人は甘んじて之を請けなければなるまいと思ふのである。併し物には必ず理由がある。即ち日人の嫌はるゝの理由がある通りに、黒人の嫌はるゝのにも亦理由がある。しかし此の理由は多くは、奥の院に隠れてゐて、史上などには現はらてゐないのである。此の奥の院を發いてこそ、始めて白人の黒人に對する振舞も判然するのてある。乃ち予は此の隠れてゐる理由を左に明にせんと思ふのである。

□ 黒人は蠻猿なり

予は曾て米國に於て、一米人に問ふた事がある。黒人も亦人である。之を忌み嫌ふの理由如何と。米人答へて曰く、彼等は人に非ず、懶惰獸なり、倫理道德を辨へざる動物なり、數十年前までは、阿弗利加の森の中を駆け廻つてゐた蠻猿なりと。而して縷々其然る所以を説き示されたので、予も亦その理に責められて大に米人に同情せざるを得ざるに至つたのである。米人が汽車電車料理店その他に於て、黒人を全く別取扱ひするの無理のない事と思つたのである。近年林伯でも此の地に渡つた黒米人に對して、黒人不可入の奇貼紙をした料理店のあるのも尤も至極と思ふに至つたのである。

是に於て、人は自然に、黒人の斯くも忌はしい人種であることは、彼等の奴隸時代にも遡るのであるか、若しくはそれ以後の出来事であるかと考へるのである。然るに不思議にも是れは彼等が自由米人となつて以來の事、夫迄は、彼等は今より遙に好かつたのである。彼等が現在の如き禽獸人間となつたのは、全く彼等が自由民となつた事に基くのである。して觀れば、彼等を斯くした罪

は彼等自身にあるのではなく、反つて正義人道を重んずると稱した白人に在つたのである。白人は謂はゞ飼犬に其の手を咬まれつゝあるのである。奇怪も是に至つて極れりと云ふべしである。乃ち之を明にするには、奴隸の歴史から略述して掛らねばならぬ。

□ 奴隸の賣買と大輸送

白人が亞弗利加の黒人を奴隸として、賣買し始めたのは、既に白人が此の地に踏み込んだ當時に遡つて可なり古い事である。白人は最初から黒人を牛馬同様に使役せらるべく、生れて來たものと見てゐたのである。随つて彼等を取り扱ふにも亦牛馬同様にしたのである。

奴隸賣買の最も大袈裟に行はれたのは、十七世紀であるが、その由來は斯うである。初め、西班牙人が西印度を取るや、其の勞働者として、使つたものは、土民のカリブ人であつたのである。所が此の人種は、元來懦弱で、勞働者としては、甚だ不適當であつたので、西人の虐使に遭ふて、意外に早く滅盡したのである。因つて西人も之に代る者の必要上、一時白人種やムール人種を使つて見たが、その成

績の思はしからぬ所から豫て奴隸として賣買されてゐた黒人を用ゆるとに
 たのである。すると忽ち之が大輸送が開始されたのである。而も尤も之に力
 を盡くしたのは葡萄牙人で、英人之に次ぎ後には、佛人も亦之れに加はつたの
 ある。
 斯くの如くにして、米國に輸送された黒人は大抵奴隸として生れた者(奴隸の
 子)であつたか、若くは既に奴隸の境遇に沈んでゐた者で、此等は皆回々教徒の手
 を經て買ひ出されたのである。故に自由黒人の誘拐に依り賣り飛ばされた者
 は甚だ少なく、全數の一割にも上らなかつたとの事である。しかし當時阿弗利
 加から積み出された黒人が餘りに多いので、自由黒人と雖も或は拉し去られや
 せんとの掛念から皆戦々兢兢として片時も高枕安眠が出来なかつたとの事
 ある。

□ 奴隸の待遇

さて右の如くにして、米國に送られた數百萬の黒人は、之が買主たる白人によ
 つて如何に取扱はれたかといふに、大體から云へば彼等の故郷に残つた彼等

の同胞より、より善く待遇されたことは、確なる事實である。唯彼等の上にはそ
 の故國に於て夢にだも見なかつた規律労働てふことが課せられたのである。
 是れは彼等を要求する目的が目的だけに、致し方のない次第であつたのである。
 當時彼等の主人中、彼等を頗る苛酷に取扱つた者のあることは、事實である。併
 し此の事は、當時非常に誇張されて、烟地所有者は、皆さうであつたかのやうに言
 ひ囃されたが、是は全くの誤であつたのである。所有者の多數は彼等を良く
 取扱つたのである。彼等の生活が米國に入つて以來、故國の同胞より遙に向上
 したとは動かすべからざる事實である。固より是れありしが爲め、奴隸使用者
 を賞讃する譯には行かぬのである。何故なれば、奴隸制度その物が既に人道を
 外れたものであつたからである。又所有者側でも、彼等を憐むの結果、彼等を好
 遇したのではないのである。蓋し奴隸が所有者の私物品と極まつて、是から擧
 がる利益が、皆所有者の懐に入る以上、所有者がその品物を好遇して出来るだ
 け、其の破損を防ぐことは、理の當に然らしむる所である。
 さて、黒人を規律労働に従事せしめた結果、之を使用した西印度や、北米南方の
 諸地方は數年ならずして、實の山と變じたのである。由來風土は好し、天與の富

は地中に充ち満ちて居た所だけに、労働の手の之を開発した所ては何地を問はず、忽ちにして黄金の花が咲いたのである。是に於て畑地の所有者は、一攫千金萬金、十萬金、其の懐は見る間に福々と膨れ上つたのである。故に奴隷の待遇も之に連れて自然改良されたのである。當時奴隷の生活は確に列國の農民のそれより優つてゐたのである。但奴隷の頭上には、常に規律労働てふことが纏綿してゐたのである。序ながら述べて置くが、當時西印度の海に多數の海賊船の横行したのも、全く此の地に黄金の花が盛に咲いて出る船毎に財寶を満載してゐたからである。

□ 奴隷解放の結果

人も知る通り、十八世紀の後半は、米國獨立して佛國又革命を起した時代である。當時年來壓制を受けた文明民族中には、荐りに自由同權四海兄弟等の聲が喧しかつたのである。此等は勿論彼等に取つては、福祉を授くべき神であつたのであらうが、之を無智文盲の黑人奴隷の上に迄擔ぎ出すに至つたのは、聊か驚かざるを得ざる次第である。素より奴隷その物は、一向平氣で自由同權四海兄

弟などとは、何の事やら少しも御承知ないに拘らず只管他で限々強いたのである。其の結果は人の能く知る通りである。乃ち米國で南北互に干戈を動かして血の雨を降らし、死人の山を築いて終に奴隷は、盡く釋放さるゝに至つたのである。此の奴隷解放の結果として、從來の奴隷は米國の自由民、自由労働者となつたのである。其の又直接の結果は、さしにも榮へた南方の産業者が古今未曾有の大打撃を受けた事で、間接の結果は、自由を得た黑人の大墮落であつたのである。而も此の墮落こそ今日白人の黒米人を忌む因を作つたのである。實に過去百年間に於ける經驗は、黒人は文明人と相伍して眞面目に世を渡ることの出来ないことを教へたのである。又黒人は人に非ずとの語も過言にあらざることを示したのである。實に浩歎の至りである。

□ 西印度に於ける黑人の大墮落

黒人の眞人間にあらざることは、直接彼等の釋放された諸國に就て研究すれば直に判るのである。黒人の經營するハイチやサンドミンゴの共和國は、言はずもがな、合衆國の南方、英佛蘭西、丁等の諸殖民地に於ても、自由を得た黒人は、皆

次第々々に變化して曾て彼等の奴隸時代に彼等の間に萌芽しかけた文明も今は地を拂つて消へ失せてゐる。

黑人共和国サンドミンゴが自由を得たのは、既に百二十年の昔である。ハイチの共和国も本は佛領で此の時代にその繁榮したとは大したものである。然るに佛國には大革命が起つて之が爲に同國は一時列國の壓迫を受けたのであるから之を機會として無頼の白人は黑人を煽動して遂に之を獨立せしめたのである。然るに此等の所謂共和国の現狀は如何である。一國の統治に必要なる法律役人官衙等は表面では立派に出来てゐるが法律は空文同様である。役人は黑人の化物である。官衙は化物屋敷である。随つて役人の専制苛酷なると少しも彼等の故郷に住む蠻民の同胞に譲らないのである。昔し黑人奴隸が如何に白人に窘められたとがあつたとしても之を以上二共和国で現に黒色人種が黒色化物役人に窘められつゝある有様に比ぶれば寧ろ寛待と言つた方が至當であつたのである。斯かる次第であるから此等の國では殺人強盜詐偽その他有らゆる罪惡が到る處に行はれて國は殆ど亂麻の如く曾て黄金の花を咲かした山野の田園も今は大方荒廢して實際原始時代の森林地に復した個所も

少なからぬのである。是に至つて昔の規律勞働の時代が偲ばれるのである。當時は何事も秩序整然警察衛生等も行き届いて罪人酒亂其他風俗壞亂の行爲も至つて少なかつたのである。然るに今は如何である。罪惡が多いのみならず飲酒熾盛淫風猛烈其勢當るべからず之が爲に生み出された惡病者白痴乞食物貫強請等巷に充滿ちて千鬼畫行とは此等の國にこそ用ゐらるべき形容詞かとまで思はるゝのである。

抑上述の如き大墮落は彼の二國にのみ限らないのである。黑人の放釋された列國の殖民地であるジャマイカトリニダットトバゴサンルシャグアダルトプマルチニツクサントマスサンジャンサンタクルーズグラサオ等の諸島皆然りである。固より墮落の度には多少の差がある。しかし是れは放釋の年の早い遅いに在るので即ち墮落の度は放釋の早かつた所に大て遅かつた所に比較的少であるのみである。

□米國に於ける奴隸放免とその結果

是れから更に目を轉じて合衆國南方諸州の黑人を觀るに是れ又他と少しも

異なる所がないのである。今その放逐後の成行の委細を述べるとも復無益でないと思ふのである。是に至つて有り勝ちの事とは云ひながら歴史は吾々に實を告げざることを唱へねばならぬ。當時合衆國の南北双方は大にその經濟状態を異にしてゐたのである。南は棉花の大栽培地で、人民有福貿易盛大合衆國の極樂淨土であつたに反して、北は氣候と風土の關係上、比較的貧乏で、その頼るべきものは主として工業であつたのである。故に兩者の政策は全然相反するに至つたのである。便ち北は高率の保護税で、南は自由貿易主義であつたのである。是に於て富裕の南方に取つては、經濟上北方から分離するのを、その利益としたのである。然るに北方では分離は素より好ましくならず、又自由貿易も自家の不利を來たすを見て、遂に南方を壓迫するの覺悟を極めたのである。しかし、經濟上の衝突ぐらゐを理由として腕力を振り廻すのも頗る異なものであるから、何がな良口實をと蚤取眼球で搜す矢先きに、豫て一部人士に唱道された、奴隸制度の人道背反説があつたのであるから、是れ幸ひ、名義は好し、自家の懐合には少しも關係せず、又列國の同情を得るにも最も妙と直ちに之を眞甲に磨して、正々堂々と南方に攻寄せたのである。是に於て、南方も死生の界、應戰極め

て力めたのではあるが、時利あらずして、終に降參の止むなきに至つたのである。此の結果は言ふまでもなく、奴隸全廢であつたのである。而も此の全廢は、其の後に於ける南方の殖産上の大打撃と今日に於ける白米人全體の迷惑とを來たしたのである。もとより、此の打撃と迷惑とは、即座に現はれた譯でなく、次第次第に現はれて來たのである。即ち一時無上の榮華を極めた棉花栽培者も、其の身代は漸次に衰へて、今日に於ける彼等の子孫は、殆ど皆貧困者である。又黒人側を觀るに自由を得た當時に於ては、自由労働者として不規律ながらも、尙労働に従事してゐたのであるが、彼等の子の代に至つては、蠻人の本性を露して、少しも労働をせず、目の先に高賃銀を突き附けられても、尙労働を拒絶したのである。只彼等の働いたのは、饑餓に迫つて、絶對絶命の場合のみであつたのである。又今でもさうであるのである。

奴隸所有者も、奴隸を放免すると同時に彼等を好遇することを止めたのである。以前は彼等の幸福を計るのは所有者自身の利益であつたのである。故に小供の爲には學校を設け、大人に對しては飲酒を攝せしめ、その他健康に有害な事は一切之を嚴禁したのである。然るに此等の事が無制限となると同時に、黒

人は本来の蠻風に復歸したのである。それにも拘はらず南方諸州の畑地所有者が全然瓦解零落しなかつたのは、その後白人移民が労働者となつて、幾分が彼等を回復せしめたからである。しかしそれでも昔は見渡す限りの黄金畑であつた所で、今は荒蕪地や森林地と變じた所も少なくないのである。又當時北米の最富市と稱へられた、ニウオーリーンスの如きも、今は遙に下つて之に優る市は、合衆國には既に十以上を算するのである。

□ 黒人の優遇と腐敗

今から約五十年前、黒人奴隸が自由の黒米人となつた時には、合衆國政府は彼等を白米人と對等無差別としたのである。又各州政府は彼等に無類の厚意を表して、各黒人家族に土地を附與して之を無税とし、且道具、牛馬、資本金まで之を附與したのである。故に黒人は丸て牡丹餅で頬を叩かれたも同然で、彼等が之を利用する事さへ知つてゐたならば、彼等は一躍して白人同様社會に出て活動する事が出来たのである。然るに、何事ぞ、彼等は期年ならずして、奴隸の外何にも役に立つ者にあらざることを、彼等自ら證明したのである。便ち附與された

土地は一個所として耕された所はなかつたのである。又彼等の學童には、無代で書籍や器具が與へられたに拘はらず、入學したものは甚だ少かつたのである。因つて今日目に一丁子のない黒人の數は、彼等の奴隸時代に三倍するに至つたのである。又警察側の統計に據ても、黒人罪人の數は白人罪人のそれに五倍して、黒人の亂醉して警罪に觸るゝものは白人のそれに比すれば、尙一層多いのである。斯かる状態であるから、黒人數の白人數に超過する諸地方では、社會の腐敗はその極に達して人をして嘔吐を催さしめん計りである。而して此の腐敗の會て、最も明かに表面に現はれたのは、選舉の際であつたのである。即ち黒人は公吏に、白人の殺人犯、泥棒、詐偽者等を選んで、之を誇りとしたのである。素より彼等をして斯かる行爲に出でしめたのには、理由もあつたのである。米國は由來金力萬能の國である。故に白人の被選者は、黒人の有権者を金力アルコール、その他の方法で之を買収したのである。是に於て、各州では、選舉權所有者に、制限を置かざるを得ざるに至つたのである。去り乍ら、黒人の故を以て、その既有權を取り上ぐる譯にも行かぬのであるから、其の裏面に廻つて有権者は、讀み書きの出来る者に限るとしたのである。

是れて黒人の大部分は選舉權を奪はれたも、同然となつたのである。如何となれば彼等中讀み書きの出来るものは甚だ少ないからである。

□ 黒人の受けた社交的排斥

黒人が、米人から社交上別扱ひをされてゐるとは、實に甚しいのである。黒人は、汽車、電車、停車場の待合所等では、白人と席を同ふする事が出来ないのである。彼等は必ず彼等の爲に設けられた別室に入らなければならぬ。又彼等は劇場、コンセルト、其の他娯樂の場所眞面目な飲食店、ホテル等へは、入る事を禁じられてゐる。底て之に就いて、吾々の特に注意すべきことが二ある。一は、以上の如き待遇を受けても黒人は少しも之を恥辱と思はざる事である。無頓着無感覺である事である。二は、白人は、以上の取扱ひを、冷遇虐待の意味とするのではなく、全く自衛上、止むを得ざるに出でたる事である。

此の止むを得ざる一證ともいふべきは、米國で黒人に對して行はるる私刑である。國民の制裁である。此中には聞くだに、恐ろしい炮烙の刑もある。米人が如何に上氣でも斯かる蠻刑を、此文明の世の中に持ち出す氣遣はないのである。

るが、是れてなければ黒人に對して、片時も安心が出来ないといふに至つては、又驚かざるを得ないのである。南カロライナ州に於ける統計表を觀るに、此の蠻刑に罹つた黒人の九割五分までは、破倫罪を犯した者である。即ち白婦人を捕へて之を犯した者で、中には之を死に至らしめたものまである。黒人の白婦人を狙ふことは、恰も食肉獸が肉を狙ふと一般、其の情慾は到底抑止すべからずといふのである。それ故に、南カロライナ、ジョルジャ、フロリダ等の諸州では、白婦人の單獨外出の不可能の所があり、又甚しきに至つては、吾が家の室内に居ても、尙安全ならざる所もある。

以上の如き犯罪者は、文明國では之を懲役に處するのであるが、黒人は普通の勞役では、到底之を懲らすとが出来ないのみならず、絞殺、斬首等の死刑でも、尙些の功能がないのである。彼等を懲らすには、是非拷問的死刑を用ゐねばならぬ。非常に苦しむつゝ、死ぬ様にしなければならぬ。是れが即ち火焙りの刑を生み出した原因である。彼等の犯罪者を、此の刑に處するときは、大勢の白人が之を大勢の黒人の集つてゐる刑場へ引き出して、むごたらしく焼き殺すのである。すると黒人も、一時は之に恐怖して、その蠻風を差し控へるのである。しかし是

これは二三年間の事、記憶が薄らぐに随つて復遣り出すのである。

□黒人の不同化

目下米國に入る移民は、その族種甚だ多いのであるが、中て英佛獨愛蘭瑞諾等の者は、遅くも三代の後には、全然米化し、伊、匈、波、露、ワラキヤ等の者の如き文明の度の一層低い者でも、五六代の後には必ず米化するものであるが、黒人に至つては既に數百年間、米國に在住するに拘らず、毫も米化しないのである。彼等の言語の如きも、彼等の故國語は、遠の昔彼等に、忘れられて居る。而も尙彼等は英語を、正しく學ぶことが出來ないのである。或る人の評に、彼等は、鸚鵡にも及ばぬとあつたが、實に然りである。

右の如き次第であるから、彼等は米人に非常に厄介視されて居る。彼等は米人の健康體に於ける一種の腫物である。之が治療には、未だ如何なる政治的名醫でも手を下し兼ねてゐるのである。彼等は如何に嫌はれても、如何に權利を奪はれても、踏まれても、蹴られても、一向平氣である。無神經である。卑屈である。彼等の唯一の樂は無精である。無勞働である。彼等は彼等が得たる自由を遊んで暮らす事と心得て居る。

もとより、彼等の中にも罕には、氣骨のある者もある。しかし是れは、數百萬中の一人である。是によつて、彼等が民族としてその品位の甚劣等であることが判る。

ブーカ、ワシントンと稱する黒人は、黒人中の華盛頓である。見識高く、氣骨に富み、その同胞の意氣地ないのに憤慨して、之が位置を高め、事に全力を注いで居る。此人は白人にも畏敬されて、ルーズベルト氏の如きは一度此の人を氏の白聖館に招いて、握手共食したことである。此の人は一般の黒人に非常に嫌はれてゐる。何故なれば、此の人は彼等に、彼等の蛇蝎視する勞働の必要を説くからである。此の人の努力は實に賞讃すべきである。しかし倒家に對する一柱で、此の人が之を如何ともすることの出來ないのは、洵に同情に耐へない次第である。

□黒人に關する結論と米人への忠告

阿弗利加の西岸に、リベリヤと云ふ黒人の共和國がある。是れは、米人がその

放免した黑人をして、建設せしめた國である。然るに彼等はハイチやドミニゴの同胞と一般亦非常に墮落して、大統領あり、議會ある等の事は紙上のみの事で、その實國は百鬼の巢窟に過ぎないのである。

近來、獨逸人も、阿弗利加の諸所に領地を獲得して、土民の黒人と接觸しつつある。而も到る處彼等の役に立たないことを經驗しつつある。人面獸なるを知りつつある。して觀ると黒人は確に吾々より數等下劣の民族で牛馬の如く、強制労働を課せられて、始めて文明民の利益となる者である。さもない場合には、猛獸同様反つて文明民を傷ける者と見なければならぬ。斯る民族を利に敏い米人が正義の名の下に自由民としたのは、大失策であつたのである。今日に於て彼等に手を咬まるゝも、又致し方のない次第である。米人は今更の如く、大に之を悔いて居る。しかし數は既に一千萬である。斯かる大數に向かつては如何なる名案もその効驗が薄いのである。米人も是れには呆然たる有様である。斯かる上は外に良策もないのである。唯數を以て彼等を壓する迄である。是に於て予は言はざるを得ないのである。米人たる者大に日人を歡迎せよと。日人は米人も熟知する如く、勤勉正直安直で移民としては、是程經濟的のもの

のではないのである。土地を開くに最適當の民族である。南歐の種柏人種を容れ乍ら、又自ら黒米人に窘められ乍ら、日人といふ此良民を排斥するのは、實に以て矛盾も甚しいのである。米住日人の繁榮は、本國日人の喜とこそなるなれ、野心を起さすべき原因とはならぬのである。日人は自國を誇稱して君子國とまで言つて居る。其の當否は暫く措いて、假りに、斯かることを言ふ民族が謂れなく他人の國を取ることが出来るであらうか、少しは考へても貰ひたいのである。予は思ふのである。米人がその胸襟を寛開してどしどし吾が良移民を容れさへすれば、米國本來の目的たる國の開拓も行はれ、黒人の跋扈も亦之を制する事が出来る。又現状のやうでは、米人は反つて不和の種を蒔いて、葛藤の遠因を自製しつつありはしまいかと。嗚呼。

不平滿々たる印度三億の民衆

抑英國が印度を其の領地として以來、英人が印度から獲得する利益の多大なると同時に、印度人の英國の支配下に受くる利益の亦多大なるとは勿論であるから、夫ては印度人も其の豫期せざる幸福に浴して、定めて大恭悦、大満足であ

らうとは、何人も直に想到する所である。然るに事實は之に反して、彼等は不平大不満を抱いて而も今では其の心氣昂進して、次第に危険の域に入らんとしつゝあると言ふに至るは、何人も聊か意外の感に打たれざるを得ないと思ふのである。是が即ち英人の所謂印度問題で、其の原因は種々の元素から成り立つて、中には頗る複雑を極めて容易に解決すべからざるものもある。乃ち左に其の重なる既に世に知れ渡つたものを解剖して、以て印度問題なるものが如何なる性質のものであるかを紹介し、併せて將來吾が國が之に對して取るべき態度と内治外交の政策との參考までに供し度いと思ふのである。

□ 異人種の支配を受くる事

印度人が英人に非常の厚遇を受け乍ら、尙且大不満を抱く一大根本的原因是は雙方全く人種を異にする點に在る。蓋し學理上から謂へば、英人と上層印度人

とは共にアリヤ人種に属するのであるが、英人は印度人を決して同人種視しないのである。英人は印度人を有色人種と稱へて、支那人、馬來人等と一般之を亞細亞人種と看做して居る。此根本的見解の相違ある爲め、種々雑多の他の難問題も起るのである。英人が印度を濠洲や加奈陀の如くに取り扱はないのも全く此の見解の相違に在る。随つて英人が印度を支配するのは本國を利する爲である事は言ふまでもないことである。素より英人が亦印度人の利益をも計りつゝある事は、既に人の知る通りである。併し乍ら此の印度人の利益を計る事は本國の利益を毀損せざる限りに止めてある。是は英人側から觀れば至當の事である。若し是れ以上印度人の利益を計る英人があつたならば、即ち其の英人は本國に取つては不忠の臣となるのである。

英人の此の見解、此の政策に想到したならば、印度人に眞に英人を敬愛思慕するの念の起らないのも、亦無理ならぬ事である。英人が印度人の爲に如何に盡くす所があつても、印度人の方には毫も難有いといふ心は起らないのである。又英人が現在印度から獲つゝある利益は、印度人自身の手では到底獲るとの出來ないものであるとしても、印度人の側から觀れば、是れは一種の奪取である。

人の積鼻輝て相撲取る事的の事としか見られないのである。斯かる有様であるから英人が印度人を教化して物の道理を知らすれば、知らする程それ丈雙方間の感情は悪くなるのである。間隙が廣くなるのである。夫て近來英國には頻りに印度政策を非難攻撃する者まである。かゝる連中は印度は印度人の爲に支配せよと言ふのである。さすれば英人の難有味も解つて自然兩國人間の融和も遂げらるゝと言ふのである。勿論是れは政策の一變つを意味するのである。因てその成否は暫く措いてよし一變したとしても、是れが果して印度人を満足させ得るや否やは疑問である。又印度人が英人の眞心から出る深切を解し得るや否やも疑問である。

□ 社会的接觸を拒絶さるる事

英印兩人種間の融和せざる一因とも看るべきものは、英人が印度人との社会的接觸を絶対に拒むとてである。英人一滴でも其の血液中に印度人のその混じた者は、英人の中以上の社會から排斥さるゝのである。随つて英人との結婚は社交上不能となつて居る。英人は一口に之を言へば印度人を毛嫌するの

である。混血は一大汚辱と看做されて居る。是れは恰も昔の日本人が穢多との混血を避けたと同様である。又昔の印度のアリヤ種が、土民の陀羅毘陀人を輕蔑劣等視したと同じである。是に於て印度人が英人の此の態度に忿懣するの尤も至極の事である。

□ 下層英人の横柄傲慢なる事

上述した兩國人間の惡感情を一層助長したものは、近來英國から流れ込む英人労働者である。此等は今では頗る多數に及んで居るが、其の印度人に對して取る態度は、上層英人の取るそれと同一である。而もその無學無識であるだけ其れだけ其の仕打ちが酷烈である。獸的である。尤も之が爲に上層英人の蒙むる迷惑損害も少からぬ事は事實である。尙國外に出て居る印度の労働者は甚だ多いのであるが、此等も侮蔑的苛酷の取扱を受けて居る。是れも慥に惡感情の一因となつて居る。

□ 雙方間の漸次疎遠となる事

近時に於ける萬國交通の發達は、自然英印間の交通をも發達させたのである。便ち兩國間の航海日數が減ずると同時に航海回數は殖えたのである。夫て雙方間の往來も以前に比して大に容易くなつたのである。是は鳥渡考へると兩國民を一層接近せしめて良効果を結ばすものと思はるゝのであるが事實は之に反して反つて兩國民間の交際を疎遠にしたのである。其理由は斯うである。便ち昔は英人が印度に出掛けるには殆ど永住の覺悟で出掛けたのである。最後の最後まで本國に還歸しない決心であつたのである。随つて印度着後は土着したも同様其の土地の印度人と出來得る限り仲好くして居たのである。そして印度人も亦多くは心を許して同胞に准じて付き合つて居たのである。然るに交通が迅速容易になると同時に、英人の一時歸英休暇歸省等が頻繁になつて來たのである。之が爲に英人は以前の如く印度人と親密でない様になつたのである。それ又雙方間に間隙が出來て是れが次第に擴大して來たのである。去ればとて交通の發達は跡に引き戻し得ないものである。よつてその結

果に對しても策の施しやうはないのである。

□ 米穀貯蓄の困難なる事

此の英人が印度人の幸福を増さんとしてした仕事の結果で反つて印度人の不平を買つたものがある。夫は外でもない。種々の施設の結果印度の人口を激増させた事である。由來印度の膏腴地は久しい前から人口過剰で平作の年でも動もすれば食物の不足を告ぐる位であるから、凶年に見ても憫な慘狀を極むるの言ふ迄もないとである。して又此の慘狀を助長するものがある。それは即ち印度の農民が其の保守心と數千年來の習慣とで祖先の墳墓地を離るゝとの出來ないことである。他に移住してより好き職業に着くとの困難なことである。是れが爲に人口は益々殖えるばかりで、饑饉は層一層に頻繁になるのである。蓋し饑饉は今では常事と言つてもよい位である。勿論其の齎らす結果は人力でも之を避けることが出來るのであるが、饑饉其の物は原因を除かざる限りは、之を避けることは出來ないのである。

數十年來英人が此の饑饉に對して、非常な救濟策を實行しつゝあるのは事實

である。英人は印度の豫算から年々千五百萬ルピーづゝを割いて之を救済費に當てゝ居るのである。此の千五百萬は凶年さへなければ年々蓄積するばかりのものである。決して他に流用されないものである。又一朝凶作の報が来れば金は直に凶作の地方へ向けて支出されるのである。尤も支出と言つても單に金銭のまゝで蒔き散らさるゝのではなく通例免稅食物の供給土木工事の三形となつて現はるゝのである。現在の印度には道路網も鐵道網も可なり密に布設されて居るからあり餘る食物の運搬は頗る迅速に行はるゝのである。そして昔のやうに多數擧つて餓死する事は今は殆ど絶無である。

又極めて有益なのは慈善的土木工事である。此工事は出來得る限り凶作地方に行はれて而も未來の凶作と之の結果とを輕減する方法で行はるゝのである。例へば灌溉用溝渠の開鑿旱魃用の溜池の設置鐵道々路の新設等の事をするのである。

さて右の如き救済法は、獨り英國直轄地に行はるゝばかりでなく、間接管轄地にも土民諸侯をして之を行はしむるのである。故に此點に於ては英人の注意は頗る周到と言はなければならぬ。

救済費から支出する仕事の外英人が灌溉用溝渠の大開鑿で荒地を膏腴の地に變じたのが既に三百四十萬町歩に及んで居る。三百四十萬町歩と言へば吾が内地の耕地したのが二百萬町歩に及んで居る。三百四十萬町歩と言へば約臺灣大(田畑合せて五百二十五萬町歩)の約六割五分である。大きき言へば約臺灣大の面積である。英人が之を其の誇りとするのも尤も至極の事である。夫なら印度人は大に之を徳として居るかと言ふに夫が又存外さうでないのである。固より是には理由がある。其理由は外でもない。人口の大速度で増殖する事である。便ち英國人の苦心で出來上つた新田地は廣大には相違ないが人口の激増に對しては燒石に水同然である。因て一時は間に合つても數年ならずして食物は又不足を告ぐるのである。之が爲に新田地も印度人が其の有難味を感ずるまでに長く其の効力を持続することが出來ないのである。

又此に印度人に取つて難有迷惑とでもいふべき事がある。便ち印度内の交通の發達が饑饉時に際して一方には一地方から他地方に食物を運搬して餓民を救ひ得ると同時に、又他方には彼等の苦痛を増す一結果を生じたのである。それは即ち斯うである。昔しまだ農民が世間と餘り交通せず居た頃には彼

等は有り餘まる年にはその米穀を貯藏したのである。所が今日では交通が自在な爲に、有り餘る分は皆世界の市場に出るのである。印度の各地には大きな問屋があつて、それが全國の米穀を買ひ集むるのである。勿論農民は之に依つて金銭を得るに違ひないが、併しながら此の金銭は必ずしも貯蓄されないのである。一部は大抵贅澤物に消費されるのである。よし多少貯蓄されても、いざ饑饉となると昔のやうに直に役に立つ貯藏米はないのである。然らば金で買んかといふに、饑饉時に於ける物價の騰貴は之が價値を大に縮小するのである。されば彼等が無一物の極度に達する時日も昔しに比べてそれ丈早いのである。随つて苦痛も亦それ丈大きいのである。蓋し之を救済する法は非常に六かしいのである、といふのはまさか貯蓄は必ず米穀を以てすべしとの法律も出來まいかと思はるゝからである。

□ 裁判所の不便なる事

英人が制定した今の公平な裁判法は、良民の自家制裁を不能となして、亦不平の一因となつて居る。其譯は斯うである。印度にも他國同様強請、窃盜、強盜、そ

の他無頼の徒が甚だ多いのである。乃ち此等が良民の煩をなす時は以前は即座に之を敲き殺すとが出来たのである。然るに今では之を裁判所に突き出して裁判官の判決を待ねばならぬ。故に中には證據不充分的廉を以て旨く制裁を免るゝ者もある。其の結果惡漢も横着になつて反つて良民を煩すとが多いのである。随つて良民の苦情も亦増したのである。

□ 國の次第に農化せらるゝ事

此に英人の印度統治政策中其の最大暗黒面として知らるゝ一事がある。それは即ち印度を漸次農化したことである。

由來印度が農本位であつたことは今更言ふまでもない事である。印度民の大多數は農民である。併し乍らそれでも昔はその外に他の生業に就いて居た者も少なくなかつたのである。此生業中には随分世に名高い者もあつたのである。例へば、縫箔織物、玉細工、刀鍛冶、彫刻等の諸業の如してある。又此等の諸業に従事して居た者は、農民より遙に高程度の生活をして居たのである。然るに英國の工業が盛になるに連れて、課税と英國から夥しく輸入された安い工

業品とに依りて、印度の工業は全く撲滅の悲運に陥つたのである。それで失職した印度人は彼等が最劣等視する農業に移らざるを得ざるやうに餘儀なくされたのである。

以上の事は一見自然の結果で、謂はゞ世の變遷に伴ふ現象のやうではあるが其の實英人が深く研究の後決行した仕事の様である。といふのは英國は近來終に一大工業國と化したのであるから、其の最大殖民地たる印度をして、自國の競争者たらしむる事は、英國の到底忍び能はざる所である。英國は勢ひ印度を其工業品の需要地として存置せざるを得ないのである。是は英國側から觀れば無論至當の事である。然るに印度人は如何といふに彼等は保護税を課せよ、印度の工業を保護せよと絶叫して、之を政府に迫つて居るのである。是も印度人の側から觀れば又無理ならぬ事である。併し乍ら如何に印度人が絶叫しても、如何に政府に迫つても、差し當り其の實行の覺束ないといふのは、斯かる希望は、英國の製造業者と之に従事する職工等との利益を損せざる範圍内に於てのみ充たさるべき性質の者であるからである。殊に英國の議會でも労働者の勞力が隆々として増しつゝある今日、印度人の希望は殆ど充たさるゝ機會のな

いものと見て大なる誤はないのである。

底て右の事態を見抜いた印度人中の熱心家は、然らば印度の工業は英人の手を借らずに、否英人との競争までも覺悟して之を勃興すべしと言ふに至つたのである。是が即ち有名なスワデシ運動と稱せらるゝもので、スワデシとは自國製造品といふ意味の言葉である。勿論此運動の手段中には外國品に對して愛國的非買同盟といふ事も亦含まれて居るのである。去り乍ら目下の處此の運動の効果を結ぶことの甚だ覺束ないと思はるゝのは、印度人中大工業を起すべき資本と知識との缺乏と、政府が頑として其政策を一變せざる事に在る。尤も近來運動が餘り入釜しいので、政府も少しは土人工業を奨励する氣味がある。例へば美術的手工業の如してである。併し是れはほんの申譯的奨励で政策の大方針には何等の變化をも見ないのである。

□地租の過重なる事

印度國の諸税中で、苛斂誅求の聲の最も高いのは地租である。此地租徵集法は餘程昔からのを英人がその儘踏襲した者には違ひないが、税率に至ては昔に

比ぶれば餘程軽減されて居るのである。しかし夫でも猶苛辣なりとの苦情は絶えないのである。印度人に言はすれば其現に受けつゝある種々様々の苦惱は多く此地租の過重に基くと云のである。去り乍ら地租は印度の税源中最重要なものである。之を軽減すれば印度の財政は大動搖を受けねばならぬ。随つて其の實行は先づ絶望と見るの外ないのである。以上數へ來つた八原因は、謂はゞ有形的のものであるが、此の外に尙無形的的精神的の者がある。印度人の知識が進むに連れて、生じて來た者がある。是が近來頗る險惡の狀を呈して居ることは、識者の皆認むる所である。是も英人が印度人に盡くさんとした深切心の生み出した意外の結果に外ならぬのである。乃ち之を左の如き表題で説明したいと思ふ。

□英國式教育法の試験の惡結果

曾てマコーレイ氏が得意の雄筆を奮つて書いた諸論文、印度問題に關しても亦随分入釜しい議論の現はれたことは、英文學に志す者の皆能く知る所である。其頃からして英國政府も印度人を英國式に教化して、兩國人間の融和を

計らんと決心したのであるから、是れが結果として先づ之を試験的に行ふ事になつたのである。勿論試験的とは言へ印度は大國であるから其規模は頗る大きかつたのである。是に就てワレンチン、チロル氏は印度の不穩といふ書中、自慢らしく言つて居る。その文句は左の通りである。

此の事業は、英國が一擲の英人を以て、印度三億の民衆を支配する事より、より遙に難い事業である。世には遠方の異人種の住む國を征して之を取り之に自製の法律を布いて之を無事平穩に抑さへて行く例は少からぬのである。固より是れは英人が印度に於てなした例より遙に小規模のものには相違ないが、其の性質に於ては皆同じである。併しながら征服した民族を自國民と同一型に教化して、之を其の精神上の友とせんことを試みた者は英國を措いて他には絶無である。

實に英國は印度全國に學校を一部は自身に建設し、一部は奨勵して之を印度人に建てさせたのである。それで印度人も一時は大に喜んで自ら進んで教育を受けたによつて其の最初の効果は洵に芳ばしかつたのである。便ち上層印度人の子弟は立派な教化の結果、泰西の文物の優秀な事を認めて、快く之を容

れて以て英人の豫期した其の精神上の友ともなり、又傍ら印度の土民官吏の好材料ともなつたのである。夫て事が是れだけ進んで行けば何事もなかつたのである。所が世の中は妙なもので、順次色々な事が起つて来たのである。即ち従来學校入學者は殆ど上層社會の子弟にのみ限られて居たのが、卒業者は官公吏に取り立てられるといふので、下層社會の子弟までも續々學校に押し掛くることになつたのである。夫て學校は忽ち不足したのである。勿論政府は急遽之を増設はしたものの、教員の大不足には策の施しやうもなかつたのである。夫て已むを得ず、準教員的の者を採用したのである。併し學校の建物は一夜造りて間に合つても一夜造りの教員の間合はぬことは知れ切つた事である。乃ち之が結果として教育の大々的下落を來したのである。

斯くの如く教育が大下落をしたのみならず、元來下層社會の子弟の學校入學の目的は、殆ど全く官公吏の候補者となるに在つたのであるから、其の最も力を入れたのは試験の及第に在つたのである。因て此等が原因となつて、卒業生は半可通生嚙りの者ばかりで社會に用ゆ可らざる者であつたのである。併しそれでも若し彼等に一々位置を當てがふことが出来たならまだしもであつた

が限りある数の位置に殆ど限りのない数の候補者を當て籍ひることは不能事であるから、是れが又非常に憂ふべき惡結果を生じて、その状態は今日既に治療すべからざる度に達して居るのである。即ち此惡結果といふのは、從來天地は印度ばかりと思つて居た幼稚思想の者共が半教育によつて世界の形勢を半嚙りして、所謂生意氣者流となり、次いで位置なき爲め、失意落膽して終に社會の毒蟲、害物、政治上惡種の人間と化し了つたことである。

英人の實行した英式教化の試験は、随分思ひ切つた事業であつたのである。謂はゞ冒險的仕事であつたのである。何故なれば之て英人は印度人に智育徳育上自分等の大して之に優つて居るものでない事を知らしたやうなものであるからである。蓋し或は此の優等人種てふ事が、英人の印度人を支配する一大鎖鑰であつたかも知れぬのである。

印度人中少しく知識の發育した者は、精神上英人の彼等に優るとを非認して居るのである。否中には自ら英人に優ると公言して居る者もある。スワデシ運動の巨魁の如きは、英人を愚物呼はりをして居る。彼等は、吾々は斯の無智愚鈍の輩が如何にして印度を支配するに至つたかを解するに苦むなどと怒號し

て居るのである。此の種の印度人は下の如き考を有つて居るやうである。即ち印度民の多數を占むる者は、自分等より一層知識劣等のものである。此等は優等者たる自分等に反抗し能はざるものである。よつて今英人を突き除けてさへしまへば、此等を支配するものは自分等を措いて外にはないと。

以上を對し英人は頗る樂觀をして居る。英人は此種の印度人を多辯者、傲語者と言つて居る。卑怯で取るに足らない鼠輩と輕蔑して居る。併し此の鼠輩中には聲望ある辯護士もあり、有力熱烈な新聞記者もあり、又各地を巡歴して煽動的演説によつて、不穩の種を蒔きつゝある者もある。

抑々英式教化の試験が思ひも寄らぬ重大の結果を生じたことは、今日心ある英國の政治家は、皆之を認めて居る。去り乍ら一度踏み出した道は、戻ることが出来ても一度遣り掛けた教育事業は、之を中止する譯にも行かぬのである。故に英人は目下之が改良を試みつつある。従來高等教育にのみ力を入れて大に怠つて居た中等初等の教育を改善普及して、一層着實の人間を造つて、以て煽動的人物の減少を計つて居る。是れは非常に好い事である。併し乍ら果して是れてその目的が達しらるゝや否やは大なる疑問である。

□ 印度國民の鑄造

前既に述べた通り、印度は人種の上から觀ては決して統一されて居る國ではないのである。歴史の上から觀ても亦統一されたとの無い國である。然るに此の開闢以來未だ曾て統一されたとの無い國を始め、政治上、一團に打固めたのは英人である。今日ては中央政府の意は國の隅々迄行き渡るのである。行はるゝのである。斯かる事は印度人が未だ曾て夢にだも見たことのない事である。又是れまで陳紛漢て解らなかつた異言語の上に、統一的言語まで布かれた様なものである。今では教育ある印度人は互に英語を以て相通ずることが出来るのである。是に於て印度人も少なくも教育ある者は、印度共同の利益をふことの必要を見るに至つたのである。言ひ換れば印度國民といふ一塊團の鑄造の必要を認むるに至つたのである。數十年來世界を通じて聯邦制の漸次増加しつつあるとは人の皆知る通りである。北米合衆國は言はずもがな、墨西哥でも、南米諸國でも、瑞西でも、獨逸でも、皆是れ聯合制である。聯合制は國民といふ感覺を強くするものである。強くする必要は無論之が向ふを張る他、國民